

○末の世まで云々
末代まで傳へられる
程の名歌を残せし人

五月の事にはべりけり。けにいかにとおほゆるふしぐ、末の世まで傳はるばかりの事
いひおく人、優にはべるかしの。さてさきの東宮におくれ奉りて、限りなく歎かせ給ふ。
同じ年朱雀院生れさせ給ひ、われ后に立たせ給ひけむこそ、さまぐ御なけき御よろこび
かきませたるこ、ちつかうまつれ。世に太后とこれを申す。

一 六十三代

次の帝冷泉院天皇と申しき。御諱憲平。これ村上天皇の第二の皇子なり。御母皇后

○五條の家 在衡の
邸宅。

宮安子と申しき。右大臣師輔のおとこの第一の御むすめなり。この帝天曆四年庚戌五月二
十四日在衡のおとこのいまだ從五位下にて、備前介ときこえけるをりの五條の家にて生れ
させ給へり。同じ年七月二十三日東宮に立たせ給ふ。應和三年癸亥二月二十八日御元服。
御年十四。康保四年丁卯五月二十五日御とし十八にて、位につかせ給ふ。世をたもたせ給
ふこと二年。寛弘八年辛庚十月二十四日御とし六十二にてうせさせおはしましけるを、三
條院位につかせ給ふ年にて、大嘗會などのびけるをぞ、折悪しと世の人申しける。

一 六十四代

次の帝圓融院天皇と申しき。御諱守平。これ村上の帝の第五の皇子なり。御母冷泉

○いさ聞きにくく云
云 藤原氏が西の宮
左大臣源高明を太宰
権帥に流し其の女婚
爲平親王の立坊を妨
けて守平親王を東宮
に立て奉りし事件。
○宿世 前世の因縁
○御母方のおほぢ
外祖父。
○いまさぬあま云々
經邦死後の事なれ
ど贈位は一身一家の
名譽である。

○中后 醍醐帝の後
登子を太后、後三條
帝の後茂子を今后と
いふ類で當時の異名
○女十の宮 選子内
親王。
○ほのく、ほのか
に。
○そのミマまり云々
其の忘れ形見の女
宮は選子であるよ。
選子は賀茂の齋院と
なりて後五代の朝に
わたり永く坐せは大
齋院といふ。

院の同じ御腹におはします。この帝天徳三年己未三月二日生れさせ給ふ。この御門の東宮
に立たせ給ふほどは、いと聞きにくくいみじき事どもこそ侍れな。これはみな人のしろし
めしたる事なれば、事も長し、とゞめ侍りなむ。安和二年己巳八月十三日にこそは位につ
かせ給ひけれ、御歳十一にて。さて天祿三年壬申正月三日御元服、御とし十四。世をたも
たせ給ふ事十五年。御惱ありて御出家、法名金剛法と申しき。正暦二年二月十二日う

せさせ給ふ。御年三十三。

母后の御とし二十三四にて、うちつゞきこの御門と冷泉院と生み奉り給へる、いとやん
ごとなき御宿世なり。御母方のおほぢは、出雲守從五位下藤原經邦といひし人なり。する
の世には賞せさせ給ひてこそは、贈三位したまふと、うけたまはりしか。いまさぬあとな
れど、此の世の光はいと面目ありかし。中后と申す、この御事なり。

女十の宮うみ奉り給ふたび、かくれさせ給へりし御なけきこそ、いとかなしくうけたま
はりしか。村上の御日記御覽じたる人もおはしますらむ。ほのく傳へ承るに、およばぬ
心にもいとあはれに忝くさぶらふな。そのとゞまりおはします女宮こそは大齋院よ。

一 六十五代

次の帝花山院天皇と申しき。御諱師貞。冷泉院の第一の皇子なり。御母贈皇后宮懷

○世尊寺 伊尹の一
條の家で、後に此の
家を寺にせし故いふ

○みそかに ひそか
に。

○花山寺 山城國。

○おりおはしましけ
る夜 御退位の夜。

○顯證 あらはなる
事。

○わたり給ひぬるに
は 東宮へ渡り給ひ
し後なれば是非なし

○栗田殿 兼家の子
の道兼。

○さわがし 促し。

○弘徽殿の女御 法
住寺爲光の女怪子。

○破りのこして 破
らずに残して。

子と申す。太政大臣伊尹のおとこの第一の御女なり。この帝安和元年戊辰十月二十六日母方の御おほちの一條の家にて生れさせ給ふとあるは、世尊寺のことにや。その日は冷泉院の御時の大嘗會の御禊あり。同じ二年己巳八月十三日東宮に立たせたまふ。御とし二歳。天元五年壬午二月十九日御元服させ給ふ。御年十五。永觀二年甲申八月二十八日位につかせ給ふ。御年十七。寛和二年丙戌六月二十三日の夜あさましくさぶらひし事は、人にも知られさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道させ給へりしこそ。御年十九。世をたもたせ給ふ事二年。その後二十二年はおはしましき。

あはれなることはおりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸よりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかりければ、「顯證にこそありけれ、いかゞすべからむ。」とおほせられたるを、「さりとてとまらせ給ふべきやうはべらず、神璽寶劍わたり給ひぬるに。」と栗田殿のさわがし申し給ひけるは、まだ帝出でさせおはしまさざりけるさきに、手づからとりて、東宮の御方に渡し奉り給ひてければ、歸りいらせ給はむことはあるまじくおほして、しか申させ給ひけることぞ。

さやけき影を、まばゆくおほしめしつるほどに、月のかほにむら雲のか、りて、すこしくらがりのきければ、「わが出家は成就するなりけり。」とおほせられて、あゆみ出でさせ給ふほどに、弘徽殿の女御の御ふみの、日ごろ破りのこして御目もえはなたず御覽じけるを

○そらなきし給ひけ
るは はは威動詞。
○晴明 天文博士安
倍晴明。

○車に裝束さらせよ
早く車の支度せよ

○さりとも 御出家
の志を起せしもの

○かつく 先づ先
づ。

○式神 陰陽家の使
役する鬼神。

○まかり出でて云々
歸宅して父兼家に

も俗體を今一度見せ
出家の事を報らせて

必ず歸參せん。
○御弟子にてさふら

はむ 佛弟子なら
ん。

○東三條殿 兼家。
○おこなしき人々

頭だちたる人々。
○かゞし 彼某。

おほしいでて、「しほし。」とてとりにいらせ給ひけるほどぞかし、栗田殿の、「いかに思召しならせおはしましぬるぞ、たゞ今すぎさせ給はば、おのづから障りもいでまうできなむ。」とそらなきし給ひけるは。

さて御門より東さまにゐるていだしまるらせ給ふに、晴明が家の前をわたらせ給へば、みづからの聲にて、手をおびたゞしくはた／＼とうつなる。「帝おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、既になりけりとみゆるかな、参りて奏せむ、車に裝束とらせよ。」といふ聲をきかせ給ひけむは、さりとともあはれに思召しけむかし。「かつく／＼式神一人内裏へまるれ。」と申しければ目にはみえぬものの戸をおしあけて、御うしろを見まらせけむ、「只今これよりすぎさせおはしますめり。」といらへけるとかや。その家は土御門町口なれば、御道なりけり。

花山寺におはしましつきて、御ぐしおろさせ給ひて後にぞ、栗田殿は、「まかりいでておとゞにもかはらぬすがた今一度みえ、かくと案内も申して、必ず参りはべらむ。」と申したまひければ、「朕をばはかるなりけり。」とてこそなかせたまひけれ。あはれにかなしきことなりな。日ごろよく御弟子にてさふらはむと契りて、すかし申したまひけむがおそろしさよ。東三條殿はもしさる事やしたまふと危さに、さるべくおとなしき人々ながしかゞしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りにそへられたりけれ。京の程はかくれて、

○堤 賀茂河堤。
 ○うちいで 隠れず
 に。
 ○おして人など云々
 無理に他人が道兼
 を出家させはしない
 かまて。

堤のわたりよりぞ、うちいでまるりける。寺などにては、もしおして人などやなし奉ると
 て、一尺ばかりの刀どもをぬきかけてごまもり申しけるとぞ。〔寛弘五年二月八日うせ
 させ給ふ御年四十一。〕

一 六十六代

次の帝みかど一條院天皇と申しき。御諱みこと懷仁。これ圓融院の第一の皇子なり。御母皇后宮
 詮子せんしと申しき。これ太政大臣兼家のおとゞの第二の御女なり。此の帝天元三年庚辰六月一
 日兼家のおとゞの東三條の家にて生れさせ給ふ。東宮に立たせ給ふこと永觀二年甲申八月
 二十八日なり、御とし五歳。寛和二年丙戌六月二十三日位につかされたまふ、御とし七歳。
 永祚二年庚寅正月五日御元服、御とし十一、世をたまたせ給ふ事二十五年。御母詮子は十九に
 てこの帝を生み奉り給ふ。東三條の女院とこれを申す。この御母は、攝津守藤原仲正のむ
 すめなり。

一 六十七代

次の帝みかど三條院の天皇と申しき。御諱みこと居貞。これ冷泉院第二の皇子なり、御母贈皇后
 宮超子てうしと申しき。太政大臣兼家のおとゞの第一の御女なり。この帝は貞元元年丙子正月三

日に生れさせ給ふ。寛和二年丙戌七月十六日東宮に立たせたまふ。おなじ日御元服なり。
 御年十一。寛弘八年辛亥六月十三日位につかせ給ふ。御年三十六。世をたまたせたまふこ
 と五年。

○一品の宮 三條院
 皇女陽明門院禎子内
 親王。
 ○辨の乳母 加賀守
 藤原順時の女。
 ○あご 吾が見て親
 愛の詞。
 ○かなしうし奉らせ
 可愛き者に思召し
 ○御ぐしのいさをか
 しゆ云々 御髪の願
 る美しけなるを。
 ○三條院の御券 三
 條院譲與の田宅莊園
 等の所有主を證する
 手形。
 ○まさなくも 不都
 合にも。

院にならせ給ひて、御目を御覽ぜざりしこそ、いとみじかりしか。この人の見奉るに
 は聊かかはらせ給ふことおはしまさざりければ、そらごとのやうにぞおはしましける。御
 まなこなども、いと清らかにおはしましけり。いかなるをりにか、時々御覽する時もあ
 りけり。みすのあみ緒の見ゆるなどもおほせられて、一品の宮ののほらせ給へりけるに、
 辨の乳母の、御ともにさぶらふが、さしぐしを左にさされたりければ「あごよ、など櫛は
 あしくさしたるぞ。」とこそ仰せられけれ。この宮をことの外にかなしうし奉らせ給ひて、
 御ぐしのいとをかしけにおはしますを、さぐり申させ給ひては「かくうつくしうおはする
 御ぐしをえみぬこそ心うくくちをしけれ。」とてほろ／＼となかせ給ひけるこそ、あはれに
 はべれ。わたらせ給ひけるたびには、さるべき物を必ず奉らせ給ふ。三條院の御券をぐし
 て、かへりわたらせたまへりけるを、入道道長殿御覽じて「かしこくおはしける宮かな、幼き
 御心に、ふるほぐとおほしてうち捨てさせ給はで、もてわたらせ給へるよ。」と興おきじ申させ
 給ひければ「まさなくも申させたまふものかな。」とて、御乳母めのとたちは笑ひ申させたまひけ
 り。冷泉院も奉らせ給ひけれど、「昔より帝王みかどの御領にてのみさぶらふ所を、今更にわたく

○便なき事 不都合の事。
 ○代々の渡り物云々 朝廷では代々譲り渡して朱雀院と同じく冷泉院も代々の御領所である。
 ○つくりひ 療治し
 ○大小寒 大寒小寒
 ○いさせ そがせ
 ○金液丹 劇薬の名
 ○桓算供奉 僧買録をいふ。供奉は供奉僧。
 ○うちはぶき 羽はたき。
 ○中堂 比叡山根本中堂。
 ○やがておこたり云 早速御快癒遊はさすとも。
 ○太秦 廣隆寺。
 ○佛のおまへより云 御堂本尊佛の正面の前から東の廂迄組入の天井(格天井)を作りて玉座す。
 ○大入道殿 兼家。
 ○おいらかに おまなく。
 ○齋宮 三條院皇女當子。

し物になりはべらむは便なき事なり、おほやけものにてさぶらふべきなり。」とてかへし申させ給ひてけり。されば代々の渡り物にて、朱雀院のおなじ事にはべるべきにこそ。この御目のためには、よろづにつくろひおはしますけれど、そのしるしある事もなき、いとみじき事なり。もとより御風おもくおはしますに、醫師どもの大小寒の水を御ぐしにいさせ給へと申しければ、こほりふたがりたる水を、多くかけさせ給ひけるに、いといみじくふるひわな、かせ給ひて、御色もたがひおはしましたりけるなむ、いとあはれにかなしく人々見まるらせけるとぞうけたまはりし。御病により、金液丹といふ薬をめしたりけるを、その薬くひたる人は、かく目をなむやむなど人は申ししかど、桓算供奉の御ものけにあらはれて申しけるは、「御くびにのりて、左右の羽をうちおほひ申したるに、うちはぶきうごかすをりに、すこし御覽するなり。」とこそいひはべりけれ。

御位さらせたまひし事も、多くは中堂にのぼらせ給はむとなり。さりしかど、のぼらせ給ひて、さらにその験おはしますざりしこそくちをしかりしか。やがておこたりおはしますとも、少しのしるしはあるべかりし事よ。さればいと山の天狗のし奉るところ、さまざまにきこえ侍るめれ。太秦にもこもらせ給へりき。さて佛のおまへより、東の廂に、くみればせられたるなり。御烏帽子せさせ給へりけるは、大入道殿にこそ似奉り給へりけれ。御心ばへいとつかしうおいらかにおはしまして、世の人いみじうこひ申すめり。齋

○別れの御極 齋宮が伊勢下向の時大極殿で帝自ら齋宮の御髪にさし給ふ極。
 ○入道殿 道長。

○おほつかなく 不審に。
 ○すべらぎの御事云 従来帝の御事を申した例に違はず語らう。

○世のおや一切衆生云々 法華經譬喻品「衆聖中尊世間之父、一切衆生皆是吾子云云。」

宮のくだらせ給ふ別れの御櫛ささせ給ひては、かたみに見かへらせ給はぬことを、「思ひかけぬにこの院はむかせたまへりし、あやしとは見奉りしものを。」とぞ、入道殿おほせられける。

一 六十八代

後一條 次の帝常帝。御諱敦成。これ一條院の第二の皇子なり。御母今の入道殿下の第一の御女なり。皇太后宮彰子と申す。たゞ今たれかはおほつかなくおほしおもふ人の侍らむ。

されどまづすべらぎの御事を申すさまにたがへはべらぬなり。寛弘五年戊申九月十一日土御門殿にて生れさせたまふ。同じ八年辛亥六月十三日東宮に立たせ給ひき、御年四歳。長和五年丙辰正月二十九日位につかせ給ひき、御年九歳。寛仁二年戊午正月三日御元服、御とし十一。位につかせ給ひて十年にやならせたまふらむ。ことしは萬壽二年乙丑の歳とこそ申すめれ。

おなじ帝王とも申せども、御後見多くたのもしくおはします。御おほちにてたゞ今の入道殿下、出家せさせ給へれど、世のおや一切衆生を一子の如くはぐ、みおほしめす。第一の御をぢ只今の關白左大臣、一天下をまつりごちておはします。次の御をぢと申すは、内大臣にて左大將かけておはします。つぎの御をぢと申すは、大納言春宮大夫、中宮權

○御後見のかぎりにて 御後見人許りで
○次第のまゝに 長幼の順序に従ひて。

○おほして 養育して。

○鏡をかけ給へるに 鏡をかけて物を映す如く明瞭に語られしに。

○くしけの鏡 櫛箱の中の鏡。

○うちはさめておき 櫛箱の中へさしこんでおき。

○かつは 一つには
○ゆゆする 愉快がる。

大夫、中納言などさままゝにておはします。かやうにおはしましあへば、御後見おほくおはします。昔も今も帝みかどかしこしと申せど、臣下のあまたして傾け奉る時は、傾き給ふものなり。さればたゞ一天下はわが御後見のかぎりにておはしませば、いと頼もしくめでたき事なり。昔一條院の御なやみの折、仰せられるは、「すべからくは次第のまゝに、一の皇子をなむ東宮とすべけれど、うしろみすべき人のなきにより思ひかけず。されば敦成二の宮をば立て奉るなり。」とおほせられけるも、此の當帝ちうたひの御事よ、けにさる事ぞかし。

帝王みかどの御次第は申さでもありぬべけれど、入道殿下の御榮華も、なにより開け給ふぞとおもへば、まづ帝后の御ありさまを申すなり。植木は根をおほしてつくりひたてつればこそ、枝もしけりて木の實もむすべや。しかればまづ帝王の御つゞきをおほえて、次に大臣の御つゞきはあかさむとなりといへば、大犬丸をとこいいでくといみじうめでたしや。こゝらのすべらぎの御ありさまをだに、鏡をかけ給へるに、まして大臣などの御事は年頃やみにむかひたるに、朝日のうらゝかにさし出でたるにあへらむこゝちもするかな。又翁らが家の女どものもとなるくしけの鏡の影みえがたく、とぐわざもしらず、うちはさめておきたるにならひて、あかくみがける鏡にむかひて、わが身のかたちうつるに、かつはかけはづかしく、又いとめづらしきにも似たまへりや、あな興きんありのわざやな。更に翁二十十年の命はけふのびぬる心ちし侍り。」といたくゆゆするを、見きく人々、をこがまし

○おろか おろそか

○うめきて 苦吟して。

○あふひ八つ花形の鏡 葵葉の如き五稜形の鏡、八稜形の鏡

○螺鈿らでんのはこ 青貝をすりこんだ箱。

○かねしろくて云々 地金がよくて磨かずとも斯く明らかなり。

○あやしなから云々 翁達の話は奇怪ながら信すべき氣色ありて。

○よしなし事 無益なる鏡の講釋。

○額に手をあてて 非常に喜ぶ時又は熱心に祈念する時の貌

うをかしけれども、いひつゞくる事どもは、おろかならずおそろしければ、物もいはでみなききるたり。

大犬丸をとこいできき給へや。歌ひとつつくりてはべり。」といふめれば、世繼、「いと興ある事なり。」とて、「うけたまはらむ。」といへば、繁樹いとやさしけにいひいづ。

あきらけき鏡にあへばすぎにしも今ゆくすゑの事もみえけりといふめれば、世繼いたく感じて、あまたたび誦よみしてうめきて返し、

すべらぎのあともつぎくかくれなく新たに見ゆるふる鏡かも
「今やうのあふひ、八つ花形の鏡、螺鈿らでんのはこにいたるにむかひたる心ちしたまふや、いでやそれはさきらめけど曇りやすくぞあるや。いかにいにしへの古代の鏡はかねしろくて人手にふれねど、かくぞあかき。」など、したりがほに笑ふ顔つき、繪にかかまほしく見ゆ。あやしなから、さすがなるけつきて、をかしくまことにめづらかになむ。

世繼「よしなし事よりは、まめやかなる事を申し出でむ、よくくたれもくきこしめせ。けふの講師の説法は、菩提の爲とおほし、又翁らが説く事は、日本紀をきくとおほすばかりぞかし。」といへば、僧俗そうぶつ一けに説經説法おほくうけたまはれど、かく珍らしき事宣のたまふ人は、さらにおはせぬなり。」とて、年老いたる尼法師ども、額に手をあてて信をなしてききるたり。「世繼はいとおそろしき翁にはべる。眞實の心おはせむ人は、などかはづかし

○うかべたてて誦
んじて。
○一乗の法 法華經
の事。法華經方便品
「十方佛土中、唯有一
乘法、無二無三
云々。」
○法文聖教 佛書佛
典。
○魚の子多かれや云
云 涅槃經第十三、
「譬如魚母多有胎
子、成熟者少、如菴
羅花多果少云々。」
菴羅は木瓜の類。
○たからの君 大切
なる主君、道長。
○心をみなへて心
を一つにして。
○みなおはしけり
澤山あつた。

とおほさざらむ。世の中を見しりうかべたててもちてはべる翁なり。目にも見、耳にもき
きあつめて侍る萬の(よつ)ことの中に、只今の入道殿下の御ありさま、古をきき、今を見はべる
にも、二もなく、三もなくならびなくはかりなくおはします。たとへば一乗の法の如し。
御ありさまのかへすくめでたきなり。世間の太政大臣攝政關白と申せど、始め終りめで
たきことは、えおはしまさぬことなり。法文聖教の中にも、のたまへるなるは、魚の子多
かれど、まことのいとなる事はかたし、菴羅(あんな)といふる木あれど、このみを結ぶ事かた
しとこそは、説きたまふなれ。天下の大臣公卿の御中に、このたからの君のみこそ、世に
珍らかにおはすめれ。今行末もたれの人かかばかりはおはせむ、いとありがたくこそ侍れ
や。たれもく心をとなへてきこしめせ。世にある事は何事を見のこし聞きのこし侍ら
む、この世繼が申す事どもはしも知りたまはぬ人々多くおはすらむとなむ、思ひはべる。」
といふめれば、「すべてく申すべきにも侍らす。」とてききあへり。
世はじまりてのち大臣みなおはしけり。されど左大臣右大臣内大臣太政大臣と申す位、
天の下になりあつまり給へる、かぞへてみなおほえて侍り。世はじまりて後、いまに至る
まで、左大臣三十人、右大臣五十七人、内大臣十二人なり。太政大臣は古の御門の御代に
は、たはやすくおかせ給はざりけり。あるひは、帝の御おほち、あるひは、御門の御をぢ
ぞなり給ひける。

○わがまの太政大臣
贈官ならで存命中
殊更になれる太政大
臣。
○八省 中務、式部、
治部、兵部、刑部、民
部、大藏、宮内。
○百官 内外の諸官
○あがりたること
上代の事。
○職員令 令の中の
職員を掲げる條
○おほろけの人 曹
通の人。
○その人なくは云々
職員令「太政大臣
一人右師範一人(中
略)無其人則闕云
云。」

又しかの如くに、帝王の御おほち、をぢなどにて、御うしろみし給ふ大臣納言、かすお
ほくおはす。うせ給ひて後贈太政大臣などになり給へるたぐひ、あまたおはすめり。さや
うのたぐひ七人ばかりやおはすらむ。わざとの太政大臣はなりがたく、すくなくぞおはす
る。神武天皇より三十七代にあたり給へる孝徳天皇と申す帝の御代にや、八省百官左右大
臣内大臣なりはじめ給へらむ。左大臣には安倍の倉橋麻呂、右大臣には蘇我の山田の石川
麻呂、(これは元明天皇の御おほちなり。石川麻呂の大臣、孝徳天皇位に即き給ひての元年
乙巳大臣になり、五年己酉東宮のために殺され給へりところは、これはあまりあがりたる
ことなり。)内大臣には中臣の鎌子の連なり。(年號いまだあらざれば月日申しにくし。)
又三十九代にあたり給へる帝、天智天皇こそは、はじめ太政大臣を任したまへりけ
れ。それはやがてわが第四の皇子におはします大友皇子なり。正月に太政大臣になり、同
じ年十二月二十五日に位につかせ給ふ。(天武天皇と申しき。代をしらせ給ふこと十五年。)
神武天皇より四十一代に當らせ給ふ持統天皇、また太政大臣に高市皇子をなし給へり。
天武天皇の皇子なり。この二人の太政大臣、一人はやがて帝となりたまへり。高市皇子は
大臣ながらうせ給ひにけり。その後太政大臣いと久しくたえたまへり。たゞし職員令に、
太政大臣にはおほろけの人はなすべからず、その人なくばたゞにおかるべしとこそあなれ
ば、おほろけの位にははべらぬにや。四十二代にあたりたまふ、文武天皇の御時に、年號

さだまりて大寶元年といふ。

文徳天皇の齊衡四年丁丑二月十九日、帝の御をぢ、左大臣従一位藤原良房のおとゞ、太政大臣になりたまふ。御とし五十四。この大臣こそは、はじめて攝政もしたまひつれば、やがてこの殿よりして今の閑院公季の大臣まで太政大臣十一人つゞき給へり。たゞしこれよりさき、大友皇子高市皇子くはへて十三人の太政大臣なり。太政大臣になり給ひぬる人は、うせ給ひて後必ず諡號いみなといふものあり。されども大友皇子やがて帝になりたまへり。高市皇子の御いみなおほつかなし。

○二所 兼家、道長
○大織冠 藤原鎌足
○あなづりごみ 輕
○何事もおほされ
云々 上代の事を話
したとて了解し難か
らんもの之に之を
説明すれば話も長く
なり且つ講師のお話
の始まる時來りて己
の物語も興ざめん。
○ふぢさし 藤左子
冬嗣は左大臣なれば
斯くいふ。
○たゞ今の入道殿
道長。

又太政大臣といへど、出家しつればいみななし。さればこの十一人つゞかせ給ひたる太政大臣二所は出家し給ひつればいみなおほせず。この十一人の太政大臣たちの御次第ありさま、はじめ終り申し侍らむとおもふなり。流れをくみて源をたづねてこそは、よくはべるべきを、大織冠よりはじめ奉りて申すべけれど、それはあまりあがりてはべり。このきかせ給はむ人々もあなづりごとには侍れど、何事とおほされざらむものから、ことおほくて講師おはしなば口惜し。されば帝王の御事も、文徳の御時より申して侍れば、その帝の御おほちの鎌足かまたりのおとゞよりは第六にあたりたまふ。世の人はふぢさしと申すこと冬嗣のことかとこそは申すめれ。その冬嗣のおとゞより申し侍らむ。その中に、おもふに、たゞ今の入道殿、よにすぐれ

させ給へり。

一 左大臣冬嗣

このおとゞは、内麻呂のおとゞの三郎。御母は正六位上飛鳥部奈止麻呂の女なり。公卿にて十六年。大臣の位にて六年。田邑たむらの御おほちにおはします。かるがゆるに嘉祥三年庚午七月十七日贈太政大臣になり給へり。閑院の大臣と申す。このおとゞは、大方をのこ子十一人おはしたるなり。されど、くだくしき女子たちの事は、くはしく知り侍らず。ただし田邑の帝の御母后贈太政大臣長良ながらのおとゞ、太政大臣良房のおとゞ、右大臣良相のおとゞは、ひとつ御腹なり。

一 太政大臣良房

このおとゞは、左大臣冬嗣の次郎なり。天安元年丁丑二月十九日太政大臣になり給ふ。同じ年四月十九日従一位、御とし五十四。水尾の御門は、御孫におはしませば、即位の年攝政の詔ありて、年官年爵賜はり給ふ。貞觀八年丙戌關白にうつり給ふ、御とし六十三。うせ給ひて後の御諡號、忠仁公と申す。又白河の大臣、染殿の大臣とも申しつたへたり。但しこのおとゞは、文徳天皇の御をぢ、太皇太后宮明子の御父、清和天皇の御祖父にて

○内麻呂 眞宿の子
で長岡大臣ともいふ

○水尾の御門 清和
天皇。

○年官年爵 毎年任
補する内官即ち京官
一人、諸國の掾一人
目一人、史生一人を
給するを年官、従五
位下一人を給するを
年爵といひ、實際は
其の官に屬する配分
を所得す。

○さきのおほいまうちぎみ 前の太政大臣の意。

○多かる中にも 古今集中には其の歌多くある中にも。

○染殿の后 明子。

○年ふれはの歌 古今集卷部。

○白河 法勝寺。

○素性ぎみ 素性法師。

○血の涙の歌 古今集哀傷部。君なき今は白河は血涙で赤河といふべしの意。

○物を申し云々 話の勢ひでかかる知れた事も申すなり。

○御このかみの云々 良房の御兄長良中納言が良房に格別官位を超えられた折は

太政大臣准三宮の位にのほらせたまひ、年官年爵の宣旨くだり、攝政關白などし給ひて、十五年こそはおはせしか。おほかた公卿にて三十年、大臣の位にて二十五年ぞおはせし。此の殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣攝政し給ふ、めでたき御有様なり。

和歌もあそぼしけるにこそ、古今にもあまた侍るめるは、さきのおほいまうちぎみとはこの御事なり。多かる中にも、いかに御心ゆき、めでたくおほえてあそぼしけむと、おしはからる。御むすめの染殿の後の御まへに、櫻の花かめにさされたるを御覽じて、かくよませ給へるにこそ。

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

后を花にたとへ申させ給へるにこそ。かくれ給ひて、白河にをさめたてまつる日、素性

ぎみのよみたまへりしは、

血のなみだ落ちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそありけれ

みな人しろしめしたらめど、物を申しはやりぬればさぞ侍る。

かくいみじきさいはひ人の、子のおはしまさぬこそくちをしけれ。御このかみの長良の

中納言ことの外にこえられ給ひけむをり、いかばかりからうおほされ、又世の人もことの

ほかに思ひ申しけめども、その御末こそ、今にさかえおはしますめれば、ゆく末はことの

外にまさり給へりけるものを。

一 右大臣良相

このおとゞは、冬嗣のおとゞの五郎、御母白河の大臣におなじ。大臣の位にて十一年、贈正一位西三條^{清和}大臣と申す。淨藏^{じやうざう}定額^{ぢやうていごく}を御祈りの師にておはす。千手陀羅尼の験徳かうぶりたまへる人なり。此の大臣の御女子の御事よくしらす、ひとりぞ水尾の御時の女御、をのこ子は、大納言常行の卿と聞えし。御子二人おはせしも、五位にて典藥助、主殿頭などいひて、いとあさくて、やみ給ひにき。かくばかり末さかえ給ひける中納言殿^{長良}をやへやへの御弟にて、越え奉り給へりける御あやまちにやとこそおほえ侍れ。

一 權中納言從一位左兵衛督長良

この中納言は冬嗣のおとゞの太郎、母は白河大臣西三條大臣に同じ。公卿にて十三年、陽成院の御時に御おほぢにおはするが故に、元慶元年丁酉正月に贈左大臣正一位、又贈太政大臣^{もとつね}枇杷^{びわ}の大臣と申す。この殿の御をのこ子六人おはせし、その中に基經^{もとつね}の大臣すぐれ給へり。

一 太政大臣基經

○淨藏定額 淨藏は三善清行の第八子。定額とは定額僧にて教願寺に住する定数の僧侶。
○千手陀羅尼 大悲呪。千手觀音の三昧を示せる陀羅尼。
○女御 多美子。
○典藥助 典藥寮の次官。
○主殿頭 主殿寮の長官。
○あさくて 官位低くて。
○やへ／＼の御弟 最末の弟。

- 御むすめ 穉子。
- 大夫人 天子の御生母たる夫人、女御の尊稱。
- 小松の御門の御母 光孝帝の御母澤子
- きやうさく 警策 物事の勝れた事。
- あはれ君かな 嗚呼賢き君かな。
- 大饗 大臣に任ぜられた人が大納言以下を饗應する式。
- 盛る 器に盛る。
- 尊者 大饗の時の正客。
- 陪膳する人 御給仕人。
- 親王 光孝帝。
- 御さながらを云々 御燈火を靜かに消された。
- 陽成院あり云々 院の御讓位を評定する陣の座に侍ひ給ふ
- 融 左大臣源融。

このおとゞは、長良の中納言の三郎におはす。このおとゞの御むすめは、醍醐の御時の后、朱雀院竝に村上二代の御母后に坐す。此の大臣の御母は、贈太政大臣總繼の女、贈正一位大夫人乙春なり。陽成院位につかされたまひて、攝政の宣旨かうぶり給ふ、御年四十一。寛平の御時、仁和三年丁未十一月二十一日關白にならせ給ふ。御年五十六にて寛平三年正月十三日うせさせ給ひにき、御いみな昭宣公と申す。公卿にて二十七年、大臣の位にて二十年、世をしらせ給ふ事十餘年かとおほえ侍る。世の人堀河の大臣と申す。

小松の御門の御母、この殿の御母のはらからにおはします。さて兒より小松の御門をば親しく見奉らせ給ひて、ことにふれて、きやうさくにおはしますを、あはれ君かなと見奉らせたまひけるが、良房のおとゞの大饗にや、昔は親王たち必ず大饗につかせ給ふことにて、わたらせ給へるに、雉の足は必ず盛る物にて侍るを、いかゞしけむ、尊者の御前にとりおとしてけり。陪膳する人親王の御前のをとりて、まどひて尊者のおまへにすうるを、いかゞおほしめしけむ、おまへの御となぶらを、やをらかい消たせ給ひける。この大臣はそのをりは下臈にて座の末にて見奉らせ給ふに、いみじくもせさせ給ふものかなと、いよいよ見めで奉らせ給ひて、陽成院ありさせ給ふべき陣の定めに、さぶらはせ給ふ。融のおとゞやんごとなくて、位につかせ給はむ御心ふかくて、「いかゞは近き皇胤をたづねば、融らも侍るは。」といひ出でたまへるを、この大臣こそ、「皇胤なれど姓を賜はりてたゞ人にて

- さるべく契りおかせたまへるにや 前世の因縁にや。
- 深草の山 山城國
- 勝延僧都 伯耆守宗定の孫、大和守行廣の子。
- うつせみの歌 古今集哀傷部。うつせみは蝶。
- 深草の歌 古今集哀傷部。
- はれくしき料 表立ちた事の爲。
- 地形のいさみじきなり 地勢の甚だ勝れた所である。
- 川 堀川。
- ひらき柱 橋の兩端にありて撥寶珠のついた柱。
- をば 感動詞。
- 尊者の御車云々 尊者の車が特別に見えるは堀川以外の所にはなしと見ゆるに御つて此の高陽院殿に壓倒されてをる。

つかへて、位につきたるためしやある。」と申し出でたまへれ。さもある事なれば、この大臣の定めによりて、小松の帝は位につかせたまへるなり。帝の御末も、遙かにつたはり、大臣の末もともにつたはりつ、うしろみ申し給ふ。さるべく契りおかせたまへるにやとぞ思ひ侍る。

大臣うせ給ひて、深草の山にをさめ奉る夜、勝延僧都のよみたまへる、うつせみはからをみつ、もなぐさめつ深草の山けぶりだにたて又上野の峯雄といひし人のよみたる、

深草の野べのさくらし心あらば今年ばかりはすみぞめにさけなどは、古今に侍ることどもぞかしな。

御家は堀河院と閑院とにすませ給ひしを堀河院をば、さるべき事のをり、はれくしき料にせさせたまひ、閑院をば御物忌や、又うとき人などは參らぬ所にて、さるべくむつまじくおほす人ばかりを、御供にさぶらはせて、わたらせ給ふをりおはしましけり。堀河院は地形のいとみじきなり。大饗のをり、殿ばらの御車のたちやうなどよ。尊者の御車をば、川より東にたて、牛はみ橋のひらき柱にひきつなぎ、こと上達部の車をば、川よりは西にたてたるがめでたきをば、尊者の御車の別にことに見ゆる事は、こと所はえ侍らぬ物をやと見たまふるに、この高陽院殿にこそおされてはべるめれ。方四町にて、四面に、大

○思ひさぶらひつれの次に高陽院殿も然りを補ふ。

○世おほえ云々 人望あり等申すは勿論である。

○それぞ 忠平ぞ。
○かほもち 顔つき

○彈正尹 彈正麿の長官。
○人康親王 仁明帝の皇子。

路ある京中の家は、冷泉院のみどころ思ひさぶらひつれ。世の末になるまゝに、まさる事のみ出でまうでくるなり。

この昭宣公の大臣は、陽成院の御をぢにて、宇多の帝の御時、准三宮の位にて、年官年爵をえ給ひ、朱雀院ならびに村上のおほぢにておはします。世おほえやんごとなしと、申せばおろかなりや。御をのこ子四人おはしました。太郎左大臣時平、次郎左大臣仲平、四郎太政大臣忠平といふに、繁樹がけしき事になりて、まづうしろの人の顔うち見渡して、それぞいはゆる、この翁が寶の君貞信公におはしますとて、扇うちつかかほもち、ことにをかし。三郎にあたらせ給ひしは、從三位して宮内卿兼平の君と申してうせ給ひにき。さるは御母忠良の式部卿の親王の御むすめに、いとやんごとなくおはすべかりしかど、この三人の大臣たちを世の人三平と申しき。

一 左大臣時平

このおとゞは、基經のおとゞの太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御女なり。醍醐の帝の御時、このおとゞ左大臣の位にて、年いとわかくておはします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。

そのをり帝御年いとわかくおはします。左右大臣の政行ふべき宣旨くださしめ給へりし

○よからぬ事 時平の謔言。

○ちひさきはあへなむ 小兒は許さん。

○御おきて云々 御考へも極めていざわるくあらしかば。
○かたぐに、何かにつけて。

○こちふかばの歌 拾遺集雜春部。

○流れゆく歌 しがらみは冊で水流を堰く爲材を渡して横に竹本を結びしもの
○山崎 山城國。

に、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御とし五十七八ばかりにやおはしましけむ。ともに世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても、ことの外にかしこくおはします。左大臣は御年も若く、ざえもことのほかに劣りたまへるによりて、右大臣御おほえことの外におはしましたるに、左大臣やすからずおほしたる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲に、よからぬ事いできて、昌泰四年正月二十五日太宰權帥になし奉りてながされ給ふ。

このおとゞ子どもあまたおはせしに、女君たちは壻どりし、をとこ君たちは、みなほどほどにつけて、位どもおはせしを、それもみな方々に流され給ひて悲しきに、幼なくおはしける男君女君たち、慕ひなきておはしければ、ちひさきはあへなむと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにゐてくだり給ひしぞかし。帝の御おきてきはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを、おなじかたにだにつかはさざりけり。かたぐにいとかなしくおほしめして、御まへの梅の花を御覽じて、

こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわするな
又亭子の帝に聞えさせたまふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ君しがらみとなりてとゞめよ
なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からくおほしなけきて、やがて山崎にて出家せし

○君がすむの歌拾遺集別部。

○夕されはの歌なけきは歌きの中に木を含む。

○山わかれの歌新古今集雜部。我も再び歸洛されるかこ頼みに思はるの意。

○さりとも云々今は斯くありとも又都へ歸らるゝかと思されたのであらう。

○うみならずの歌新古今集雜部。○おざろくしき云云。仰々しき事(政治)は勿論。

○ゆえくしう仔細ありけに。○ほかめ 脇見。

め給ひて、都遠くなるまゝに、あはれに心ほそくおほされて、

君がすむ宿の梢をゆくゝとかくる、までもかへりみしはや

又播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へるけしきを、御覽じて、つくらせ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしましつきて、ものあはれに心ほそくおほさるゝゆふべ、をちかたに所々煙たつを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙なけきよりこそもえはじめけれ又雲のうきてたゞよふを御覽じても、

山わかれとびゆく雲のかへりくるかけ見る時はなほたのまれぬさりともと世を思召されけるなるべし。月のあかき夜、

うみならずたゞへる水のそこまでも清きこゝろは月ぞ照らさむこれいとかしこくあそばしたりかし。けに月日こそはてらし給はめとこそはあめれ。

まことにおどろくしきことはさる物にて、かくやうの歌や詩などをさへ、いとなだらかにゆゑくしういひつゞけまねぶに、見きく人々、めもあやにあさましくあはれにもまもりるたり。物のゆゑ知りたる人なども、むけに近く居よりてほかめせず、見聞くけしき

○はへて 引延はして。

○筑紫におはします云々 道真閉居謹慎の事。

○大貳 太宰大貳藤原興範。○都府樓云々 菅家後集「不出門」從諸落就柴荆、萬死鏡々

踏踏情、都府樓樓看瓦色、觀音寺唯聽鐘聲、中懷好逐孤雲去、

外物相違滿月迎、此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行。」○遺愛寺云々 白氏文集卷十六。○まささまに 勝りたる様に。

○九月のこよひ 醍醐帝昌泰三年。○つくらせ給へりける詩 菅家後集「丞相度年幾樂志、今宵

觸物自然悲、聲寒絡緯風吹處、葉落梧桐雨打時、君富春秋臣漸老、思無涯岸報猶遲、不知此意何安慰、飲酒聽琴又詠詩。」

どもを見て、いよくはへて物をくり出すやうにいひつゞくる程まことに希有なるや。しけき涙をのごひつゝ、興じるたり。

筑紫におはします處の御門もかためておはします。大貳のるところはるかなれども、樓のうへの瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いとちかく觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし、

都府樓樓看瓦色 觀音寺只聽鐘聲

これは文集の白居易の遺愛寺鐘鼓枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まささまにつくらしめ給へりところ、むかしの博士どもの申しけれ。

又かの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣のつくらせ給へりける詩を、帝かしこく感じたまひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫にもてくだらしめ給へりければ、御らんするに、いとゞそのをり思召しいでて、つくらせ給ひける、

去年今夜侍三清涼 秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在 此 捧持毎日拜三餘香

この詩いとかしこく人々感じ申されき。この事どもたゞちりぐなるにもあらず、かの筑紫にてつくりあつめさせ給へりけるを、かきて一卷とせしめ給ひて、後集となづけられ

○せめて ひごく。
 ○なまふがう 生不
 學で學問の未熟。
 ○いますがりしを
 ありし人をの意。
 ○餅袋 食物等を入
 れて携帯する袋のや
 うな物。
 ○かりご 破子。辨
 當箱。
 ○老のけ 老耄。
 ○すこぶる 相應に
 ○すきもの 物好き
 ○うちながめ つく
 づくミ打ちまもり。
 ○北野 山城國。
 ○そこらの松 深山
 の松。
 ○おほやけ 一條天
 皇を指す。
 ○別當 三綱の上に
 ありて一山の法務を
 統御する職。
 ○所司 上座、寺主
 都維那の三綱。
 ○つくるさもの歌
 道真の胸の満足せぬ
 間は何度作つても焼
 けんの意。

たり。又をりくの歌をかきおかせ給へりける、おのづから世に散り聞えしなり。
 世繼がわかう侍りし時、この事のせめてあはれに悲しく侍りしかば、大學の衆どものな
 まふがうにいますがりしを、とひたづね語らひとりて、さるべき餅袋わりごやうのもの調
 じて、うちぐしてまかりつ、ならひとりて侍りしかど、老のけの甚しきことは、皆こそ
 わすれ侍りにけれ。これはたすこぶるおほえ侍るなりといへば、きく人々けにくいみ
 じきすきものにも物し給ひけるかな。今の人はさる心ありなむやなど、かんじあへり。ま
 た雨のふる日、打眺め給ひて、

あめのしたかわける程の無ければやきてしぬれぎぬひるよしもなき

やがてかしこにてうせさせたまへり。夜のうちにこの北野にそこらの松をおほさしめ給
 ひて、わたりすみたまふをこそは、只今の北野の宮と申して、あら人神におはしますめれ
 ば、おほやけも行幸せしめ給ふ、いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしまし
 所は安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。

内裏やけてたびくつくらしめ給ひしも、圓融院の御時の事なり。たくみども、うら板
 どもをいとうるはしく鉤かきてまかり出でつ、又のあしたにまるりて見るに、きのふの
 うら板に、物のす、けてみゆるところのありければ、梯のほりて見るに、夜のうちに、
 蟲のはめるなりけり。そのもじは、「つくるとも又もやけなむすがはらやむねのいたまのあ

かぬかぎりは。」とこそありけれ。それもこの北野のあそぼしたまへるとこそは申すめりし
 か。

かくてこのおとゞは、筑紫におはしまして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせ給ひしぞ
 かし。御年五十九。さて後七年ばかりありて、左大臣時平のおとゞ、延喜九年己巳四月四
 日うせ給ふ、御年三十九。大臣の位にて十一年ぞおはしましける。本院の大臣と申す。此
 の時平のおとゞのむすめの女御皇子もうせ給ひぬ。御孫皇孫の東宮も、一男八條の大將保忠卿もう
 せ給ひにきかし。

○御車副 車の左右
 につきて車をやる者
 ○薬師經 薬師瑠璃
 光如来本願功德經。
 ○軍現羅大將 薬師
 經「爾時衆中、十二薬
 又大將、俱在會坐、所
 謂宮毘羅大將云々。」
 ○うちあけ 大聲で
 讀み上げ。
 ○くびる 縮る。
 ○ものはをりふし云
 云 萬事時節ミ場合
 を注意すべきなり。

この大將八條にすみ給へば、内に参り給ふ程いと遙かなるに、いかおほされけむ、冬
 はもちひのいと大きなるをば一つ、小さきをば二つやきて、焼石のやうに、御身にあてて
 もち給へりけるに、ぬるくなれば、ちひさきをば一つづ、大きなるをば中よりわりて、
 御車副になけとらせたまひける、あまりなる御用意なりかし。その世にも耳とままりて人
 のおもひければこそ、かくいひつたへ侍らめ。この殿ぞかし、病つき給ひて、さまざまの
 祈りし給ひしに、薬師經の讀經まくらがみにてせさせ給ふに、いはゆる軍毘羅大將とうち
 あけたるを、我をくびるとよむなりけりとおほしける臆病に、やがてたえいらたまへり。
 經の文といひながら、こはき物のけにとりこめられ給へる人に、けにあしくはうちあけ侍
 るかし。さるべきとはいひながら、ものはをりふしのことだにも侍る事なり。

○博雅三位 醍醐帝の御孫克明親王の三男。

○御息所 太子の妃
○本院のおまの御むすめ 時平の女衾子。

○中將の御息所 忠平の女貴子。
○大輔 保明親王の乳母。

○玄上の宰相 中納言諸葛の男。
○後朝の使 男女相會へる翌朝男より女に遣る使。

○文範 元名の子。
○殿の家司 敦忠の家に祇候して家事を司る者。

その弟の敦忠の中納言もうせ給ひにき。世にめでたき和歌の上手、管絃の道にもすぐれ給へりき。かくれたたまひてのち、御あそびなどあるをりに、博雅三位のさほる事ありてまゐられぬ時は、「けふの御あそびはとまりぬ。」と、たびくめされてまるるをみて、ふるき人々は、「世の末こそあはれなれ、敦忠の中納言のいませがかりしをりは、かかる道に此の三位の、おほやけをはじめ奉りて、世の大事におもはるべきものにとこそ思はざりしか。」とぞのたまひける。

先坊保明に御息所まゐり給ふ事、本院のおとこの御むすめ具して三四人なり。本院のは、うせ給ひにき。中將の御息所と聞えし、後は重明の式部卿の親王の北の方、齋宮の女御の御母にて、そもうせ給ひにき。いとやさしくおはせし。先坊を戀ひかなしみ奉り給ふ。大輔なむ夢に見奉りたると聞きておくり給へる、

ときのまもなぐさめつらむ君はさは夢にだに見ぬ我ぞかなしき御かへし大輔、

こひしさのなぐさむべくもあらざりき夢のうちにも夢と見しかば

今一人の御息所は玄上の宰相のむすめにや。その後朝の使に、敦忠の中納言少將にてし給ひける、宮うせ給ひてのち、此の中納言にはあひ給へるを、かぎりなく思ひながら、いか見たまひけむ、文範の民部卿播磨守にて、殿の家司にてさぶらはる、を「われは命短

○どう 族。家筋。
○あまがけりても見む云々 我が魂魄の大空を翔けても見よ

うが必ず我が言は適中せん。
○御前つがひたまはす 先拂なごもせず

○車副四人云々 大臣の車副は四人なり
○はんざふたらひ 半蒲團。湯水を注ぐに用ゐる器。

○ひさけ 提。杓具
○仕丁 雑役に驅使される者。

○つさめてごさ 毎朝。
○御めしもの、御食物。
○をしき 折敷。盆の類。

○御はん所 諸事を判する所。
○四分一の家 地所の内四分の一だけ家作せしにて手狭の家の意。

きぞうなり、必ず死なむす、その後、君はこの文範にぞあひ給はむする。」と宣ひけるを、「あるまじき事。」といらへ給ひければ、「あまがけりても見む、よにたがへ給はじ。」などのたまひけるが、まことにさていませがるぞかし。

たゞこの君だちの御中には、大納言源昇の卿の御女の腹の顯忠おとこのみぞ、右大臣までなり給へる。その位にて六年おはせしかど、すこしおほす處やありけむ、出でありき給ふにも、家のうちにて、大臣の作法をふるまひ給はず、御ありきのをりは、おほろけにて御前つがひたまはず、まれくもかすすくなくて、御車のしりぞさぶらひし。車副四人つがはせ給はざりき。御さきも時々ほのかにぞまゐりし。

又ははんざふだらひして御手すますことなかりき。寢殿のひんがしのまに棚をして、小桶にちひさきひさげくしておかれたれば仕丁つとめてごさに、湯もてまゐりていれければ、人してもかけさせたまはず、われいでさせ給ひて、御手づからぞすましける。御めしものは、うるはしく御器などにもまゐりすゑで、たゞ御かはらけにて、臺などもなく、をしきなどにとりすゑつゝ、ぞまゐらせける。儉約したまひしも、さるべき事のをりの御座と、御はん所とにぞ、大臣とは見え給ひし。かくもてなし給ひしけにや、此のおとこのみぞ御族の中に六十餘までおはせし。四分一の家にて大襲し給へる人なり、富小路の大臣と申す。これより外の君だちみな三十餘四十にすぎ給はず。その故はたゞ事にはあらず、この北野

- 御子なり 御子に
ての意。
- 山階寺 奈良の興
福寺。
- その佛 佐理。
- 岩倉 山城國。
- あさましき惡事
時平の謔言を指す。
- やまごたましひ云
云 時平は世すには
長けたりしに。
- 延喜の世間云々
醍醐帝は天下の風儀
を調へ給ひしが。
- 過差 奢侈。
- この殿 時平。
- 小薙 清涼殿の殿
上の間にある小薙。
- 職事 藏人頭より
始めて五六位の藏人
の總稱なれど普通は
藏人の意。
- 一人 左大臣。
- みさきまゐる 警
蹕。
- 御前 前驅。

の御歎きになむあるべき。
顯忠の大臣の御子、重輔しひすけの右衛門佐とおはせしが御子なり、今の三井寺の別當心譽僧
都、山階寺の權別當扶公僧都など。この君だちこそはものし給ふめれ。
敦忠の中納言の御をのこ子、あまた坐おはしける中に、兵衛佐なほながしの君とかや申しし、
そのきみ出家して往生し給ひにき。その佛の御子なり、岩倉の文慶僧都は。敦忠の御むす
めは、枇杷延光の大納言の北の方にておはしき。かくあさましき惡事を申し行ひたまへりし罪
により、此のおとゞの御すゑはおはせぬなり。さるは、やまとたましひなどは、いみじく
おはしましたるものを。

延喜の世間の作法した、めさせ給ひしかど、過差くわさをばえしづめさせ給はざりしに、この
殿制をやぶりたる御装束のことの外にめでたきをして、内に参り給ひて殿上にさぶらひた
まふを、帝こじとみ小薙より御覽じて、御氣しきいとあしくならせたまひて、職事をめして「世間
の過差の制きびしきころ、左のおとゞの、一人のといひながら、美麗びんことの外にてまるれ
る、便びんなきことなり。はやくまかりいづべきよしおほせよ。」とおほせられければ、うけた
まはる職事は、いかなる事にかと、おそれ思ひけれど、参りてわな、くく、しかぐの
事と申しければ、いみじく驚きかしこまりうけたまはりて、御隨身のみさきまゐるも制し
給ひて、いそぎまかりいで給へば、御前みまへどももあやしとおもひけり。さて本院の御門一月

- 勘當 教勸。
- さてはかりぞ 斯
様な方法に於てのみ
- えねんぜさせ云々
堪へられなかつた
- 事もみだれ 行儀
作法も亂れ。
- やんごさなくて
餘儀なくて。
- いかゞは 致し方
なし。
- 史 太政官の主典
- 事にも侍らす 容
易の事なり。
- 座につきて云々
時平著坐して聲高に
物を判決し給ふ時に
- ふみはさみ 文書
を挟みて貴人に出す
五尺程の白木の杖。
- いらなく 仰山に
- ならして 放屁し
- 生きても云々 汝
は存命中も右大臣故
我が次位であった。
- 所おき 遠慮し。

ばかりささせて、みすの外にもいで給はず、人などのまゐるにも、勘當の重ければとて、
あはせ給はざりしにこそ、世の過差は平らぎたりしか。うちくうけたまはりしかば、さ
てばかりぞしづまらむとて、帝と御心あはせさせ給へりけるとぞ。

此の左大臣ものをかしさぞ、えねんぜさせ給はざりける。笑ひたせたまひぬれば、
すこぶる事もみだれけるとか。北野と世をまつりごたせ給ひけるあひだ、非道なる事仰せ
られければ、さすがにやんごとなくて、せちにし給ふ事を、いかゞはとおほして、この大
臣のしたまふ事なれば、不便ふびんなりとみれど、いかゞはすべからむと、歎き給ひけるを、な
にがしの史まぐわんが「事にも侍らす、おのれかまへて、この御事をとゞめ侍らむ。」と申しけれ
ば、「いとあるまじき事、いかにしてかは。」など宣はせけるを、「たゞ御覽ぜよ。」とて、座に
つきて、事きびしくさだめの、しり給ふに、この史まぐわんふみばさみに文はさみて、いらなく
ふるまひて、この大臣に奉るとて、いとたかやかにならして侍りけるに、おとゞふみもえ
とらず、手わなきてやがて笑ひて、「けふは術なし、右のおとゞにまかせ申す。」とだにい
ひやり給はざりければ、それにこそ菅原の大臣御心のまゝにまつりごち給ひけれ。

また北野神にならせ給ひて、いとおそろしく神なりひらめき、清涼殿におちかゝりぬと
見えけるが、本院のおとゞ太刀をぬきさけて、「生きても我がつぎにこそものし給ひしか。
けふ神となりたまへりとも、この世にはわれに所おき給ふべし、いかでかさらではあるべ

き。」と、にらみやりて宣ひけるに、一度はしづまらせ給へりけりとぞ、世の人の申し侍りし。されど、それはかのおとゞの、いみじくおはするにはあらず、王威の限りなくおはしますによりて、理非を示させ給へるなり。

一 左大臣仲平

このおとゞは基經もとつねの大臣の次郎、御母は本院ときの大臣におなじ。大臣の位にて十三年ぞおはせし。枇杷びはの左大臣と申す。御子もたせ給はず。伊勢が集に、「ほにいでて人にむすばれにけり。」などよみ給へるは此の人におはす。

貞信忠平公よりは御兄なれども、二十年まで大臣になりおくれ給へりしを、つひになりたまへれば、大忠平きおほいどのの御よろこびの歌、

おそくとくつひに咲きぬる梅の花が植ゑおきたねにかあるらむ

やがてその花をかざして、御対面の日よろこび給へる。ひさしの大饗おほせさせ給ひけるにも、よこさまにするまらせさせ給ひけるこそ、年ごろすこしかたはら傍そばいたく思おもされける御心とけて、いかにかたみに心ゆかせ給へりけむと、御あはひめでたけれ。この殿の御心ぞ、まことにうるはしくおはしましける。みな人ききしろしめしたる事なり、申さじ。

○ほにいでて云々
古今集總部上句「花
薄われこそ下に思ひ
しか。」
○おそくとくくの歌
新古今集雜部。
○ひさしの大饗 母
屋の大饗に對して大
臣初任の時寢殿の廂
の間で行ふ大饗。
○よこさま 横座で
上座の事。仲平を上
座に坐らす。
○年ごろ云々 年來
忠平が兄仲平の爲に
氣の毒がりし心もこ
けて。
○御あはひ 御兄弟
の開柄。
○うるはしく 端正

一 太政大臣忠平

このおとゞは、これ基經のおとゞの四郎君、御母は本院の大臣、枇杷の大臣におなじ。延長八年庚寅九月二十一日攝政、天慶四年辛丑十一月八日關白の宣旨かうぶらせたまふ。公卿にて四十二年。大臣の位にて三十二年。世をしらせたまふ事二十年。後の御いみな貞信公となづけ奉る。小一條の太政大臣と申す。朱雀院すざくならびに村上の御をおほちに坐ます。

この御子五人、そのをりは我が御位太政大臣にて、御太郎は左大臣にて實賴のおとゞ、これ小野の宮殿と申しき。次郎右大臣もろひ師輔のおとゞ、これを九條殿と申しき。四郎師氏大納言と聞えき。五郎また左大臣もろた師尹のおとゞ、小一條殿と申しきかし。此の四人の君たち左右の大臣大納言などにてさしつゞきおはしましし、いみじかりし御榮華ぞかし。女子むすめひと

ところ保明は先坊の御息所にておはしましき。
つねに此の三人の大臣だちのまらせ給ふ料に、小一條のみなみかん勸解由こんげの小路には、石だ、みをぞせられたりしが、まだ侍るぞかし。宗像むねがたの明神おはしませば、洞院こういん小代こしろのむねよりおりさせ給ひしに、雨などのふる日の料とぞうけたまはりし。おほかたその一町は、人まかりありかざりき。今はあやしものも馬車うまぐるまにのりつ、みし／＼とありき侍れば、昔のなごりにいとかたじけなくこそ見給ふれ。

○三人 實賴、師輔、師尹。
○宗像の明神 本社は筑前國に在りて田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命の三座。
○小代 一本うしろさあり。
○みし／＼ 車のきしる音。

○きたなきもの 履物。
 ○ようにはべらぬ 不用である。
 ○さやうのをり云々 小一條殿は宗像明神の坐す故出産死去の折は觸穢の恐れで他所へ移るべきにより斯くいふ。
 ○たゆみなくおそろし 小一條殿は始終怖ろしい所である。
 ○うつゝに あらはに。
 ○おこなひに 救命施行の爲に。
 ○陣の座さまに 節會神事等の時上卿の事を行ふ座の方へ。
 ○南殿 紫宸殿。
 ○御帳 御帳壁。
 ○いしづき 石突。
 ○太刀の鞘尻を包む金具。
 ○さため 施行。

この翁どもは、今もおほろけにてはとほり侍らず。今日もまはり侍らむが、腰のいたく侍りつれば、術ずちなくてぞまかりとほりつれど、なほいしだ、みをばよきてぞまかりつる。南のつらのいとあしき泥をふみこみてさぶらひつれば、きたなきものもかくなりはべるなりとて、ひきいでて見す。先祖の御物はなにもほしけれど、小一條のみなむようにはべらぬ、人は子うみ死ぬる料にこそ、家もほしきに、さやうのをり、外へわたらむところはなにかはせむ。又おほかた常にもたゆみなくおそろしとこそ、この入道殿道長は仰せらるゝなれ、ことわりなりや。此の貞信公には宗像の明神うつゝ、にもものなど申し給ひけり。「われよりは御位たかくてゐさせ給へるなむくるしき。」と申したまひければ、「いと不便なる御事。」とて、神の御位は申しませ給へるなり。

この殿いづれの御時とはおほえ侍らず、思ふに延喜朱雀院の御ほどにこそ侍りけめ、宣旨うけたまはらせ給ひて、おこなひに陣の座さまにおはしますみちに、南殿なでんの御帳のうしろの程とほらせたまふに、もののけはひして、御太刀のいしづきをとりへたりければ、いとあやしくてさぐらせ給ふに、毛はむくくとおひたる手の爪ながく、刀のはのやうなるに、鬼なりけりといと恐ろしくおほしけれど、臆したるさまみえいと念ぜさせたまひて、「おほやけの救宣うけたまはりて、さだめにまるる人とらふるはなにもものぞ、ゆるさずばあしかりなむ。」とて、御太刀をひきぬきて、かれが手をとらへさせ給へりければ、まどひ

○丑寅 東北。

てうちはなちてこそ、丑寅のすみさまへまかりにけれ。思ふに夜の事なりけむかし。こと殿原の御事よりも、この殿の御事申すはかたじけなくもあはれにも侍るかなとて、聲うちかはりて鼻たびくうちかむめり。いかなりける事にか、な、月にてうまれさせ給へるとこそ人申しつたへたれ。天曆三年八月十四日にぞうせさせ給ひける。正一位贈らせ給ふ。

一 太政大臣實頼

このおとゞは忠平のおとゞの一男におはします。小野の宮の大臣と申しき。御母は寛平法皇の御むすめなり。大臣の位にて二十七年。天下執行攝政關白し給ひて、二十餘年ばかりやおはしけむ。天祿元年五月十八日うせさせ給ひにき、御年七十一。御いみな清慎公なり。和歌の道にもすぐれおはしまして、後撰にもあまた入りたまへり。おほかた何事も有識に御心うるはしくおはします事は、世の人の本ほんにぞひかれさせ給ふ。

小野の宮の南おもてには、御もとゞりはなちて出でさせたまふ事なかりき。その故は稻荷の杉のあらはに見ゆれば、明神御覽すらむに、いかでかなめけにてはいでむとのたまはせて、いみじくつゝしませ給ふに、おのづからおほし忘れぬるをりは、御袖をかづきてぞ驚きさわがせ給ひける。

○後撰 後撰集。村上帝の時梨壺の五人が撰す。
 ○有識 もの知り。
 ○世の人の本 世人の手本。
 ○御もとゞりはなちて 冠をかぶらず髪をあらはにして。
 ○なめけ 無禮。

○女御 村上帝の女御、弘徽殿女御。

○しらぬ人 敦敏の死を知らぬ人。

○手かきの上手 能書家。

○任はてて 太宰大貳の任終りて。

○ごまり 港。

○さるべき事もなし 神の崇りを受くべき事はしない。

○なべての手して 普通の書家をして。

○われにかかせ 汝に書かせ。

この大臣の御女子、女御にてうせ給ひにき。村上の御時にや、たしかにおほえ侍らす。をとこ君は、時平のおとこの御むすめの御はらに、敦敏の少將とおはせし、父おとこの御さきにかくれ給ひにきかし。さていみじうおほしなけく、あづまのかたより、うせ給へりともしらで、馬を奉りたりければ、おとこ、

まだしらぬ人もありけりあづまに吾もゆきてぞ住むべかりける

いとかなしき事なりとて目おしのごふに。おとこの御童名をばうしかひと申しき。さればその御ぞうはうしかひをば、うしつきとのたまふなり。

敦敏の少將の子なり、佐理の大貳、世の手かきの上手。任はててのほられけるに、伊豫の國のまへなるとまりにて、日いみじうあれ、海のおもてあしくて、風おそろしう吹きなどするを、すこしなほりて出でむとしたまへば、またおなじやうになりぬ。かくのみしつづ日ごろすぐれば、いとあやしくおほして、物とひ給へば、神の御崇りとのみいふに、さるべき事もなし、いかなる事にかとおそれたまひける夜の夢に、見え給ひけるやう、いみじうけだかきましたる男のおはして、「此の日のあれて日ごろ此處にへ給ふは、おのれがしはべる事なり。それはよろづの社に額のかかりたるに、おのれがもとにしもなきがあしければ、かけむとおもふに、なべての手してかかせむがわろく侍れば、われにかかせ奉らむとおもふによりて、此のをりならではいつかはとて、とめ奉りたるなり。」とのたまふ

○三島 三島明神は伊豫國三島。

○おどろき云々 日ざめ給ひては勿論恐れ慎しむ。

○きよまはりて 身を清淨にして。

○ひの装束 束帯。

○うたせ 額を打たせ。

○末々の舟 従者の舟。

○御心おごり 御得意。

○六波羅蜜寺 賀茂河の東。

○懈怠は 怠慢であり。

○如泥人 しまりのない人。

○歌繪 歌の心を繪に書けるもの。

○色紙形 色紙の形を屏風障子等に書き彩色等し之に詩歌を書くもの。

○日たかくまたれ 日の高く上るまで人に待たれ。

○骨なく 開がわる

に、「たれとか申す。」と問ひ給へば、「この浦の三島にはべる翁なり。」と宣ふに、夢のうちにもいみじうかしこまり申すとおほすに、おどろき給ひては、またさらにもいはず。

さて伊豫へわたり給ふに、多くの日あれつる日ともなく、うらくとなりて、そなたさまにおひ風ふきて、飛ぶが如くまうでつき給ひぬ。湯度々あみ、いみじく潔齋してきよまはりて、ひの装束して、やがて神の御まへにて書き給ふ。やしろの官ども召しいでうたせなど、よく法のごどくして、かへり給ふに、つゆおそる、事なくて、末々の舟にいたるまで、平にのほりたまひにき。わがする事を、人間のほめあがむるだに興あることにてこそあれ。まして神の御心にさまでほしくおほしけむこそ、いかに御心おごり給ひけむ。

また大方これにぞ、いと日本第一の御手のおほえは取り給へりし。六波羅蜜寺の額も、此の大貳の書きたまへるなり。さればかの三島の社の額と、此の寺のとは、おなじ御手にはべり。

御心ばへぞ懈怠は、すこしは如泥人とも聞えつべくおはせし。故中關白殿、東三條つくらせ給ひて、御障子に歌繪どもかかせ給ひし色紙形を、この大貳にかけと宣はするを、いたく人さわがしからぬほどに、まゐりて書かれなば、よかりぬべかりけるに、關白殿わたらせ給ひて、上達部殿上人などさるべき人々あまたまゐりつどひて後に、日たかくまたれ奉りてまゐり給ひければ、すこし骨なくおほしめさるれど、さりとてあるべきことならぬ

○女のさうごく云々
女の装束を祿物と
せさせ給ふ。

○むけのその道云々
卑しき一般の書道
の下臈筆には祿物等
もあるべき事と。

○弘徽殿の女御 恆
子。

○小野の宮のおとぎ
實頼。

○その御をこころ君
齊敏の男子。

○その御をのこ子
懷平の子の經通、資
平を指す。

○さえがりたりや
實の字も實頼を取つ
たといふのはかしこ
ぶりに見ゆ。

ば、かきてまかで給ふに、女のさうごくかづけさせ給ふを、さらでもありぬべく思さるれど、すつべき事ならねば、そこらの人の中をわけいでられるなむ、なほ懈怠の失錯なりける。のどかなる今朝とくもうちまゐりて書かれたらましかば、かからまじやとぞ、見る人もおもひ、みづからもおほしたりける。「むけのその道のなべての下臈などにこそ、かうやうなる事はせさせ給はめ。」と、殿をもそしり申す人々ありけり。

その大貳の御むすめ、いとこの懷平の右衛門督の北の方にておはせし、經任君の母よ。大貳におとらず女の手かきにておはすめり。大貳の御妹は法住寺のおとぎの北の方におはす。その御はらの女君は、花山院の御時の弘徽殿の女御、又入道中納言の御北の方にて、又をのこ子は、今の中宮大夫齊信卿とぞ申すめり。

小野の宮のおとぎの三郎、敦敏少將の同じ腹の君、右衛門督までなり給へりし、齊敏とぞ聞えしかし。その御をとこ君播磨守尹文のむすめのはらに三ところおはせし。太郎高遠の君、大貳になりてうせ給ひにき。二郎懷平とて中納言右衛門督までなり給へりし。その御をのこ子なり、いまの右兵衛督經通の君、また侍從宰相資平の君、いまの皇太后の權大夫にておはすめり、その齊敏の君の御をのこ子、御おほちの小野の宮の大臣の御子にし給ひて、實資とつけ給ひて、いみじうかなしうし給ひき。このおとぎの御名の文字なり、實もじは。「といふ程も餘りさえがりたりや、わらは名はたいかく丸とぞつけたりける。」

○すゑに 晩年に。

○めしつかひ 手をつける。

○殿にさぶらひ給ひ
實資の北の方にな
り給ひ。

○この女君 かぐや
姫。

○千日の講 千日間
高僧を招いて佛法を
講ぜしむ。

○子かたくおはし
子供の出来ざる。

○帳ゆかたてて 御
帳臺を作りて。

○かの殿 實資。

○こもり人 子を
可愛がる人。

其の君こそ今の小野の宮の右大臣と申して、いとやんごとなくおはすめり。このおとぎの、御子なきなけきをし給ひて、わが御をひの資平の宰相を養ひ給ふめり。又すゑに宮仕人をおほしける腹に、いでおはしたるをのこ子は法師にて内供良圓の君とておはす。又さぶらひける女房をめしつかひ給ひける程に、おのづからうまれ給へりける女君、かぐや姫とぞ申しける。この女は頼定の宰相のめのとこ、北の方は花山院の女御、爲平の式部卿の親王の御むすめ、院をむかせ給ひて道信の中將も懸想し申し給ふに此の殿、参り給ひにけるを聞きて中將の君のきこえ給ふぞかし。

うれしさは如何ばかりかは思ふらむ憂きは身にしむ物にそありける

この女御、殿にさぶらひ給ひしなり。この女君千日の講行ひ給ふ。資家中納言のうへの腹なり。兼頼の中納言の北の方にてうせ給ひにき。大かた子かたくおはしましける族にや、これも中宮の權大夫のうへも、まゝ子を養ひ給へる。

この女君を小野の宮の寢殿の東面に帳ゆかたてて、いみじうかしづきする奉らせたまへり。いかなる人か御壻となり給はむとすらむ。かの殿はいみじきこもりと人にぞ坐す。故小野の宮のそこばくのたからもの莊園は、皆この殿にこそはあらめ。殿づくりせられたるさま、いとめでたしや。對、寢殿、渡殿は例の事なり、辰巳の方に三間四面の御堂たてられて、廻廊はみな供僧の房にせられたり。湯屋に大きなかなへ二つぬりすゑられて、

○定器 飯等盛りて佛に供へる佛具。
 ○智者 知識の高い僧。
 ○持經者 常に持經珠に法華經を讀誦する僧。
 ○眞言師 眞言の加持する僧。

○供料 供養の料。
 ○滅罪生善 現世の罪障を消滅し後世の善根を助ける事。
 ○とりわけ給ひし云 特別養子と見立てた甲斐ある實資なり。
 ○この生きはめ云々 今世では人臣の極を盡した人なり。

煙絶えぬる日なし。御堂には金色の佛おほくおはします。供米三十石定器におかれてたゆむ事なし。御堂にまゐる道には御まへの池よりあなたを、はるく野につくらせたまひて、時々花もみぢをうゑさせたまへり。または船にのりて池よりこぎてもまゐる。これより外に道なし。住僧にはやんごとなき智者あるは持經者、眞言師どもなり。これに夏の法服をたまひ、供料をあて給ひて、わが滅罪生善の御いのり、又姫君の御息災を祈らしめたまふ。

この小野の宮を、あけくれつくらせ給ふ事、日にたくみの七八人たゆる時なし。世の中に斧のおとする所は、東大寺と、この小野の宮とこそは侍るなれ。祖父おほい殿のとりわけ給ひししはおはする殿なり。まことこの御男子は今の伯耆守資頼と聞ゆめるは、姫君の御ひとつはらにはあらず、いづれにかありけむ。

一 太政大臣頼忠

このおとゞは小野の宮實頼の大臣の次郎なり。御母時平の大臣の御むすめ、敦敏の少將の御同じ腹なり。大臣の位にて十九年。關白にて九年。この生きはめさせたまへる人ぞかし。三條よりは北、西洞院よりは東に住み給ひしかば、三條殿と申す。

このおとゞいみじき事どもしおきたまへる人なり。賀茂詣でに檢非違使車のしりに

○もののふし 物節近衛舍人中東遊に達せる者。
 ○府生 六衛府及び檢非違使の下役。
 ○一人云々 攝關の行列さと思はれな程寂し意。
 ○うたてある事なりや 然るべからざる事である。
 ○よそ人 一條院と所縁なき人。
 ○時の一人 兼家はなやぎ給ひ榮華であられ。
 ○のほり北。 北。
 ○よきて 避けて。
 ○太后 遵子。
 ○太政大臣 頼忠。
 ○いかやうにて云々 隆家がごんな様子で通るかと思つて。
 ○連子 窓に設けた格子。
 ○御紐おしのけて 裝束の紐を外して。
 ○うち見れ 四條殿の内を覗き込み。
 ○なかくなる事なれは なまなか見つけたから。

具する事、また馬の上の隨身左右に四人つがはしむる事も、此の殿のしいで給へり。古は、もののふしのかぎり一人づゝありて、府生はなくはべりしなり。一人のおはすなど見ゆること侍らざりけり。必ずかく侍るなりける事なりかし。

あまりよろづした、めあまり給ひて、殿の内によひにともしたる油を、又のつとめて、さふらひに油瓶をもたせて、女房の局までめぐりて、残りたるをかへしいれて、又今日の油にくはへてともさせ給ひけり。あまりにうたてある事なりや。

一條院位につかせ給ひにしかば、よそ人にて、關白のかせ給ひにき。たゞおほきおほい殿と申して、四條の宮にこそは一つにすませ給ひしか。それにこの前の帥殿は、時の一人の御孫にて、えもいはすはなやぎ給ひしに、六條殿の御増にておはせしかば、つねに西洞院のほりにありき給ふを、こと人ならば、こと方よりよきてもおはすべきを、太后太政大臣のおはしますまへを、馬にてわたり給ふ。おほきおほい殿、いとやすからずおほせども、いかゞはせさせたまはむ。なほいかやうにてかと、ゆかしくおほして、中門の北の廊の連子よりのぞかせたまへば、いみじうはやる馬にて、御紐おしのけて、雑色二三十人ばかりに、さきいとたかくおはせて、うち見れつゝ、馬のたづなひかへて、扇たかくつかひてとほり給ふを、あさましく思せど、なかくなる事なれば、こと多くものたまはで、たゞ「なさけ無けなるをのこにこそありけれ。」とばかりぞ申したまひける、非常の事なり

○御孫 頼忠の孫。
○人よりは云々 隆家は他人よりも頼忠の機嫌を取るべきなり。

○布袴 袍に下襲指貫を著ること。

○鬼の間 清涼殿内にあり。

○御むすめ二人男一人 遊子、謀子、公任。

○有心者 情ある人

○如法 かたの如く

○季の御讀經 二月と八月大般若經を轉讀する儀。

○ゆあなし 沐浴し

○齋 僧の食事。

○御まへ 遊子。

○恵心の僧都 源心

○頭陀行 修行の爲乞食して歩く事。

○うたせ云々 遣らせて賜ひしかば。

や。さるは帥隆家の中納言殿のうへの六條殿重信の姫君は、母は三條殿の御女におはすれば、御孫ぞかし。されば人よりはまるりつかうまつりだにこそし給ふべかりしか。
この頼忠のおとと、一の人にておはしまししかど、御直衣おんなほしにて内に参り給ふ事侍らざりき。奏せさせ給ふべきことあるをりは、布袴ほつこにてぞまゐりたまふ。さて殿上にさぶらはせたまひ、年中行事の御障子のもとにて、さるべき職事しやくじ、藏人などしてぞ奏せさせ給ひ、うけたまはり給ひける。又あるをりは鬼の間に御門みかどいでさせ給ひて、めしあるをりぞまゐらせ給ひし。關白し給へど、よその人にておはしましければにや。

故中務卿よゝき代明親王の御むすめの腹に、御むすめ二人男一人おはしまして、大姫君遊子は圓融院の御時の女御にて、天元五年三月十一日みこ後に立たせ給ひて中宮と申しき、御年二十六、皇子おはせず、四條の宮とぞ申すめりし。いみじき有心者しんざい有識うしきにぞいはれ給ひし。功德も御いのりも如法に行はせ給ひし。年ごとの季の御讀經みよきやうなども、つねの事ともおほしめしたらず、四日がほど二十人の僧を、房のかざりめでたうて、かしづきすすせ給ひ、ゆあむし、齋さいなど限りなく如法に供養せさせ給ひ、御まへよりも、又とりわきさるべきものどもいださせ給ふ。御身づからもきよき御衣奉り、かぎりなくきよまはらせ給ひて、僧に賜はらするものどもは、まづ御まへにとりすすせせて、をがませ給ひてぞ後につかはしける。恵心の僧都みんの、頭陀行づたぎやうせられけるをりに、京中こぞりていみじき御齋みんをまうけつ、まゐり

しに、この宮にはうるはしく金の御器かねのぐさどもをうたせ給へりしかば、かくてはあまり見ぐるしとて、僧都は乞食とめたまひてき。

今一とこのころの姫君謀子、花山院の御時の女御にて、四條の宮に尼にておはしますめり。やがて后女御のひとつはらの男君、只今の按察大納言公任卿と申す。小野の宮の御むまごなればにや、歌の道すぐれたまへり。よにはつかしう心にくきおほえおほす。その御むすめ、た教通今の内大臣の北の方にて、年ごろ多くの公達うみつゞけ給へりつる、こぞの正月にうせ給ひて、大納言よろづをしらず、おほしなく事かぎりなし。又男君一人ぞおはする、左大辨定頼の君、若殿上人の中に心あり、歌なども上手におはすめり。母北の方いとあてにおはすかし。村上照平の第九の宮の御むすめ、多武峯入道少將たかのまをさ君の御むすめのはらなり。内大臣殿のうへも、此の辨の君も、されば御なからひいとやんごとなし。

この大納言殿無心の事一度ぞのたまへるや。御妹の四條の宮の、后に立たせ給ひて、はじめて内へ入りたまふに、洞院のほりにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給ふに、大入道殿兼家も故女院詮子も、胸いたくおほしめしけるに、按察大納言は后の御兄にて、御こ、ちよくおほされけるまゝに、御馬をひかへて、「この女御はいつか后にたち給ふらむ。」とうち見いれてのたまへりけるを、殿を始め奉りて、その御族おんうぢやすからずおほしけれど、男宮おはしませばたけくぞ。よその人々も、やくなくも、宣ふかなとききたまふ。

○あてに 高貴に。
○内大臣殿のうへ云云 教通の妻と定頼とは兄弟なれはなり
○無心の事 考へない事。
○殿を始め 兼家を初め。
○男宮 詮子の腹の一條院を指す。
○たけくぞ 心強く思ふ。
○やくなく 無益。

○この大納言云々
公任が皇后宮の亮と
して仕へ給へるに。
○や、呼び掛け語
○すはらの后、素腹
は子のなき事。遊子
○先年の事、公任が
東三條殿の前で無心
の事をいつた事。
○いかにこ、過言な
りとの意。
○なくなりぬる身
面目なき我が身の意
○捨てられ給はず
朝廷から用ゐられた
○かの内侍の云々
今度の事も進の内侍
の咎で事は済んだ。
○入道殿、道長。
○をぐら山の歌、拾
遺集秋部。
○申しあげ給ひける
云々、公任自身和歌
の船を望んだ程あつ
てうまく詠んだ物だ
○かばかりの詩、小
倉山の如きよき詩。
○いづれにぞか思ふ
三船の中せれに乗
らうと思ふか。

一條院位につかせ給へば、また女御后詮子に立たせ給ひて、内に入り給ふに、この大納言殿の亮につかうまつり給へるに、出車より扇をさし出して、「や、物申さむ。」と、女房のきこえければ、何事にかとて、うち寄り給へるに、進の内侍顔をさしいでて、「御妹のすはらの后は、いづくにかおはする。」と聞えかけたりに、「先年の事をおもひおかれたるなり。みづからだにいかにおほえつることなれば、道理なり。なくなりぬる身にこそとおほえしか。」とこそたまひけれ。されど人がらよろづによくならたまひぬれば、ことにふれて捨てられ給はず。かの内侍のとがなるにてやみにき。

ひととせ入道殿の大堰川の逍遙させ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船とわかたせたまひて、その道にたへたる人々をのせさせ給ひしに、此の大納言殿のまりり給へるを、入道殿、「かの大納言いづれの船にかのらるべき。」とのたまはすれば、「和歌の船にのり侍らむ。」とのたまひて、よみ給へるぞかし、

をぐら山あらしの風のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき
申しあげたまひけるかひありてあそばしたりな。御みづからものたまふなるは、「作文の船にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩をつくりたらましかば、名のがらむこともまさりなまし。くちをしかりけるわざかな。さても殿の道長「いづれにぞか思ふ。」と宣はせしになむ、われながらこゝろおごりせられし。」とのたまふなる。ひと事のすぐる、だにあるに、

○おとゞ 三條大臣
頼忠。

かくいづれの道にもぬけいで給ひけむは、古いにしへも侍らぬ事なり。

おとゞ永祚元年六月二十六日にうせ給ひて、同じ月三十日贈正一位になり給ふ。廉義公とぞ申しける。このおとゞの御すゑかくなり。

一 左大臣師尹

此の大臣は忠平の大臣の五郎、小一條のおとゞと聞えさせたまふめり。御母九條殿に同じ。大臣の位にて三年。左大臣にうつり給ふこと、西宮殿高明の筑紫へくだり給ふ御かはりなり。その御事のみだれば、この小一條のおとゞのいひいで給へるとぞ世の人聞えし。さてその年もすぐさうせ給ふなどこそ申すめりしか。それもまことにや。

御芳子むすめ、村上の御時の宣耀殿せんぎょうでんの女御、かたちをかしけに、うつくしうおはしけり。内へ参り給ふとて、御車に奉り給ひければ、わが御身はのり給ひけれど、御ぐしのすそは、母屋の柱のもとにぞおはしける。ひとすぢをみちのくに紙におきたるに、いかにもすきまみえ給はずとぞ申しつたへためる。御目のしりの少しさがり給へるが、いとゞらうたくおはするを、御門みかどいとかしこくときめかさせ給ひて、かく仰せられけるとか、

いきての世死にてののちの後の世もはねをかはせる鳥となりなむ
御返し、女御、

○九條殿 師範。

○その年 安和二年
○みちのくに紙 檀
紙。
○すきまみえ給はず
紙一面髪毛で黒い
○らうたく 可愛ら
しく。
○さきめかさせたま
ひて 御寵愛して。
○いきての歌、白樂
夫の長恨歌「在天願
作比翼鳥、在地願
爲連理枝。」

○秋になるの歌上句は秋木の葉の落つる如く君我を賦き給はずはの意。

○古今うかべ給へり 芳子が古今集を誦記し給へり。

○やまとうたは古今集の序文の一句。

○父おとゞは云々 芳子の試問及第を祈願する親心をいふ。

○御筆の琴 御筆。十三絃の琴。

○冷泉院の御母后云 安子の死は芳子嫉妬の爲なれば帝も憐み給ひて御つて芳子の寵衰ふ。

○故宮の云々 安子が芳子を甚だ心外にも亦心安からず思つた事を村上帝が思ひ出し給ひて残念に思さる。

○しれもの 疑者。○くせんしきすなほでなき。

秋になることのはだにもかはらずばわれもかはせる枝となりなむ

古今うかべ給へりと聞かせたまひて、御門試みに本をかくして、女御には見せ給はで、やまとうたはとあるをはじめにて、まへの句のことばをおほせられつ、問はせ給ひけるに、いひたがへ給ふ、詞にても歌にてもなかりけり。かかることなど父おとゞはきき給ひて、御装束し、御手洗ひなどして、ところ／＼に誦經などし、念じ入りてぞおほしける。

みかど御筆の琴をめでたくあそばしけるも、御心に入れてをしへなど、限りなく時めき給ふに、冷泉院の御母后うせ給ひてこそ、中々こよなくおほえおとり給へりとは聞えしか。

故宮のいみじくめざましくやすからぬ者におほしたりしかば、思ひいつるにいとほしくくやしきなりとぞ、仰せられける。

此の女御の御腹に、八宮とて男みこ一人うまれ給へり。御かたちなどは清けにおほしけれど、御心きはめたるしれものとぞ聞き奉りし。世の中のかしこき帝の御ためしに、もろこしには、堯のみかど、舜のみかどと申す。この國には、延喜天曆とこそ申すめれ。延喜とは醍醐の先帝の御事、天曆と申すは村上の先帝の御事なり。その帝の御子、小一條の大臣の御孫にて、しかしれ給へりける、いと／＼あやしき事なりかし。

その母女御の御せうと濟時の左大將と申しし、長徳元年四月二十三日にうせ給ひにき。御とし五十五。この大將は、父おとゞよりも御心ざまわづらはしく、くせんしきおほえ

まさりて、あまり名聞になどぞ坐せし。御妹の女御殿に村上の琴をしへさせ給ひけるを、御まへにさぶらひ給ひて、ききならひたまふほどに、おのづからわれもその道の上手に、人にもおもはれたまへりしを、おほろけにては心よくならし給はず、さるべきことのをりも、せめてそ、のかかれて、ものひとつばかりかきあはせなどこそし給ひしか、あまりけにくしと、人にもいはれたまひき。人の奉りたる贄などいふ物は、御まへの庭にとりおかせ給ひて、夜は贄殿にをさめ、晝は又もとのやうにとりいでつ、おかせなど、又人の奉りかふるまではおかせ給ひて、とり動かすことはせさせ給はぬ、あまりやさしき事なりな。

人などのまるるにも、かくなむと見せ給ふ料なめり。昔人はさる事をよきにはしければ、そのまゝの有様をせさせ給ふとぞ。

かくやうにいみじう心ありとおほしたりしほどよりは、よしなしごとしたまへりとぞ、人にははれ給ふめりし。

御甥の八宮に大饗せさせ奉り給ひて、上戸におはすれば、人々ゑはして遊ばむなどおほして、さるべき上達部たちとく出づるものならば、しばしなど、をかしきさまにとゞめさせ給へと、よく教へ申させ給ひけり。さこそ人がらあやしうれ給へれど、やんごとなき親王の大事にし給ふことなれば、人々あまたまるり給へりしも、古代なりかし。

されどおほやけ事さしあはせたる日なれば、いそぎ出でたまふに、まことさる事ありつ

大 鏡(上卷)

一六七

○名聞云々 己の名譽にのみ心を寄せた

○ものひとつばかり 何かの曲を少々彈く。

○けにくし 憎らし

○贄殿 進上物を納めおく所。

○やさしき事 世繼の冷評の語。

○かくやう云々 斯様に濟時自身は萬事注意したと思つてもつまらぬ事をした。他人には思はれた。

○上戸におはすれば 濟時が酒呑なれば八宮は既述の如く人柄が怪しく白痴だ

○やんごとなき親王云々 永平親王が手重く行ふ大饗なれば

○古代 古風。

○おほやけ事云々 公事のぶつかつた日

○まことさる事あり 濟時の教を指す

○目をくはせ 目くはせする。

○うへのきぬ 袍。

○まゐりまゐれる 上達部 参上の上達部全部。

○事に事をつけ 外の要事にかこつけ。

○事すゑ 末座。

○此の殿をぞ云々

親王の寝心は明らかなるに強ひて親王を煩はすべきでないのに斯かる見苦しい行ひを人々に見せ申した濟時を人々は譏つた。

○ぞくかう 噂話。

○時におはし 君龍を得て榮え給ひ。

とおほしめしいでて、大將の御方をあまたたび見やらせ給ふに、目をくはせ申し給へば、御おもていとあかくなりて、とみにはうちいでさせ給はず、ものも仰せられで、俄におびゆるやうに、おどろ／＼しくあら、かに、人々のうへのきぬの片袂、おちぬばかりとりかからせ給ふに、まゐりとまゐれる上達部は、末の座までみあはせつゝ、えしづめずやありけむ、かほけしきかはりつゝ、とりあへず事に事をつけつゝ、いそぎたちぬ。

この入道殿などは、わか殿上人にておはしましたしけるほどなれば、事すゑにてよくも御覽ぜざりけり。たゞ人々のほゝゑみていで給ひしをぞ見しとぞ。この頃をかしかりしことに

かたり給ふなる。大將はなにせむに、かかる事をせさせ奉りて、又しか宣へとも教へ聞えさせつらむと、くやくおほすに、御色も青くなりてぞおはしける。まことに親王をば、もとよりさる人と知り申したれば、これをしもそしり申さず、此の殿をぞかかる御心と見る見る、せめてなくてあるべき事ならぬに、かく見ぐるしき御ありさまを、あまたの人に見せ聞え給へる事とぞそしり申しし。いみじき心ある人と世おほえおはせし人の、くちをしきぞくかうとりたまへるよ。

この殿の御北の方にては枇杷の大納言延光の御むすめぞ坐する。女君二所をとこ君二人ぞおはせし。女君は三條院の東宮にておはしましたしをりの女御にて、宣耀殿とまうしていと時におはしましたし、男御子四所女宮二人うまれ給へりしほどに、東宮位につかせたまひ

○御心わざに 御自身の考へで。

○和泉式部 越前守大江雅致の女で和泉守攝道真の妻。

○御おもておこし給ふは 御面目を施せしは。

○當帝 後一條帝。

○院 三條院。

○宮たちと申し云々 皇子達と申しした時萬自由に遊び馴れし故今の東宮の位を御窮屈に思召す意。

○たえね 絶えてもかまはない。

○御ものけ 冷泉院を儲ました元方の兼。

て、又の年長和元年四月二十八日届にたち給ひて、皇后宮と申す。又今一所の女君は、父殿うせ給ひにし後、御心わざに、冷泉院の四のみこ、帥の宮と申す御うへにて、二三年ばかりおはせしほどに、宮、和泉式部におほしうつりにしかば、本意なくて小一條にかへらせ給ひにし後、このころきけば、心えぬありさまのこのほかなるにてこそおはすなれ。

この宮の御はらの一のみこ敦明親王とて式部卿の宮とぞ申しし程に、長和五年正月二十九日三條院おりさせ給へば、當帝位につかせ給ひて、この式部卿の宮、東宮に立たせ給ひにき。御年二十三。たゞし道理ある事と皆人おもひ申ししほどに、院うせさせ給ひてのち二年ばかりありて、いかゞおほしめしけむ、宮たちと申ししをり、よろづにあそびならはせ給ひて、うるはしき御ありさまいとくるしく、いかで斯からでもあらばやと、おほしな

られて、皇后宮に、「かくなむおほえ侍る。」と申させ給ふを、「いかでかはけにさもとはおほさむする。すべてあさましくあるまじきこと。」とのみいさめ申させたまふに、おほしあまりて入道殿に御消息ありければ、まゐらせ給へるに、御物がたりこまやかにて、「此の位さりて、たゞ心やすくあらむとなむ思ひ侍る。」と聞えさせければ、「さらにくうけたまはらじ、さば三條院の御すゑはたえねとおほしめしおきてさせ給ふか。いとあさましくかなしき御事なり。かかる御心のつかせ給ふは、こと事ならじ、たゞ冷泉院の御ものけなど

○さら／＼ 決して
○侍りてを をは威
動詞。

○大宮 彰子。

○内 後一條帝。

○これもおなじ事

今の場合も前に一條
院の仰せられた場合
も同じ事。

○東宮にもまゐる
敦明親王を指す。

○さはりて 差支あ
りて。敦明は道長の
女の腹にあらざれば
渡さざるなり。

○納殿 累代の御物
を納めおく所。

○つひの事云々 結
局斯くなることは思ふ
ものの今が今斯く東
宮で榮えんとは思は
なかつた。

○法師東宮 桓武帝
の皇子早良親王。

○いはひすゑられ
齊き祀られ。

○官物のほつほさき
毎年十二月荷前の
使を立て幣帛を奉る

○御報のはやく云々
御果報の強きに壓
せられたか。

○この程の御事 小
一條院の御事。

○なにがし 私。

○ならひにし事 聞
き馴れてをる事。

○やうたい 有様。

○ほけ／＼しき ほ
けた様子。

○まゐりや やは威
動詞。

○みちかひ 往きか
ひ。

○このもりづかさ
主殿寮。

の、おもはせ奉るなり、さら／＼おほしめしそ。」と啓し給ふに、「さらばたゞ本意もあり、
出家にこそはあんなれ。」とのたまはするに、「さまでおほしめす事ならば、いかゞはともか
くも申さむ。内に奏し侍りてを。」と申させたまふをりにぞ、御氣色いとおよくならせ給ひに
ける。

さて殿うちにもまゐらせ給ひて、大宮にも内にも申させ給ひければ、いかゞはきかせ給ひ
けむな。このたびの東宮には、式部卿の宮をとこそはおほしめすべけれど、一條院の「は
かばかしき御うしろみなければ、東宮に當帝を立て奉るなり。」とおほせられしかば、これ
もおなじ事なりとおほしきだめて、寛仁元年丁巳八月五日にこそは九歳にて三の宮東宮
に立たせ給ひて、同じ月の二十三日こそは、壺切といふ太刀は、内よりもてまゐりし
か、當帝位につかせ給ひしかば、即ち東宮にも参るべかりしを、然るべきにやありけ
む、とかくさはりて、此の年頃内の納殿に候ひつるぞかし。

寛仁三年己未八月二十八日に御とし十一にて御元服させ給ひしか。さきの東宮をば小
一條院と申す。いまの東宮の御ありさま申すかぎりなし。つひの事とはおもひながら、た
だ今かくとは思ひかけざりし事なりかし。

小一條院わが御心もてのかせ給へることは、これをはじめとす。世はじまりてのち、東
宮の御位とりさけられ給へる事は、九代ばかりにやなりぬらむ。なかに法師東宮おはしま
しけることは、うせ給ひて後に、贈太上天皇と申して六十餘國にいはひすゑられ給へれ。
おほやけにも知召して、官物のほつほさき奉らせ給ふめり。此の院のかくおほしたちぬる
ことは、かつは殿下の御報のはやくおはしますにおされ給へるか、またおほくは元方民部
卿の靈のつかうまつりつるなりといへば、さぶらひ「それもさるべきなり。この程の御事
どもこそ、ことの外にかはりて侍れ。なにがしはいとくはしく承りたる事どもはべるも
のを。」といへば世繼「さも侍らむ。つたはりぬる事はいづくうけたまはらばや。ならひ
にし事なれば、ものの猶きかまほしく侍るぞ。」といふ、興ありけに思ひたれば。

事のやうだいは、三條院のおはしましたるほどこそあれ、うせさせ給ひにける後は、世
のつねの東宮の御やうにもなく、殿上人などまゐりて、御あそびさせ給ひ、もてなし
しづき申す人などもなく、いとつれづれに、まぎる、方なくおほしめされけるまゝに、心
やすかりし御ありさまのみ戀しく、ほけ／＼しきまでおほえさせ給ひけれど、三條院おは
しましたるかぎりには、院の殿上人などもまゐりや、御つかひもしけくまゐりかよひなど
するに、人目もしげく、よろづ慰めさせたまふを、院うせおはしましては、世の中のものお
そろしく、大路のみちかひもいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、官司など
だにも、まゐりつかうまつる事も難くなりゆけば、まして下司の心はいかゞはあらむ。と
のもりづかさの下部も、朝ぎよめつかうまつる事もなければ、庭の草も茂りまさりつ、

○おしてさられさせ
敦明は無理にも東
宮の位を奪はれ。
○ひたぶるに一向
に。
○高松殿のみくしけ
殿 道長の末女、母
は源高明の女明子。
○例の事なれば云々
例により世人の取
沙汰するのを。
○またにあらは左
様であらば。
○御匣殿の事云々
御匣殿を道長が御息
所に奉る事が本宮な
らばこちらから進ん
で左様にしよう。
○さもおほしゆるぎ
云々 左様に打解け
て御匣殿を奉れし申
し給はば。

いとかたじけなき御すみかにておはします。まれくまりよる人々は、世にきこゆる事
とて、三の宮のかくておはしますを、心ぐるしく、殿も大宮もおもひ申させ給ふに、もし
内敦良に男宮もいでおはしましたばいかゝあらむ。さあらぬさきに、東宮にたて奉らばやとな
む、おほせらるなる。さればおしてとられさせ給ふべかなりなどのみ申すを、まことにし
もあらざらめど、けに事の様もよもおほゆまじければにや、きかせ給ふ御こ、ちは、い
とゞうきたちたるやうにおほしめされて、ひたぶるにとられむよりは、われとやのきなま
しとおほしめすに、又高松殿のみくしけ殿明子まるらせ給ひて、殿はなやかにもてなし奉らせ
給ふべかなりとも、例の事なれば、世の人のさまく定め申すを、皇后宮きかせ給ひて、
いみじう喜ばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらば、いとゞ我が思ふ
事えせじ、なほかくてあるまじくおほしめされて、御母宮に、「しかくなむおもふ。」と聞
えさせたまへば、「さらなりや、いとくあるまじき御ことなり。御匣殿の事をこそ、まこ
とならばす、みきこえさせ給はめ。更にくおほしめしよるまじきことなり。」と聞えさせ
給ひて、「御もののけのするなり。」と、御祈りどもせさせ給へど、さらにおほしめしとゞま
らぬ御心のうちを、いかでか世の人もききけむ。「さてなむ御匣殿まるらせ奉り給へども、
聞えさせ給ふべかなり。」などいふ事、殿の邊にもきこゆれば、まことにさもおほしゆるぎ
て宣はせば、いかゞすべからむなどおほす。

○おほしめしたらぬ
退位を御決心さる
○不覺 不注意。
○さほれなくとも云
云 まよ御間なく
とも敦明を東宮に立
てておくべきこと。
○しかるべきことは
然るべき運命だも。
○中宮の權大夫殿
道長の五男能信。
○そればかりを云々
住居の近いといふ
事のみを他人に依頼
するよりはよからう
と思ひついで。
○あからさまに
○きこゆる事 御退
位の世評。
○おまに案内申し
てなむ 道長に其の
事を報知してから。

さて東宮はつひにおほしめしたちぬ。さて後に御匣殿の御事もいはむに、中々それはな
どかなからむなど、よきかたさまにおほしなしけむ、不覺の事なりやな。 壺切などの
事ひがことにあり。故三條院たびく申させ給ひしかども、とかく申しやりて奉ら
せざりしとこそききはべりしか。されば故院も、さばれなくとも立てではとておほし
まししなり。しかるべきとはおのづからの事を申させて。
皇后宮にもかくとも申させ給はず、たゞ御心のまゝに、殿に御消息聞えむとおほしめす
に、むつましうさるべき人もものしたまはねば、中宮の權大夫殿のおはします四條の坊門
と、西の洞院とは宮ちかきぞかし。そればかりを、こと人よりはとや思召しよりけむ、藏
人なにかしを御使にて、「あからさまにまるらせ給へ。」とあるを、思おもしもかけぬ事なれば、
驚かせ給ひて、「なにしにめずぞ。」と問ひ給へば、「申させ給ふべきことさぶらふにこそ。」
と申すを、このきこゆる事どもにやとおほせど、のかせたまふことは、さりとも世にあら
じ、御匣殿の御事ならむとおほす。いかにもわが心ひとつには思ふべきことならねば、「お
どろきながら参りさぶらふべきを、おとゞに案内申してなむさぶらふべき。」と申させたま
ひて、まづ殿にまるりたまへり。「東宮よりしかくなむ仰せられたりつる。」と申させ給へ
ば、殿も驚かせ給ひて、「何事ならむ。」と仰せられながら、大夫殿とおなじやうにぞおほし
よられける。

○さやうにあやしく
て云々 従來の様に
東宮を見苦しき様子
にしてはおかれぬ。
○陣 衛士の詰所。
○左大臣殿 東宮の
御岳父顯光。
○御前 御前驅。
○なきむつかし 面
倒。
○朝餉 朝餉の間。
○ものせらるゝ事も
なきに こゝへは常
に來給ふ事なきに。
○むねは 仔細は。
○かくて侍る 東宮
の位に居る。
○故院 三條院。
○内の御ゆくす云
云 後一條帝は御幼
少で御行末も久し。
○このありさまのき
て 東宮を退きて。

まことに御匣殿の御事のたまはせむを、いなび申さむも便なし。まゐり給ひなば、又さやうにあやしくてはあらせ奉るべきならず。又さては世の人の申すなるやうに、東宮のかせ給はむの御おもひあるべきならずとおほせど、「しかわざと召さむには、いかでか参らではあらむ。いかにも宣はせむことをきくべきなり。」と申させ給へば、参らせ給ふほど日もくれぬ。陣に左大臣殿の御車や、御前どものあるを、なまむつかしとおほしめせど、かへらせ給ふべきならねば、殿上にのほらせ給ひて、「参りたるよし啓せさせよ。」と藏人にのたまはすれば、「大臣殿の御まへにさぶらはせたまへば、只今はえなむ申しさぶらはぬ。」と聞えさするほど、見まはさせ給ふに、庭の草もいとふかく、殿上のありさまも、東宮のおはしますとは見えず、淺ましくかたじけなけなり。大臣殿いで給ひて、かくと啓すれば、朝餉の方にいでさせ給ひて、めしあれば参り給へり。「いと近くこち。」と仰せられて、「ものせらるゝ事もなきに、案内するもはかり多かれど、おとゞにきこゆべきことのあるを、つたへものすべき人のなきに、近きほどなれば、たよりにもと思ひて、消息し聞えつるなり。そのむねは、かくて侍ることとおもひ、故院のしおかせ給へる事を違へ奉らむも、かたくにははかり思はぬにあらねど、かくてあるなむ思ひつゝくるに罪深くもおほゆる。内の御ゆくす忍はいとほるかにもせさせ給ふ。いつともなくてはかなき世に命もしりがたし。このありさまのきて、心に任せて行ひをもし、物詣でもし、やす

○むけに 一向に。
○受領 年官年爵。
○大方には いつも
の通り。
○御車に奉りに云々
御乗車の時に申さ
ん。
○いみじうかしこき
事 甚だ大事件。
○さならむ云々
道長も其の事たらう
と察せられて。
○さらなりや云々
東宮の御考へが一通
りの事ではないのはい
ふまでもない。
○おしておろし云々
當方から無理に御
退位を迫るは憚り
思ひしに東宮自身
御退位は喜び此の上
ない。先づ第一の幸
福者は彰子である。

らかにてなむあらまほしきを、むけにさきの東宮にてあらむは見ぐるしかるべくなむ。院號たまはりて、年に受領などありてなむあらまほしきを、いかなるべき事にかと傳へきこえられよ。」と仰せられければ、かしこまりて罷でさせたまひぬ。
その夜はふけにければ、つとめてぞ、殿にまゐらせ給へるに、内へ参らせ給はむとて、御装束のほどなれば、え申させ給はず。大方には御ともに参るべき人々、さらぬもいでさせ給はむに、見参せむと多く参りつどひて、物さわがしければ、御車に奉りにおはしまさむに申さむとて、そのほど寢殿のすみのまの勾欄によりかゝりて、ゐさせ給へるを、源民部卿よりおはして、「などかくてはおはします。」ときこえさせ給へば、この殿にはかくし聞ゆべき事にもあらねば、「しかくゝの事のあるを、人々のさぶらへばえ申さぬなり。」とのたまはするに、御氣色うちかはりて、この殿も驚きたまふ。「いみじうかしこき事にこそあれ。たゞとくきかせ奉り給へ。内に参らせ給ひなば、いとゞ人がちにてえ申させ給はじ。」とあれば、けにと思して、おはします方に参り給へば、さならむと御心えさせ給ひて、すみのまに出でさせ給ひて、「東宮に参りたりつるか。」と問はせ給へば、よべの御消息くはしく申させ給ふに、「さらなりや、おろかにおほしめさむやは。おしておろし奉らむ事は、憚りおほしめしつるに、かかる事のいできぬる御よろこび猶つきせず。まづいみじかりける大宮の御宿世かな。」とおほしめす。

○なにかよき日云々
日柄の善悪はかま
はぬ。少しでも延引
せは思ひ返して退位
せどもよからうとし
たらは大變の事だ。

○いかゞはおほし云
云 如何に嬉しく思
つたらう。

○こちたく 仰山に
○すゞろはしう そ
はそは。

○心もしらぬ 今度
の事を知らぬ人。

○よろしき程のもの
世の事情を知る人
○おもひやりなきき
は 料見もない身分
○内のいかに云々
帝の御不例かまで

民部卿に申し合はせさせ給へば、「唯とくくせさせ給ふべきなり。なにかよき日をもと
はせ給ふ。少しものびば、おほし返して、さらでありなむとあらむをば、いかゞはせさせ
給はむ。」と申させ給へば、さる事と思して、御曆ごらんするに今日もあしき日にもあらざ
りけり。關白殿頼通もまるらせ給へるほどにて、とくくとそのかし申させたまふ。まつい
かにも大宮に申してこそはとて、内におはしますほどなれば、まるらせ給ひて、かくなむ
ときかせ奉らせたまへば、まして女の御心はいかゞはおほしめされけむ。それよりぞ東宮
まるらせ給ひて、かう申す事は寛仁元年八月六日の事なり。 御子どもの殿ばら、また
例も御ともにもまり給ふ上達部殿上人かんたちめ てんじやうびとひき具せさせ給へれば、いとこちたくひききこと
ておはしますを、まちつけさせ給へる宮の御心ちは、さりとも少しすゞろはしうおほしめ
されけむかし。

心もしらぬ人は、つゆ参りよる人だになきに、きのふ二位能信の中將殿のまるり給へりしだ
にあやしと思ふに、又今日かくおびたしく賀茂詣などのやうに、御さきのおともおど
ろおどろしう響きてまるらせ給へるを、いかなる事ぞとあきるに、少しよろしき程のも
のは、御匣殿の御事申させ給ふなめり、と思ふはさも似つかはしや。むけに思ひやりなき
きはのものは、又我が心にかゝるまゝに、内のいかにおはしますぞなどまで、心さわぎし
あへりけるこそ、あさましうゆゝしけれ。母宮だにもしらせ給はざりけり。

○この御方 東宮方
○案内し申させ 母
宮殿子が人をして訪
れさせ。
○殿には云々 東宮
は道長に向ひて年來
の御希望を委細申さ
ん云々。
○むかひ聞え云々
道長と御對面の時は
御傍の人々に氣おく
れ給ひしにや。
○かへり 道長返詞
○おしのごはせ 涙
を拭はせ。
○判官代 院廳に仕
へる判官。
○殿のまた云々 道
長が未だ小一條院を
退出しない時。

かくこの御方に物さわがしきを、いかなる事ぞとあやしくおほして、案内し申させたま
へど、例の女房のまるるみちを、かためさせたまひてけり。殿には年頃おほしめしつる事
などこまかにきこえむと、心づよくおほしめしつれど、まことになりぬるをりは、いかに
なりぬる事ぞと、さすがに御心さわがせ給ひぬ。むかひ聞えさせ給ひては、方々に臆せら
れたまひにけるにや、たゞ昨日のおなじさまに、中々言すくなにおほせらるゝ。御かへり
は、「さりともいかにかくはおほしめしよりぬるぞ。」などやうに申させ給ひけむかしな。御
氣色の心苦しさを、かつは見奉らせ給ひて、すこしおしのごはせ給ひて、さらばけふよき
日なりとて、院になし奉らせたまひて、やがて事どもはじめさせ給ひて、よろづのことさ
だめ行はせたまふ。判官代には、宮司みやつかさども藏人などはるべきにあらず。別當能信には中宮の
權大夫をなし奉り給へれば、おりて拜し申させ給ふ。事ども定まりはてぬれば、いでさせ
給ひぬ。

いとあはれに侍りける事は、殿のまださぶらはせ給ひける時、母宮の御方よりいつかた
の道より尋ね参りたるにか、あらはに御覽するもしらぬ氣色にて、いとあやしけなる姿し
たる女房のわなゝくく。「いかにかくはせさせ給へるぞ。」と聲もかはりて申しつるなむ、
あはれにも又をかしようもところ仰せられけれ。敕使こそ誰ともえたしかにもきき侍らね。
祿などにはかにていかにせられけむといへば、殿こそはせさせ給ひけめ。さばかりの事に

○逗留云々 道長が
 ぐすくしうぞ。
 ○火たきや 衛士の
 火をたき夜番する小
 屋。
 ○雲るまでの歌 後
 拾遺集雜部。意外に
 も東宮が帝位に即き
 給はるの意。
 ○よもこ まさかそ
 んな事はあるまいと
 ○いささばかり云々
 こんな大事の時に
 歌等は詠み出づまじ
 ○いみじき事の折か
 かる事 大事の時に
 歌をよむ事。
 ○御壻 御壻殿を奉
 りし事。
 ○おもの 御食物。
 ○なにをもちし試み
 道長が毒味して後
 ○御本意よ 小一條
 院が御満足されん。
 ○故式部卿の宮の御
 事 敦康が小一條院
 より前に東宮に立た
 んごの世評をいふ。
 ○昔の事も云々
 昔の事を語るは障り
 ないが現存の人の事
 をいふは不都合なり

なりて逗留せさせ給はむやは。火たきや陣屋などとりやられけるほどにこそ、えたへすし
 のびねなく人々侍りけれ。まして皇后宮堀河の女御殿などは、さばかり心ふかくおはしま
 す御心どもに、いかばかり思召しけむとおほえ侍り。世の中の人、女御殿の、
 雲るまでたちのほるべき煙か見えし思ひのほかにもあるかな
 といふ歌よみ給へりなど申すこそ、さらによもとおほゆれ。いとさばかりのことに和歌の
 すぢおほしよらじかしな。御心の中にはおのづから後にもおほえさせ給ふやうもありけ
 ど、人のききつたふるばかりはいかありけむといへば、翁一けにそれはさること侍れ
 ど、昔もいみじき事の折、かかる事いと多くこそきこえ侍りしか。とてさ、めくは、いか
 なる事にか。

さてかくせめおろし奉り給ひては、又御壻にとり奉らせ給ふほど、もてかしづき奉らせ
 たまふ御ありさま、まことに御心も慰ませ給ふばかりこそきこえ侍りしか。おものまるら
 するをりは臺盤所におはしまして、御臺や盤などまで手づから拭はせ給ふ。なにをもちし
 試みつ、なむまるらせ給ひける。御障子ぐちまでもておはしまして、女房にたまはせ、殿
 上にいだしほどにも、たちそひて、よかるべきやうに教へなど、これこそは御本意よとあ
 はれにぞ。このきはに故式部卿の宮の御事ありけりといふことも、そらごとなり。何故あ
 ることにもあらなくに、昔の事どもこそ侍れ、おはします人の御事申す便なきことなりか
 しな

○あくごころに 式
 部卿が關員となつた
 から。
 ○御さしづき すぐ
 つぎ。
 ○御かしづきもの
 大事にする者。
 ○あら三位 荒三位
 一本惡三位。
 ○名たさせ 醍醐が
 立ち。
 ○こちよりては 近
 代になりては。
 ○それぞかし 御兄
 である。

さて式部卿の宮と申すは故一條院の一のみにおはします。その宮をば、年ごろ帥の宮
 と申ししを、小一條院式部卿にておはしましたが、東宮にたたせ給ひて、あくごころに、
 帥をばのかせ給ひて、式部卿の宮とは申ししぞかし。その後の度の東宮にもはづれたまひ
 て、おほし歎きし程に、うせ給ひて後、又この小一條院の御さしづきの二の宮敦儀の親王
 をこそは、式部卿とは申すめれ。また次の三の宮敦平の親王を中務の宮と申す。次の四の
 宮師明の親王と申す。幼くより出家して、仁和寺僧正の御かしづきものにておはしますめ
 り。此の宮たちの御妹の女宮達二人、一所は、やがて三條院の御時の齋宮にてくだらせ給
 ひにしを、のほらせ給ひてのち、あら三位道雅の君に名たさせ給ひにければ、三條院も御
 なやみのをり、いとあさましき事におほしなきて、尼にならせたまひにき。いま一所の
 女宮まだおはします。
 濟時
 小一條の大將の御姫君こそは、たゞ今の皇后宮と申しつるよ。三條院の御時に后に立て
 奉らむとおほしけるに、こちよりては大納言のむすめにて后にたつ例なかりければ、御父
 の大納言を、贈太政大臣になしてこそは、后にたてさせ給ひてしか。されば皇后宮いとめ
 でたくおはしますめり。御せうと一人は侍從入道、いま一所は大藏卿通任の君こそはおは
 すめれ。又伊豫の入道もそれぞかし。

○父大將のさらせ云
 云 濟時の與へた遺
 産配分の領所。
 ○かちより 徒歩で
 ○御堂に云々 道長
 の許に参り訴へた。
 ○犬防ぎ 寺の御佛
 壇の前に立てる低い
 格子。
 ○御ひが耳 御聞き
 誤り。

○今しかすまじき云
 云 早速其の不都合
 な事を申しつけよう
 ○つ、ましく 恥か
 しく。

今一所の女君は、いと甚しく心うき御有様にておはすめり。父大將のとらせたまへりける處分の領所近江にありけるを、人にとられければ、すべきやうなくて、かばかりになりぬれば、物の恥かしさもしられずや思はれけむ、夜かちより御堂に参りて、うれへ申し給ひしはとよ。殿のおまへは阿彌陀堂の佛の御まへに念誦しておはしますに、夜いたくふけにければ、御脇息によりか、りて、すこし眠らせ給へるに、犬防ぎのもとに、人のけはひのしければ、怪しと思しめしけるに、女のけはひにて、忍びやかに、「物申しさぶらはむ。」と申すを、御ひが耳かとおほしめすに、あまたたびになりぬれば、まことなりけりとおほしめして、いとあやしくはあれど、「たぞあれは。」と問はせたまふに、「しかくの人の申すべき事さぶらひて参りたるなり。」と申し給ひければ、いとく淺ましくはおほしめせど、あらくおほせられむも、さすがにいとほしくて、「何事ぞ。」と問はせ給ひければ、「これしろしめしたる事にさぶらふらむ。」とて、事のありさままかに申したまふに、いとあはれにおほしめして、「更なり、皆ききたる事なり。いと不便なることにこそあなれ。今しかすまじきよし、速かにいはせむ。かくなりました事、あるまじき事なり。人してこそいはせたまはめ。とく歸られね。」とおほせられければ、「さこそは返すくもおもひ給へさぶらひつれど、申しつぐべき人の更にさぶらはねば、さりとあはれとは仰せごとさぶらひなむと思ひたまへて、参りさぶらひながらも、いみじうつ、ましくさぶらひつるに、かくおほせ

○やるかたなく せ
 ん方なく。

○不愛 愛敬なき事
 ○むづからせ 憤ら
 れ。
 ○御かしこまり 御
 勘當。
 ○御うれへの所云々
 御訴訟の地は永久
 論争なきやう云々。
 ○もよよりも云々
 以前よりも甚だ多分
 に知行し給ふ。
 ○中々におほえ云々
 御つていかはし
 く思つた。

らる、事、やるかたなくうれしくさぶらふ。」とて、手をすりて泣くけはひに、ゆ、しくもあはれにも思召されて、殿も泣かせ給ひにけり。

出で給ふ路に、南大門に人々るたる中をおはしければ、經任なにがしのぬしのひきとゞめられけるこそ、いと不愛の事なりや。後に殿もきかせ給ひければ、いみじうむづからせ給ひて、いと久しう御かしこまりにていましき。さて御うれへの所は、永く論あるまじく、この人にてあるべきよし仰せくだされにければ、もとよりのいとしたり、かに領じ給ふ、きはめていとよし。さばかりになりなむには、物の恥もしらでありなむ、かしく申したまへる、いとよき事と口々ほめ聞えしこそ、中々におほえ侍りしか。大門にてとらへたりし人は式部大夫源政成が父なり。
 さばかり優におはしけむ御末こそ、少しはかくしき人なけれ。

中 卷

一 右大臣師輔

・このおとゞは忠平のおとゞの二郎君、御母右大臣源能有の御女、いはゆる九條殿におはします。公卿にて二十六年。大臣の位にて十四年ぞおはしましたし。天徳四年五月二日

出家せさせ給ひにき、御年五十三にて。御むまごに東宮又四五の宮を見おき奉りて、

○せめてさ、やく云云 無理に呷くもの歎息す。

かくれ給ひけむは、きはめてくちをしき御事ぞや。御年また六十にも足らせ給はねば、ゆくすゑはるかにゆかしき事多かるべきほどにてと、世繼せめてさ、やくものから、手をうちてあふぐ。

その殿の御公達十一人女五六人ぞおはせし。第一の御女は、村上の先帝の御時の女御、多くの女御御息所の中に、すぐれてめでたくおはしましたしき。天徳二年十二月二十六日

后にたたせ給ふ、皇后宮と申しき、御年三十三。

○ありがたき御事云云 女御が難事を申し上げても帝は御承諾のない事はない。○すこし御心云々 女御は少し意地悪く御嫉妬もせられ給ふ

帝も、この女御殿には、いみじうおぢ申させ給ひき。ありがたき御事をも奏せさせたまふ事をば、いなびさせ給ふべくもあらざりけり。いはんや自餘の事をば申すべきならず。すこし御心さがなく、御物うらみなどもせさせ給ふやうにぞ、世の人にいはれおはしましたし。

○ふすべ 嫉妬し。○夕さり 夕方。

○童殿上 童で殿上を許されること。

○細殿 廊。

○例の事なり 十八番の嫉妬である。

○藤壺弘徽殿うへの御局 共に清涼殿内にあり。

○うべ 成程。

○伊尹兼通兼家 安子の兄弟。

○いひもよほして そ、かして。

○三所ながら云々 伊尹等三人とも謹慎を申しつけしがは。

し。御門をも常にふすべ申させたまひて、いかなる事のありけるをりにか、夕さり、わたらせおはしましたりけるを、御格子をたたかせ給ひけれど、あけさせ給はざりければ、叩きわづらはせたまひて、「女房になどあけぬぞとへ。」と、なにがしのぬしの童殿上したるが、御供なるにおほせられければ、あきたるところやあると、こ、かしこ見給ひければ、さるべき方は、みなたてられて、細殿の口のみあきたるに、人のけはひしければ、よりてかくとのたまひければ、いらへはともかくもせで、いみじく笑ひければ、参りてありつるやうを奏しければ、御門も打笑はせたまひて、「例の事なり。」と、おほせられてぞ、歸り渡らせおはしましたしける。此の童は伊賀の前司資國がおほぢなり。

藤壺弘徽殿うへの御局は、ほどもなくちかきに、藤壺の方には小一條の女御、弘徽殿のには此の後のほりておはしましたあへるを、いとやすからずおほしめして、えやしづめがたくおはしましたしけむ、中へだての壁に穴をあけて、のぞかせ給ひけるに、女御の御かたちのいとうつくしうめでたくおはしましたしければ、うべ時めくにこそありけれと御覽するに、いと心やましくならせ給ひて、あなよりとほるばかりのかはらけのわれして、うたせ給へりければ、御門のおはしますほどにて、こればかりにはえたへさせ給はず、むづかり坐して、「かうやうの事は女房はえせじ、伊尹、兼通、兼家などがいひもよほして、せさするならむ。」とおほせられて、皆殿上にさぶらはせたまふほどなりければ、三所ながら、かし

○この事 三人を勘當し給ひし事。
 ○さかさまの罪 逆罪。大逆の罪。
 ○まろがかたぎまにて 私に關した事で
 ○おさぎ見ぐるしき事なり 外聞悪し
 ○おはしましなほ云云 お還りあらは今が今にて御許しあるまじ、三人を唯此方に招いて許し給へ。をば強め語。
 ○侍りしかは かはは感動詞。
 ○あたりく云々 御身邊の人々に對してはそれ相應に見捨てず御世話された。
 ○御みやびをかはさせ給ふに 御風流の情を交し給ふに。
 ○御物妬みの云々 御嫉妬の爲にはつまらぬ事をもされた。
 ○御ゆるされに云々 安子の我慢が出来ない時が折々現はれるから斯かる事も起るのだ。

こまらせ給へりしかば、そのをりに、后いとッおほきに腹立たせたまひて、「わたらせたまへ。」と申させ給へれば、おもふにこの事ならむとおほしめして、わたらせ給はぬを、度々なほくと御消息ありければ、渡らずばいとッこそむつがらめと、おそろしくいとほしくおほしめして、おはしましたるに、「いかでかかる事はさせ給ひたるぞ、いみじからむさかさまの罪ありとも、此の人々をばおほし許すべきなり。いはんやまろがかたぎまにて、かくせさせたまふは、いとあさましく心うき事なり。只今めしかへせ。」と申させ給ひければ、「いかでか只今はゆるさむ。おとぎき見ぐるしき事なり。」ときこえさせ給ひけるを、「更にあるべき事ならず。」とせめ申させ給ひければ、「さらば。」とてかへりわたらせ給ふを、「おはしましなば、只今しもゆるさせたまはじ、只こなたにてをめせ。」とて、御袖をとらへ奉りて、立て奉らせ給はざりければ、いかッはせむとおほしめして、此の御方に職事めしてぞ、まるるべきよしの宣旨くださせ給ひける。

これのみにあらず、かやうなる事どもいかに多くきこえ侍りしかは。大方の御心はいとひろく、人の御ためなどにも思ひやりおはしまし、あたりくにあるべきほどくは、すぐさせ給はず、御かへりみあり。かたへの女御たちの御爲にもかつは情あり、御みやびをかはさせ給ふに、心より外にあまらせ給ひぬる時の御物妬みのかたにや、いかッおはしましけむ。此の一小一條の女御は、いとかく御かたちのめでたうおはすればにや、御ゆるさ

○その道は云々 嫉妬の道は性質の善惡によらず思案の外た
 ○さるまじき女官 見舞する必要もない
 卑しい女官。

れにすぎたるをりくの出でくるにより、かかる事もあるにこそ。その道は心ばへにもよらぬ事にやな。かやうの事までは申さじ、いとかたじけなし。
 大かた殿上人女房さるまじき女官までも、さるべきをりのとぶらひをさせ給ひ、いかなるをりも、必ず見すぐし聞き放たせたまはず、御覽じ入れてかへり見せさせ給ふ。まして御はらからだちをばさらなりや。御兄をば親のやうに頼み申させ給ひ、御弟をば子の如くに、はぐ、み給ふ御心おきてぞや。さればうせ坐^{おはしま}したりしことわりとはいひながら、

の中世界までこそは聞きつき奉りて惜しみかなしび申ししか。
 御門よろづのまつり事をば聞えさせあはせて、せさせたまひけるに、人の爲歎きとあるべき事をば直させたまひ、喜びとなりぬべき事をばそ、のかし申させ給ひ、おのづからおほやけきこしめして、あしかりぬべき事など人の申すをば、御口よりいださせ給はず。かうやうの御心おもむけのありがたくおはしませば、御祈りともなりて、ながく榮えおはしますにこそあべかめれ。

冷泉院、圓融院、爲平の式部卿の宮と、女官四人との御母后にて、又ならびなくおはしましき。みかど東宮と申し、代々の關白攝政と申すも、多くはたゞこの九條殿のひとすぢなり。男宮たちの御ありさまは、代々の御門の御事なれば、かへすく又はいかッ申し侍らむ。

○の中世界 田舎。
 ○聞えさせあはせて 安子と御相談され
 て。
 ○おのづからおほやけ云々 帝が聞き給ひてよからぬ事を入が偶々云ふ場合には安子が御告申さず
 ○御心おもむけ 御心掛。
 ○御祈りともなりて 人々から祈願され
 て。

○いみじく侍り 甚だ悲し。
 ○御をぢたちの云々 伊尹兼家兼通が執念深く道に外れて。
 ○御ぐしかいけづり 給へ 御髪梳り給へ
 ○北の陣 朔平門。
 ○道理あるべき御かたの人たち 爲平親王方の人達。
 ○事しもあれ 事もあらうに。
 ○威儀の親王 御即位式の時等に威儀を整へる事を掌る親王これを爲平に命ず。
 ○さてぞかし それたからよ。
 ○かなしき御事 西宮殿の権帥に左遷された事。
 ○ふあいの物 不愛想のもの。
 ○おほしくづほれて 落膽して。

此の後の御腹には式部卿の宮こそは、冷泉院の御次に、まづ東宮にもたち給ふべきに、西宮殿の御壻におはしますにより、御弟のつぎの宮に、ひきこされさせ給へるほどなどの事どもいといみじく侍り。その故は、式部卿の宮、御門にるさせ給ひなば、西宮殿の御ぞうに世の中うつりて、源氏の御榮えになりぬべければ、御をぢたちの魂ふかく非道に、御弟をばひきこし申させ奉らせ給へるぞかし。

世の中にも宮の中にも、殿ばらのおほしかまへけるをば、いかでかはしらむ。次第のままにこそはと式部卿の宮の御事を思ひ申したりしに、俄に若宮圓融院御ぐしかいけづり給へなど、御めのとたちに仰せられて、大入道殿御車にうちのせ奉りて、北の陣よりなむおはしましけるなどこそは傳へうけたまはりしか。されば道理あるべき御かたの人たちは、いかはおほされけむ。そのころ宮たちあまたおはせしかど、事しもあれ、威儀の親王みこをさへせさせ給へりしよ。見給へりける人もあはれなる事にこそ申しけれ。そのほど西宮殿などの御こ、ちよな。いかはおほしけむ。さてぞかし、いとおそろしくかなしき御事どもいできにしは。かやうに申すもなか／＼にいと／＼ことおろかなりや。かくやうの事は人中にて下藤の申すにいとかたじけなし、とゞめさぶらひなむ。されど猶われながらふあいの物にておほえさぶらふにや。

式部卿の宮我が御身のくちをしう本意なきを、おほしくづほれてもおはしまさで、なほ

○御つき 繼嗣の皇子。
 ○道信中將 爲光の三男、道兼の養子。
 ○さもなくば 取合はずして。
 ○かのおまじ 實資
 ○御子の日 正月の初子の日 此の日野に出で小松を引き千代を祝ふ。
 ○世おぼえ 人望。
 ○瀧口をはなちては 禁中警固の武士を除いては。
 ○布衣のもの 無官の者。
 ○所やは侍りしとよ 立錫の餘地なし。
 ○つぶさ 全く。
 ○えもいはぬうち出で 頗る美しき打出衣。

末の世に、花山院の御門は、冷泉院のみにおはしませば、御をひぞかし。その御時に御むすめ奉り給ひて、御みづからもつねにまるりなどしたまひけるこそ、さらでもありぬべけれ。世の人もいみじうそしり申しけり。さりとて御つきなどのおはしまさば、古の御本意のかなふべかりけるとも見ゆべきに、御門出家し給ひなどせさせ給ひてのち、又この今の小野宮の右大臣殿の北の方にならせ給へりしよ。いとあやしかりし御事どもぞかし。その女御殿には、道信中將の君も、御消息きこえ給ひけるに、それはさもなくば、かのおとゞに参り給ひにければ、中將の申し給ふぞかし。「うきは身にしむ心ちこそすれ。」とは、いまに人の口にのりたる秀歌にて侍るめり。

まこと此の式部卿の宮は、世にあはせたまへるかひあるをり、一度おはしましたるは。御子の日の日ぞかし。御弟の皇子たちも、いまだ幼くおはしまして、かの宮おとなにおはします程なれば、世おほえ、御門村上の御もてなしも、ことに思ひ申させたまへるあまりに、その日こそは、御供の上達部殿上人などの狩装束馬鞍まで、内裏のうちに召し入れて御覽するは、又なき事とこそは承れ。瀧口をはなちては、布衣はいのもの内にまるることは、かしくき君の御時も、かかる事の侍りけるにや。大方いみじかりし日の見物ぞかし。

物見車は大宮のほりに、所やは侍りしとよ。さばかりの事こそ、この世にはえさぶらはね。殿ばらのたまひけるは、「大路わたる事はつねなり。藤壺のうへの御局につぶとえも

○内の御まへ 天皇
○一町かねては 一町位は。

○心のかぎり云々
思ふ存分今日は我が天下に許りあたりの人を拂はせ互に飾りし有様。
○きそく 氣色。

○この御一すぢ 安子の御一統。
○うけたまへれば 御承諾されたので。

いはぬうち出でども、わざとなくこほれいでて、后の宮、内の御まへなどさしならび、みすのうちには、おはしまして御覽せしに、御まへ通りしなむ倒れぬべき心せし。」とこそ宣ひけれ。
又それのみかは、大路にも宮の出車いだしぐるま十許りひきつゞけて立てられたりしは、一町かねては、あたりに人もかけらず。瀧口さぶらひの御前ごぜんどもに、えりと、のへさせ給へりし、さるべきもの子どもにて、心のかぎり今日はわが世と、人はらはせ、きらめきあへりしきそくどもなど、よそ人まことにいみじうこそ見侍りしかとて、車のきぬの色などをさへ語りぬたるぞあさましきや。

さてこの御腹におはしましたし女宮承子一所はいとほかなくうせ給ひにしぞかし。又女七輔子の宮は、御物怪こはくうせ給ひにき。今一所は入道一品宮とて三條におはまじき。

うせ給ひて十餘年にやならせ給ひぬらむ。うみおき奉らせたまひしたびの十の宮こそは、今の齋院におはします。いつきの宮世におほくおはしますと、これはことに動きなくよに久しくたもちおはしますも、たゞこの御一すぢのかく榮え給ふべきとぞ見申す。御門たびくうせ給へど、この齋院はうごきなくおはします。それも賀茂の明神のうけたまへれば、かくうごきなくおはしますなり。

昔の齋宮齋院は、佛經などの事はいませ給ひけれど、此の宮には佛法さへ崇め給ひて、

○布施 僧に施す物
○神人 神に仕ふ人
○さながらさにも 皆一緒に。
○さりて云々 佛法を信仰し給へば、尙現世の御榮華も修得された。

○御禊 加茂祭のため四月の中の午日齋院が有栖川でみそぎし給ふ儀。
○三箇日の作法 御禊中の申の日の國祭さ中の酉の日の御祭。
○本院 齋院の居所
○さる御心まうけ 祿の御用意。
○御こうちき 御小

○とりわきたるさま 特別の待遇。
○えせもの 馬鹿者
○二所 後一條、後朱雀。

朝ごとの御念誦ねんずかかせたまはず。ちかうはこの御寺のけふの講には、さだめて布施をこそおくらせ給ふめれ。いととうより神人かみびとにならせ給ひて、いかでかかる事をおほしめしよりけむとおほえさぶらふは。賀茂の祭の日一條の大路にそこらあつまりたる人、さながらとにも佛とならむと、ちかはせたまひけむこそ、なほあさましく侍れ。さりとて又現世の御榮華をと、のへさせ給はぬかは御禊よりはじめ三箇日の作法、出車などのめでさは。おほかた御さまのいというにらうくしくおはしましたるぞ。

今の關白殿、兵衛佐にて御禊を御前させ給へりしに、いとをさなくおはしますせば、例は本院にかへらせ給ひて、人々に祿などは賜はするを、これは河原よりいでさせ給ひしかば、おもひかけぬ御事にて、さる御心まうけもなかりければ、御まへに召しありて御對面などせさせ給ひて、奉りたまへりける御こうちきをぞ、かづけ奉らせ給ひける。入道殿きかせたまひて、「いとをかしくもし給へるかな。祿なからむも便なく、とりにやり給はむも程へぬべければ、とりわきたるさまを見せ給ふなめり。えせものはえおもひよらじかし。」とぞ申させ給ひける。

この當代後一條 後朱雀や東宮などのまだ宮たちにておはしましたし時、祭見せ奉らせたまひし御さじきのまへすぎさせたまふほど、殿の御膝に二所ながらするゑまるらせ給ひて、「此の宮たち見奉らせ給へ。」と、申させ給へば、御輿のかたびらより、あかいろの御扇のつまを、さしいで

○院 齋院。
 ○ひかり出づるの歌 後拾遺集雜部。あふひに葵に逢ふ日を掛く。未來の帝たるべき御子に逢ひ奉り老年の我も嬉し。
 ○もろかづらの歌 同集同部。もろかづらは桂に葵をつけてかざす。ふた葉は年若き意。親王達の幼く坐しながら齋院に逢ひ奉るは賀茂神の御蔭であらう。
 ○この事 歌の贈答 追従ふかき云々 詔ひ多き老翁者よあお御世辭のよきかな
 ○この宮のうへ 登子。
 ○后 登子の姉安子 いろなる御心ぐせにて 好色の御辭おはして。
 ○后さらぬことだに 云々 安子は唯さへ嫉妬の方面には心程かにあられない中にまして之は御妹の事故氣にくはないが。

させ給へりけり。殿を始め奉りて、なほ心ばせめでたくおはする院なりや。かかるしるしを見せ給はずばいかでかは見奉らせ給はむともしらまじとこそは、感じ奉らせ給ひけれ。さて齋院より大宮にきこえさせ給へる、
 ひかり出づるあふひのかけを見てしより年つみけるも嬉しかりけり
 御かへし、

もろかづらふた葉ながらに君にかくあふひや神のしるしなるらむ
 けにも賀茂の明神などのうけ奉り給へればこそは、二代までうちつゞきさかえさせたまふらめな。「この事いとをかしうせさせ給へり。」と、世の人申ししに前師殿のみぞ「追従ふかき老いぎつねかな、あなあいきやうな。」と申し給ひける。
 まことこのきさいの宮の御弟登子の中の君は重明式部卿の宮の北の方にてぞ、坐せしかし。その親王は村上の御はらからにおはします。この宮のうへ、さるべき事のをりは、物見せ奉りにとて、后のむかへ奉りたまへば、忍びつゝ参り給ふに、御門ほのかに御らんじて、いとうつくしうおはしましたしけるを、いといろなる御心ぐせにて、宮にかくなむ思ふとあながちにせめ申させ給へば、一二度しらすかほにて、ゆるし申させ給ひてけり。
 さてのち御心は通はせ給ふけなる御けしきなれど、さのみはいかゞはとやおほしめしけむ。后さらぬことだに、このかたざまには、なだらかにえつくりあへさせ給はざるな

○ひろう 寛大に。
 ○人の御ため云々 帝登子の御爲外聞悪く無情でもあれは。
 ○かなしき事 同情の深い事。
 ○わりなく 無上に

○よそ人は云々 高明の後妻を他人より娶らば子供爲悪からう。
 ○四の君 繁子。
 ○六の君 付子。
 ○おはしまさふ おはします。
 ○五人 伊尹、兼通兼家、爲光、公季。
 ○驗者 加持祈禱をする人。

かに、ましてこれはよそのことよりは、心づきなうもおほしめしぬべけれど、御あたりをひろうかへり見給ふ御心の深さに、人の御ため聞きにくうたてあれば、なだらかに色にもいでず、すぐさせ給ひけるこそ、いとかたじけなうかなしき事なれな。さて后の宮もうせおはしましたし後に、式部卿の宮もうせたまひて、みかどわりなくこひしとおほしければ、めしとりて、いみじく時めかさせたまひて、貞觀殿の内侍のかみとぞ申ししかし。世になくおほえおはして、こと女御御息所そねみ給ひしかどかひなかりけり。これにつけても、九條殿の御さいはひとぞ、人申しける。
 又三の君は、西宮殿高明の北の方にておはせしを、御子うみて、うせ給ひにしかば、よそ人は君たちの御ためあしかりなむとて、また御弟の五にあたらせ給ふ愛君と申すにうつらせ給ひにき。四の君はとくうせ給ひにき。六の君は冷泉院の東宮におはしましたしにまるらせ給ひなど女君たちはみなかくおはしまさふ。
 をとこ君たちは、十一人の御なかに五人は太政大臣にならせたまへり。それあさましくおどろくしき御さいはひなりかし。その御外は、右兵衛督忠君、又北野の三位遠度、又大藏卿遠量、多武峯入道少將君なり。又法師にては飯室の權僧正、今の禪林寺の僧正などにこそはおはしますめれ。法師といへども、よの中の一の驗者にて、佛の如くにおほやけわたくし、たのみあふぎ申さぬ人なし。又北野の三位の御子は尋空律師、朝源律師などな

○粟田殿 道兼。
○この御ぞう 九條
殿師輔の御一族。

○みやこよりの歌
新古今集雜部。よか
はは寂山三塔の一な
る横川。

○こゝへの歌 同
集同部。

○多武峯 大和國鎌
足の臺所のある所。

○正月二七夜 正月
十四日の夜。

○中堂 根本中堂。

○今一度に やがて
出家後かためて念誦
せん。

○思ひもさがめられ
ざりき 殿屋は別に
怪しまなかつた。

り。又大藏卿の御女子は、粟田殿の北の方、いまの左衛門督兼隆のは、うへ。

この御ぞう、かやうにておはします中に、多武峯の少將の出家したまへりしほどは、いかにあはれにも、やさしくも、さまざまなる事どもの侍りしかは。中にもみかどの御消息つかはしたりしこそ、おほろけならず御心もやみだれ給ひけむと、かたじけなくうけたまはりしか。

みやこより雲のやへたつおく山のよかはの水はすみよかるらむ
御かへし、

こゝへのうちのみ常にこひしくて雲のやへたつ山はすみうし
はじめは横川におはして、後に多武峯には、すませ給ひき。いとみじく侍りしことぞかし。

されどもそれは九條殿后の宮などうせおはしまして後の事なり。此の右馬頭顯信の殿の御出家こそ、親たちの榮えさせ給ふ事のはじめをうちすて、いとくありがたうかなしかりし御事よ。とうより、さる御心まうけは、おほしよらせ給ひけるにや、御はらからの公達に貝し奉りて、正月二七夜のほどに、中堂にのほらせ給へりけるに、さらに御おこなひもせで、おほとのごもりたりければ、殿ばら、「曉になどかくてふし給へる。起きて念誦ねんじゆもせさせ給へかし。」と、申させ給ひければ、「今一度に。」と宣ひしを、そのをりは思ひもとが

められざりき。

かやうの御ありさまをおほしつゞけるにやとこそ、このをりには君たちおほしいでて申し給ひけれ。さりとしてうち屈しや、いかにぞやなどある御けしきもなかりけり。人よりことにほこりに、心ちよけなる人がらにてぞおはしましたしける。

この九條殿は百鬼夜行にもあはせ給へるは。何れの月といふ事はえうけたまはらず。いみじう夜ふけて、内よりまかでさせ給ふに、大宮より南さまへおはしますに、あはの辻のほどにて、御車のすだれうちたれさせたまひて、「御車牛をかきおろせ。」と、いそぎおほせらるれば、あやしと思へどかきおろしつ。御隨身御前ども、いかなる事のおはしますと、御車のもとに近く参りたれば、御下簾うるはしくひきたれて、御笏とりて、うつぶさせ給へるけしき、いみじう人にかしこまり申させたまへるさまにておはします。「御車は榻しぢにかくな。只隨身どもは轅なぐさの左右に、くびきのもとに、いと近くさぶらひて、さきをたかくおへ。雑色ざつしきどもも聲たえさすな。御前ごぜんどもも近くあれ。」とおほせられて、尊勝陀羅尼をいみじうよみ奉らせたまふ。牛をば御車のかくれのかたに、ひきたてさせたまへり。

さて時なかばばかりありてぞ、御すだれあけさせ給ひて、「今は牛かけてやれ。」と仰せられけれど、つゆ御ともの人々は心もえざりけり。後々にしかくの事ありしなど、さるべ

○かやうの御ありさま 出家の事。
○うち屈しや云々 繫結したり疑つたり等する御様子なし。
○ほこりに 揚々として。
○百鬼夜行 種々の妖怪が行列して夜行
○あはの辻 二條大宮邊。
○下簾 牛車の前後の簾内に懸ける絹布
○榻 轅を支へる階臺。
○くびき 轅。轅の端の横木。
○かくれ 陰。

○時なかば 今の一時間。

○ちり侍り 廣がる
○民部卿の御孫 廣平親王。

○まうけの君 儲君
○御庚申 御庚申待
○攤うたせ 雙六をする。

○でう六いでこ 重六で賽の六の目が引續き二度出よ。

○たゞ一度に云々 唯一度に二つとも六の目が現はれしよ。

○もてはやし ほめはやし。
○靈にいでまして 元方の生靈が現はれて。

○その夜やがて云々 師輔の詞で庚申の夜の事を思ひ出し胸に釘を打たれた如く感じた。

○御夢たがひて こしやくな女房の言により吉夢が相違して。

き人々にこそは忍びて語り申させ給ひけめど、さるめづらしき事は、おのづからちり侍りけるにこそは。

元方民部卿の御孫、まうけの君にておはするころ、みかどの御庚申させ給ふに、この民部卿まるり給へるさらなり。九條殿さぶらはせ給ひて人々あまたさぶらひて、攤うたせ給ふついでに、冷泉院の孕まれおはしましたるほどにて、さらぬだに世の人いかゞと思ひ申したるに、九條殿、「いでこよひの攤つかうまつらむ。」と仰せらるゝまゝに、「このはらまれたまへる皇子男におはしますべくば、でう六いでこ。」とて、うたせたまひけるに、たゞ一度にいでくるものか。ありとある人、目を見かはして、感じもてはやしたまひ、わが御みづからも、いみじと思したりけるに、この民部卿の御けしき、いとあしうなりて色もいと青くこそなりたりけれ。さて後に靈にいでまして「その夜やがてむねに釘は打ちてき。」とこそそのたまひけれ。

大かた此の九條殿いとたゞ人にはおはしませぬにや、おほしめしよるゆくすゑの事なども、かなはぬはなくぞ、おはしましける。くちをしかりける事は、いまだいとわかおはしましける時、「夢に朱雀門の前に、左右の足を西東の大宮にさしやりて、北むきにて内裏をいだきてたりとなむ見えつる。」とおほせられけるを、御前になまさかしき女房のさぶらひけるが、「いかに御股いたうおはしまつらむ。」と申したりけるに、御夢たがひて、かく

御子、むまごは榮えさせ給へど、攝政關白えしおはしませずなりにし。

又御末におもはずなる御事のうちまじり、帥殿伊周の御事なども、これがたがひたるゆゑに侍るめり。いみじき吉左右吉左右の夢も、あしざまにあはせつればたがふと、昔より申したへて侍ることなり。荒涼くわうりやうして心しらざらむ人の前にて、夢語りぞこのきかせ給ふ人々おはしまさざれ。いまゆくするも、九條殿師輔の御ぞうのみこそ、とにかくにつけて、ひろごりさかえさせ給はめ。

いとをかしき事は、かくやん事なくおはします殿の、貫之のぬしの家におはしましたりしこそ、なほ和歌はめざましき事なりかとおほえ侍りしか。正月一日つけさせたまふべき魚袋ぎよたかのそこなはれたりければ、つくろはせ給ふほど、まづ貞信公忠平の御もとにまゐらせたまひて、かうくの事の侍れば、うちに遅く参るよしを申させ給ひければ、おほき大殿おどろかせたまひて、年頃もたせ給へりける、とりいでさせたまひて、やがてあえものにもとて、奉らせ給ふを、ことうるはしう松の枝につけさせ給へり。その御かしこまりのよろこびは、御心のおよばぬにしもおはしませざらめど、なほ貫之にめさむとおほしめして、わたりおはしましたるを、まちつけ申しけむ面目、いかゞはおろかなるべきな。

吹く風ふくかぜにこほりとけたる池のうへを千代まで松のかけにかくれむ集にかきいれたることわりなりかしな。

○帥殿の御事 伊周の太宰帥に貶せられた事。
○吉左右の夢 よきおとづれの夢。
○あはせ トふ。
○荒涼して云々 うつかりして物の理を知らぬ人の前で。
○和歌は云々 これ和歌の徳で忝い事だ。
○魚袋 東帯の時石帯の右につける印籠如きもの。
○あえものにもとて 父の高位高官にあやかれとて。
○その御かしこまり 云々 其の御禮の喜びの歌は師輔にも出来たれど。
○吹く風の歌 師輔を魚、貞信公を松に喩ふ。
○集 貫之歌集。

○冷泉院 師輔の御孫物怪で御狂ひあり
 ○その御門 冷泉院
 ○はつかに やつこ
 ○諸大夫 五位六位の侍で攝家の家司等に使はれる卑官。
 ○つられ 連れられ
 ○さるかたち云々 道長肥大なりし故左様な貌せる諸大夫達が云々戯れの語。
 ○その御時云々 冷泉院の時の事を先例とす。
 ○人の目にあらはれて 人目につく様に
 ○うつ、にても 生前にも。
 ○おはしまさぬ云々 師輔薨後には冷泉院を御守護申した。
 ○さらば云々 給ふべきなまで青侍の詞
 ○それは云々 以下世繼の詞。
 ○御心いと云々 冷泉院の御心云々。
 ○あたらしき事 惜しき事。

古より今に限りもなくおはします殿の、たゞ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心うく口をしき事にておはしますといへば、侍「されば事の例には、まづその御時をこそはひかるめれ。」といへば、それはいかでか、さらでは侍らむ。その御門のいでおはしましたればこそは、ながくこの藤氏の殿ばらいまにさかえおはします。さらざらましかば、このごろ、はつかに、われらも諸大夫ばかりになりいでて、所々の御前雑役に、つられありきなましとこそ、入道殿はおほせらるれば、源民部卿は「さるかたちしたるまうちぎみ達のさぶらはましかば、いかに見ぐるしう侍らまし。」とこそわらひ申させ給ふなれ。かかれおほやけわたくし、その御時の事をためしとせさせたまふ、ことわりなり。

御物怪こはくて、いかゞとおほしめしに、大嘗會の御祓にこそ、いとうるはしくて、わたらせ給ひにしか。それは人の目にあらはれて、九條殿なむ御うしろをいだし奉りて、御輿のうちにはさぶらはせたまひけるとぞ、人申し。けにうつ、にても、いとたゞびとは見えさせ給はざりしかば、ましておはしまさぬあとには、さやうに御まもりにて、そひ申させ給ひつらむ。さらば元方の卿桓算供奉をぞおひのけさせ給ふべきな。それはまたしかるべきさきのよの御報いにこそはおはしましけめ。さるは御心いとうるはしくて、世のまつりごとまかしこくせさせ給ひつべかりしかば、世の中にいみじうあたらしき事にぞ申すめりし。

○經邦のむすめ 盛子。
 ○をんな子 女は氏なくして玉の輿に乗る意。

○九條殿の御遺言 質素を守るべき師輔の御遺言。

○御集 豊蔭歌集といへば傳はらず。

○畧定 畧式。
 ○いごさは そんなに畧式にされようぞ

○春日の使 祭の前日に立つ使。

さてまた今は故九條殿の御子どももの數、この冷泉院圓融院の御母后、貞觀殿の内侍のみ、一條攝政、堀河關白、大入道殿、忠君の兵衛督と六人は、武藏守從五位上經邦のむすめのはらにおはします。世の人をんな子といふ事は、この御ことにや。大かた御はら異なれど、男君たち五人は太政大臣、三人は攝政したまへり。

一 太政大臣伊尹

このおとゞは一條攝政と申しき。これ九條殿の一男におはします。いみじき御集つくりて、豊景となのらせたまへり。

大臣になりさかえ給ひて三年、天祿三年十一月一日に失せ給ひにき、御年四十九。

御いみな謙徳公と申しき。いと若くて失せおはしましたる事は、九條殿の御遺言を違へさせ給へおはせましつるとぞ人申しける。されどいかでかは、さらでもおはしますまむ。御葬送のさたを、むけに畧定にかきおかせ給へりければ、いかでか、いとさはとて、例の作法に行はせ給ふとぞ。これはことわりの御しわざぞかし。たゞ御かたち身のさえなにも事あまりすぐれさせ給へれば、御いのちのえとゞのはせ給はざりけるにこそ。をりくの御和歌などこそめでたく侍れな。春日の使におはしまして、かへるさに女のもとにつかはしける。

○ミをちの里 大和國十市里なれど、濱地の里をも含む。

○吉野の山 よき所を含む。

○助信 敦忠二男。

○宇佐の使 宇佐八幡宮への使。

○さほまほくの歌 君の此處に居てさへ飽かぬに遠く宇佐へ行き給ふかの意。

○おもひよる云々 普通人の考へつかぬ事である。

○世尊寺 一條北、大宮西。

○氏寺 祖先を祀れる寺。

くればとく行きてかたらむ逢ふ事はとをちの里の住みうかりしも御かへし、

あふことはとをちの里にほどへしも吉野の山とおもふなりけむ

助信の少將宇佐の使にてくだられしに、殿上にてうまのはなむけに菊の花のうつろひたるを題にて、別れの歌よませ給へる、

さばとほくうつろひぬとかきくの花をりて見るだにあかぬ心を

御門の御をち東宮のおほぢにて攝政させ給へば、世の中はわが御心になはぬことなく、過差くわさことのほかにこのませ給ひて、大饗させ給ふに、寢殿のうら板のかべの少しくろかりければ、俄に御らんじつけて、とくみちの國がみを、つぶとおさせ給へりけるが、なか／＼白くきよけに侍りける、おもひよるべき事かはな。御家は今の世尊寺ぞかし。御ぞうの氏寺にておかれたるを、かやうのついでには立ち入りて見給ふれば、まだその紙のおされて侍るこそ、むかしにあへるこゝちして、あはれに見給ふれ。かくやうの御さかえを御覽じおきて、御年五十にだにたらでうせさせ給へるおたらしさは、父おとゞにもおとらせたまはずとこそ、世の人惜しみ奉りしか。

其の御をのこ子、女君達あまたおはしましき。女君一人は、冷泉院の御時の女御にて、花山院の御母、贈皇后宮にならせ給ひにき。つぎ／＼の女君二人は法住寺ほうじうの大臣の北の方

にて、うちつゞきうせさせ給ひにき。九の君は冷泉院の彈正宮つるすゐと申しし御うへにて坐せしを、その宮うせたまひてのち、尼にていみじう行ひ勤めておはすめり。又忠君の兵衛督の北の方にておはせしが、後には六條むつじの左大臣殿の御子の右大辨みぎだいべんのうへにておはしけるは、四の君とこそは。

又花山院の御いもうとの女宗子の宮はうせ給ひにき。女二の宮は冷泉院の御時の齋院いはいにたせ給ひて、圓融院の御時の女御にまゐり給へりし、ほどもなく内の焼けにしかば、火宮と世の人もつけ奉りき。さて二三度まゐり給ひてのち、ほどもなくうせさせたまひにき。この宮に御覽ぜさせむとて、三寶繪はつくれるなり。

男君達おとぎは代明よあきの親王みこの御女みづめのはらに前少將まへせうしやう後少將ごせうしやうとて花ををり給ひし君達の、殿いみうせ給ひて三年ばかりありて、天延二年甲戌てんえんににえんのとし、もがさおこりたるにわづらひ給ひて、前少將はあしたにうせ給ひ、後少將はゆふべにかくれ給ひしぞかし。一日がうちに二人の子を失ひ給へりし母北の方の御こゝちは、いかなりけむ、いとこそ悲しく承りしか。

かの後少將は義孝よしたかとぞ聞えし。御かたちいとめでたくおはしまし、年頃きはめたる道心者みちこころにぞおはしましける。病重くなるまゝに、生くべうもおほえたまはざりければ、母うへに申し給ひけるやう、「おのれ死に侍りぬとも、とかく例のやうにせさせ給ふな。しばし法華經ほふくわ誦し奉らむの本意侍れば、かならずかへりまうでくべし。」とのたまひて、方便品はんべんを讀

○三寶繪 佛法僧に關する佛畫。
○花ををり 容貌美しき。
○道心者 佛道に志深き者。
○とかく例のやうに じやくく死人を扱ふ普通の方法に。
○かへりまうでくべし 蘇生し來らん。
○方便品 二十八品中の一で成佛の方便を説く。

○枕がへし 死人の枕を北向にする事。

○えかへり給はず 義孝は蘇生されず。

○しかばかりの歌 後拾遺集哀傷部。渡り川は三途川。

○あたはぬさまのけしき 兄君の如き物思はしき様は出来な

い顔つきで。

○時雨の歌 時雨の如く蓮花の散り亂る

る淨土に我あるに何故古里では我を悲しむのか。

○蓬萊宮 宮中。

○うちわたり 禁中

○ぬかを云々 西方淨土に向ひて何度も額づき給へり。

○こき指貫 濃紫の指貫袴。

○ゆたち 衣の左の袖の腋をあけた所。

○鬢ぐきの掲焉に 鬢の毛筋があらはに

○見つき／＼云々 見届ける爲にあまについで行きて。

み奉り給ひてぞうせ給ひける。その遺言を母北の方忘れ給ふべきにあらねど、物も覺えておはしければ、思ふに人のし奉りてけるにや、枕がへしなにと、例のやうなるありさまでもにしてければ、えかへり給はずなりにけり。後に母北の方の御夢に見え給ひける。

しかばかり契りしものを渡り川かへる程には忘るべしやはとぞよみ給へりける、いかにくやくしくおほしけむな。

さて後ほどへて賀縁阿闍梨と申す僧の夢に此の君達二人おはしけるが、兄の前少將はいたう物思へるさまにみえ、此の後少將は、いとこ、ちよけなるさまにて見え給ひければ、阿闍梨君は、「などこ、ちよけにておはする。母うへは君をこそは兄君よりはみじうこひ聞え給ふめれ。」と聞えければ、いとあたはぬさまのけしきにて、

時雨とははちすの花ぞちりまがふなにふる里に袖ぬらすらむなどうちよみ給ひける。

さて後に小野宮の實資のおとゝの御夢に、おもしろき花のかけにおはしけるを、うつ、にもかたらひ給へりし御中にて、いかでかくては、いづくにかと、めづらしがり申し給ひければ、

昔契蓬萊宮裏月。 今遊極樂界中風。

とぞのたまひけるは、極樂にうまれ給へるにぞあなる。かやうにも夢などしめし給はずと

も、この人の御往生をうたがひ申すべきにあらず。

よのつねの君達のやうに、うちわたりなどにも、おのづから女房とかたらひ、はかなきことをだに、のたまはせざりけるに、いかなるをりにかありけむ、細殿にたちより給へれば、例ならずめづらしくて、物がたり聞えさせけるに、やう／＼夜なかななどにもなりやしぬらむとおもふほどに、たちのきたまふを、いつかたへかとのかしうて、人をつけ奉りて、見せたりければ、北の陣よりいで給ひけるほどより、法華經をいみじくたふとく誦し給ひ、大宮のほりにおはして、世尊寺におはしましつきぬ。なほ見れば、東の對のつまなる紅梅のいみじうさかりにさきたる下にたたせ給ひて、滅罪生善往生極樂といふ。ぬかを西にむかひてあまたたびつかせ給ひけり。かへりて御ありさまかたりければ、いと／＼あはれにきき奉らぬ人なし。

この翁もそのころ大宮なる所にやどりて侍りしかば、御聲にこそ驚きて、いとみじううけたまはりしか。出でて見奉りしかば、空はかすみ渡りたるに、月いみじうあかくて、御直衣のいと白きに、こき指貫に、よいほどに御く、りあけて、なに色にか色ある御ぞども、ゆたちより多くこほれいでて侍りし御容体などよ。御顔の色、月影にはえて、いと白う見えさせたまひしに、鬢ぐきの掲焉にめでたくこそまことにおはしまししか。やがて見つき／＼におほんともにもまりて、御ぬかつかせ給ひしも見奉り侍りき。いとかなしく

○またれ給ひて 遅刻されて。

○香染 赤黒くて黄はめる色。

○薄色 薄紫色。

○あはひ 取合はせ

○水精の装束したる 水晶で飾れる物を。

○一生精進 一生佛道に専一なる事。

○花 縹色。薄き藍色。

○かへりて 雪がか

かつて色のかはりて

○もてはやされ 雪

の爲一層映え。

○いさよく 甚だ美

しく。

○もぎきて 非難し

て。

○勇悍にあしき人

氣強く優美でない人

あはれにこそ侍りしか。御ともに童ひとりぞさぶらふめりし。

又殿上の逍遙侍りし時さらなり、こと人は皆心々に狩装束めでたうせられたりけるに、この殿はいたうまたれ給ひて、白き御ぞどもに、香染の御狩衣薄色の御指貫はなやかならぬあはひにて、さしいで給ひけるこそ、中々に心をつくしたる人よりは、いみじうおはしましけれ。常の御ことなれば、法華經御口につぶやきて、紫檀の御すゝの水精の装束したる、ひきかくしてもち給ひける御用意などの、優にこそおはしましけれ。おほかた一生精進はじめ給へる、まづ有り難き事ぞかし。なほくおなじことのやうに侍れど、いみじと見給へきおきつる事は、申さまほしくて。

この殿は御容のありがたく末の世にもさる人やいでおはしまし難かるらむとまでこそ。雪のいみじうふりたりし日、一條雅信の左大臣殿にまゐらせたまひて、御まへの梅の木に雪のいたうつもりたるを折りて、うちふらせ給へりしかば、御うへにはらくとか、りたりしを、御直衣の裏の花なりけるが、かへりていとまだらになりて侍りしに、もてはやされさせたまへりし御かたちこそ、いとめでたくおはしまししか。御兄の少將もいとよくおはしき。この弟殿のかくあまりにうるはしくおはししをもどきて、すこし勇悍ゆうかんにあしき人にてぞおはせし。

その義孝少將、桃園の源中納言保光卿の御女のはらにうませたまへりし君ぞかし、今の

○地下 五位以下の官人。

○職事 こゝでは藏人頭。

○地下など云々 地下人たてて懼り給ふべきにあらず。

○このきはに云々 此の際行成を藏人頭にさせざるは残念なり。

○前の頭の擧により 前藏人頭の推舉で

○殿上に 殿上人に

○こよひに 今夜藏人頭の任命あり。

○いづこも云々 何處かで出逢ひしにの意か。

侍徒大納言行成卿、世の手かきとの、しり給ふは。この殿の御をのこ子、只今の但馬守實經の君、尾張權守良經の君二人は、泰清の三位の女の腹なり。むかひばらのは少將行經の君、又女君は入道殿の御子、高松長家ばらの權中納言殿の北の方にて坐せし、ひめ君十五にてうせ給ひにきかし。又今の丹波守經頼の君の北の方にて坐す。又大姫君おはしますとか。この侍従大納言こそ、備後介とてまだ地下におはせし時、藏人頭になり給ふ、例いとめづらしきことよな。

その頃は源民部卿殿は職事にておはしますに、上達部になり給ひければ、一條院、「この次には又誰かなるべき。」とはせたまひければ、「行成などまかりなるべき人にさぶらふ。」と奏せさせたまひけるを、「地下のものはいかゞあるべからむ。」と宣はせければ、「いとやんごとなきものにさぶらふ。地下などおほしめし懼らせたまふまじ。ゆくするにもおほやけに、何事にもつかうまつらむに堪へたるものになむ。かやうなる人を御覽じわかぬは、世のためあしき事に侍り。善惡をわきまへおはしませばこそ人も心づかひはつかうまつれ。このきはになさせ給はざらむはいと口をしき事にこそさぶらはめ。」と申させ給ひければ、道理の事といひながら、なり給ひにしぞかし。おほかた昔は前の頭の擧によりて、後の頭はなることにて侍りしなり。されば殿上にわれなるべしなど さだのぶの民部卿中將にて坐せし折。思ひ給へりける人は、こよひとききて参り給へるに、いづこもととか

○從二位云々 行成が從二位の折俊賢より官位進みしが俊賢の上座に坐らない。
 ○かの殿云々 俊賢參内の日は行成は病み稱して出でず。
 ○下座になり 下座に坐り。
 ○此の御ぞう 行成即ち一條家の一族。
 ○しなのほど 身分の程合。
 ○さうなく道理の人 容易に頭たるべき道理ある人。
 ○からかるべき云々 心愛き事になるから今度は私にお譲り下さい。
 ○さびさもなく云 何の音沙汰もなく伊予が頭になり給ひければ。
 ○かくはかり云々 こんなに欺くとは思はなかつた。

にさしあひ給へりけるを「たれぞ。」ととひたまひければ、御名のりし給ひて 思ひか
 けず思して「何事に参り給へるぞ。」とあれば。「頭になしたびたれば参りて侍るなり。」
 とあるに、あさましとあきれてこそ動きもせで立ち給ひたりけれ。侍におもひかけぬこと
 なければ道理なりや。この源民部卿かく申しなし給へる事をおほしりて、從二位のを
 りかとよ、こえ申し給ひしかど、さらに上なる給はざりき。かの殿いで給ふ日は、わ
 れやまひ申し、又ともにいで給ふ日は、むかひ座などにぞるたまひし。さて民部卿正
 二位のをりこそは本のやうに下臈になり給ひしか。

大方此の御ぞうの頭争ひにかたきをつぎ給へば、これもいかおはすべからむ。みな人
 しろしめしたることなれど、朝成の中納言と、一條の攝政と、同じをりの殿上人にて、し
 なのほどこそ一條殿にひとしからね、身のざえ、世おほえ、やんごとなき人なりければ、
 頭になるべき次第たりたるに、又此の一條殿さうなく道理の人にておはしましけるを、
 この朝成の君申し給ひけるやう「殿はならせ給はずとも、人わろくおもひ申すべきにあら
 ず、後々にも御心にまかせさせ給へり。おのれは此の度まかりはづれなば、いみじうから
 かるべき事にてなむ侍るべきを、この度申させ給はで侍りなむや。」と申し給ひければ、「こ
 こにもさおもふことなり、さらばさり申さむ。」と宣ふを、いとうれしと思はれけるに、い
 かにおほしなりにける事にか、やがてとひごともなくなり給ひにければ、かくはかり給ふ

○御つかうまつり人 御奉公人。
 ○なめき事 無禮事
 ○本意なしなど云々 頭を我に取られて不満足には思はれんも。
 ○たかき所 高貴の人の許。
 ○かくと申させて 參上の旨を申し入れ
 ○はやう 元來。
 ○はたうと ぼたこ

○この殿近うおはし 行成は伊予の孫なれはなり。

べしやはと、いみじう心やましとおもひ申されける程に、御中よからぬことにてすぎたま
 ふ程に、この一條殿の御つかうまつり人とかやのために、なめき事し給ひたりけるを、「本
 意なしなどばかりは思ふとも、いかにことにふれてわれなどをば、かくなめけにもてなす
 ぞ。」と、むつがり給ふとききて、「あやまたぬよしも申さむ。」とて、参られたりけるに、さ
 やうの人はわれよりたかき所にまうでは、こなたへとなきかぎりは、うへにものほらで
 下に立てることにてなむありけるを、これは六七月のいとあつく、たへがたきころ、かく
 と申させて、今やくと中門に立ちて待つほどに、西日もさしかりて、あつきたへがた
 しとはおろかなり、こゝちもそこなはれぬべきに、はやうこの殿は我をあぶり殺さむと、
 おほすにこそありけれ。やくなくも参りにけるかなとおもふに、すべて悪心おこるなどは
 おろかなり。よるになる程にさてあるべきならねば、笏をおさへてたちければ、はたうと
 折れけるは、いかばかりの心をおこされにけるにか。

さて家に歸りて、「このぞうながくたむ。もしをのこ子も女子もありとも、はかしくし
 くてはあらせじ。あはれといふ人もあらば、それをも怨みむ。」などちかひて、うせたまひ
 なければ、代々の御悪靈とこそはなりたまひたれ。

さればましてこの殿近うおはしませば、いとおそろし。殿の御夢に、南殿の御うしろ必
 ず人の参るに通る所よな。そこに人のたちたるを、たれぞと見れば、かほは戸のかみに隠

○なにかまゐりたまふ是非も参内する勿れ。
○まもりのこはく守護神の力強く。

○二つものものたまはで、二言ともいはず。

○歌論議 歌の可否に就き論議する事。
○難波津云々 下句は「今を春べと咲くやこの花。」古今集序文中にあり。

れたれば、よく見えす。あやしうて、「たぞく。」と、あまたたびとはれて、「朝成に侍り。」といらふるに、夢のうちにも、いと恐ろしけれど、念じて、「などかくてはたち給ひたる。」ととひ給ひければ、「頭辨行成のまるらるゝをまち侍るなり。」といふと見たまひておどろきて、今日は公事ある日なればとくまるるらむ、不便ふびんなるわざかなとて、「夢に見え給へる事あるを、けふは御病申しなどもして、物忌かたくして、なにかまゐりたまふ、こまかにはみづから。」と書きて、いそぎ奉り給へど、ちがひていととくまゐり給ひにけり。まもりのこはくやおはしけむ、例のやうにはあらで、北の陣より藤壺後涼殿のはざまより通りて、殿上みまにまゐり給へるに、「こはいかに、御消息奉りつるは、御覽ぜざりつるか。かかる夢をなむ見侍りつるは。とくいさせ給ひね。」と聞えさせ給ひければ、手をはたとうちて、いかにぞとこまかにも問ひ申させ給はず、また二つものものたまはで出でたまひにけり。さてぞ御祈りなどしたまひて、しばしは内へもまゐりたまはざりける。この物怪もののけの家は、三條より北、西の洞院よりは西なり。今に一條殿の御ぞうあからさまにも入らぬ處なり。
行成此の大納言殿よろづにと、のひ給へるを、和歌のかたや、すこしおくれたまへりけむ。殿上に歌論議といふ事いできて、その道の人々いかゞ問答すべきなど、歌の學問より外の事もなきに、この大納言殿は、物ものたまはざりければ、いかなる事ぞとて、なにがしの殿の、「難波津にさくやこの花冬ごもりいかに。」と聞えさせ給ひければ、とばかり物ものた

○こごめ 興ざめ
○すこしいたらぬ云云 些細なこごにも精神をこめて巧者に事をなす御性質で。
○いかなる事をがな 何か珍らしいものを差上ゆたい。
○こまつぶり 獨樂
○むらさ 村邊。濃淡の交れる染色。
○こめられ 手にせられずの意。
○沈 沉香。
○すぢをいぬ 象眼の如く金銀の筋をはめこみ。
○歌枕に云々 名所で有名な所々。
○から紙 唐紙。
○樂府 白樂天の詩を指す。
○眞 眞書。
○御筆ミヤめて 御筆勢をやはらかにし

まはで、いみじう思おぼしあんするさまにもてなして、「えしらす。」と答へさせ給へりけるに、人々笑ひて、ことさめ侍りにけり。
すこしいたらぬ事にも、御たましひの深くおはして、らうくしくしなし給ひける御根性にて、みかど後一條をさなくおはしまして、人々に遊びものまるらせよとおほせられければ、さまざまこがねしろがねなど心をつくして、いかなる事をがなと、風流をしいでもてまゐりあひたるに、この殿はこまつぶりにむらさ緒つけて奉り給へりければ、「怪しの物のさまや、こは何ぞ。」と問はせたまひければ、「しかくの物になむ。」と申す、「まはして御覽じおはしませ。興あるものに。」など申されければ、南殿に出でさせ給ひて、まはさせ給ふに、いとひろき殿のうちのこらすくるめきあるきければ、いみじう興けうぜさせ給ひて、これをのみ常に御覽じ遊ばせたまへば、こと物どもはこめられにけり。
又殿上人扇どもしてまるらするに、こと人々は骨にまきゑし、或はしろがね、こがね、沉、紫檀の骨になむ、すぢをいれ、ほりものをし、えもいはぬ紙どもに、人のなべてしらぬ歌や詩や、又六十餘國の歌枕に名あがりたる所々などをかきつゝ、人々参らするに、例のこの殿は、ほねの漆ばかりを、をかしけにぬりて、黄なるから紙のした繪ほのかにをかきしきほどなるに、おもての方には樂府がふをうるはしう眞しんにかき、裏には御筆とめて草くさうにめでたくかきて、奉り給へりければ、うち返し、みかど御覽じて、御手箱にいれさせ給

- 秀句 洒落。
- 此の賀陽院どの 頼通の邸。
- 明理 代明親王の孫、重光の子。
- かがし 彼がし。
- ないほらをたちて 左程でもないのに立腹して。
- 一雙 無能の一對
- 一の大納言にて 行成は大納言中の故參として。
- ふる受領 古國司
- たち給ひ 逃げ給ひ。
- たひまつり 奉り
- いひごみ 話の種
- 中ひま日はさめて 中一日おいて。
- 飯室 横川の別所寶満寺。

ひて、いみじき御實とおほしめしたりければ、こと扇どもは、たゞ御覽じ興するばかりにて、やみ侍りにけり。いづれもく帝王の御感侍るにますことやはあるべきよな。
 いみじき秀句のたまへる人なり。此の賀陽院どのにてくらべ馬ある日、つゞみは讃岐の前司明理の君ぞうちたまひし。一番にはなにがし、二番にはかがし、などいひしかど、その名こそ覚えね、勝つべきかたのつゞみをあしくうちさけて、まけになりければ、その隨身のやがて馬の上にのりながら、なばらをたちて、見かへるまゝ、「あなわさはひや。かばかりの事をだにしそなひたまふよ。かかれは明理行成と一雙にいはれたまひしかども、一の大納言にていとやんごとなくてさぶらはせ給ふに、くさりたる讃岐の前司ふる受領の、鼓うちそなひて、たち給ひたるぞかし。」と放言したいまつりたるを、大納言殿きかせたまひて、「明理の濫行に行成が醜名よぶべきにあらず。いとからい事なり。」とてわらはせ給ひければ、人々いみじうのたまはせたりと興じ奉りて、その頃のいひごとこそし侍りしか。

又一條攝政殿の御をのこ子、花山院の御時、帝の御をぢにて、義懐の中納言と聞えし、少將たちの御同じ腹よ。その御時はいみじうはなやぎ給ひしに、みかど御出家させ給ひてしかば、やがてわれもおくれ奉らじとて、花山寺まで尋ねまると、中ひと日はさめて法師になり給ひき。飯室といふところにいとたふとく行ひてぞかくれたまひにし。その中

- 文官 學問に暗き事。
- 惟成の辨 魚名の孫、雅材の子。
- 内劣りの外めでた 内では劣れど外に出ではめだれること。
- 冬の臨時の祭 十一月下四日の賀茂臨時祭。
- まるりおはさうじ たり 参りおはしたり。
- つたへて云々 以下の話を指す。
- あかく 明るい中に。
- 馬道 取外し得る板敷廊下。
- 朝餉のつば 清涼殿の朝餉の間の前の内庭。
- すち：ゆに せん 方なゆし。
- 下敷 袖の下に著て其の裾長し。
- あゆ 乗り終り。

納言文官にこそおはせしかど、御心だましひいとかしこく、有識におはして、花山院の御時の政は、たゞこの殿と惟成の辨として行ひ給へれば、いといみじかりしぞかし。

その帝をば、内劣りの外めでた。」とぞ世の人申しし。冬の臨時の祭の日の暮る、あしき事なり、辰の時に人々まるれと宣旨下させたまふを、さぞおほせらるとも、巳午の時にぞはじまらむなど、おもひ給へりけるに、舞人の君達、装束賜はりにまゐりおはさうじたりければ、みかどは御装束奉りて、たたせおはしたりけるに、この入道殿も舞人にておはしましければ、此のごろ語らせ給ふなるを、つたへてうけたまはるなり。あかく大路などわたるがよかるべきにやとおもふに、みかど馬をいみじう興せさせたまひければ、舞人の馬を後涼殿の北の馬道よりとほさせ給ひて、朝餉のつほにひきおろさせ給ひて、殿上どもをのせて御覽するをだに、あさまじう人々思ふに、はては乗らむとさへさせ給ふに、すべき方もなくてさぶらひあひ給へるほどに、さるべきにや侍りけむ、入道中納言さしいで給へりけるに、帝御おもていとあかくならせ給ひて、すちなけにおほしめしたり。中納言もいとあさまじう見奉り給へど、人々の見るに制し申さむも、中々に見ぐるしければ、もてはやし興じ申させ給ふ様にもてなしつ、みづから下襲のしりはさみて乗り給ひぬ。さばかりせばきつほにをりまはし、おもしろうあけたまへば、御氣色なほりて、あしき事にはあらぬことなりけりとおほしめして、いみじう興せさせたまひけるを、中納言あさま

○同じ御心に云々
 帝と同じ御心であつて乗馬等のよくない事を殊更面白がられる様には見えぬが誰も義懐の心中を察する人もあれはこそ斯く申し傳へたのだ。
 ○これならずこれのみならず。
 ○いたりありける人考へ深き人。
 ○よそ人にて 花山院御護位後は無縁の者なれば。
 ○おちる落ち著き。

しうも、あはれにも、おほさる、御けしきは、同じ御心によからぬ事をはやし申し給ふとは見えぬ。たれもさぞかしとは、見しり聞えさする人もありければこそは、かく申しつたへたれな。又みづからの乗り給ふまではあまりなりといふ人もありけり。
 これならず、ひたぶるに色にはいたくも見えぬ、たゞ御本性のけしからぬさまに見えさせたまへば、いと大事にぞ。されば源民部卿は、「冷泉院のくるひよりは、花山院のくるひこそすちなき物なれ。」と申し給ひければ、入道殿は、「いと不便なる事をも申さる、かな。」と仰せられながら、いとみじう笑はせ給ひけり。

この義懐の中納言の御出家、惟成の辨のす、めきこえられたりけるとぞ。いみじういたりありける人にて、「今更によそ人にて交らひ給はむほど、見ぐるしかりなむ。」と聞えさせければ、けにさもと、いとゞおほしてなり給ひにしを、もとよりおこしたまへる道心ならねば、いかゞと人もおもひ聞えしかど、おちる給へる御心の本性なれば懈怠なく行ひ給ひてうせ給ひにしぞかし。

その御子はたゞいまの飯室の尋圓僧都、又延圓阿闍梨、入道中將成房の君なり。この三人は備中守爲雅が女のはらなり。その中將の御女は、定經ぬしの御妻にてこそはおはすめれ。一條殿の御族はいかなる事にか、御命みじかくぞおはしますめる。

花山院御出家の本意あり。いみじう行はせ給ひ、修行せさせ給はぬ所なし。されば熊野

○千里濱 紀伊國。
 ○濱づら 濱邊。

○たびのそらの歌 後拾遺集野旅部。
 ○験くらべ 修験者が互に修法の功験の優劣を較べる事。
 ○護法つきたる法師 物怪等を調伏する法力のついた僧。
 ○つけつる僧 屏風に引きつけられた法師に護法をつけた僧。
 ○さる事 尤もな事。
 ○験もしなに云々 験も身分による事故立派な修験者でも院には比べられず。
 ○御親の院 冷泉院。
 ○町じり 町外れ。
 ○頭光に奉りて 阿彌陀かぶりにかぶり給ひて。

の道に千里濱といふ所にて、御心地そこなはせ給へれば、濱づらに石のあるを御枕にておほとのごもりたるに、いと近くあまの鹽やく煙のたちのほる心ほそき、けにいかにはおほされけむな。

たびのそら夜半の煙とのほりなばあまのもしほ火たくかやみむ

かかるほどに御験もいみじうつかせ給ひて、中堂にのほらせ給へる夜、験くらべしけるを試みむとおほしめして、御心のうちに、念じおはしましたければ、護法つきたる法師、おはします御屏風のつらにひきつけられて、つぶとうごきもせず、餘り久しくなれば、今はとてゆるさせ給ふをりぞ、つけつる僧どものがり、をどりいぬるを、はやう院の御護法のひきとるにこそありけれと、人々あはれに見奉る。それさる事に侍り。験もしなによる事なれば、いみじきおこなひ人なりとも、いかでかならずらひ申さむ。前生の戒力に、又國王の位をすて給へる出家の御功德、かぎりなき御事にこそおはしますらめ。ゆくすゑまでもさばかりにならせ給ひなむ御心には懈怠せさせ給ふべき事かはな。それにいとあやしくならせ給ひし御心あやまちも、たゞ御物怪のし奉りぬるにこそは侍るめりしか。

中にも冷泉院の、南の院におはしましたし時、焼亡ありし夜、御とぶらひにまるらせ給へりし有様こそ、ふしぎにさぶらひしか。御親の院は御車にて二條町じりのつじに立たせ給へり。この院は御馬にていたゞきに鏡いれたるかき、頭光に奉りて、「いづこにかおはしま

○かひなにいれて
脇に挟みて。

○つきくしう 似
合はしく。

○明順 高階成忠子

○庭火 神樂の時た
く篝火。

○事いさせ云々
喧嘩のあつた事。

○いみじき一のもの
隨一の従者。

○高帽 綽名。

○達磨 數珠の止め
玉。

す、いづこにかおはします。」と御てづから人毎に尋ね申させ給へば、そこくになむとき
かせ給ひて、おはしまし所へ近くおりさせ給ひぬ。御馬の鞭かひなにいれて、御車の前に
御袖うちあはせて、いみじうつきくしうるさせ給へりしは、さる事やは侍りしとよ。
それに又冷泉院の御車のうちより、高やかに神樂歌をうたはせ給ひしは、さまざま興あ
ることも見きくかなとおほえ候ひしに、明順のぬしの「庭火いと猛なりや。」と宣ひける
にこそ、萬人えたへす笑ひ給ひにけれ。

さてまた花山院の、ひととせ祭のかへさ御覽せし御ありさまは、誰も見奉りけむな。ま
への日事いさせ給へりしたびのことぞかし。さる事あらむ時、けふはなほ御ありきなど
なくともあるべきに、いみじき一のものども高帽の頼勢をはじめとして、御車のしりに多
くうちむれ参りし氣色ども、いへばおろかなり。なによりも御す、のいと興ありしなり。
ちひさき柑子をおほかたの玉に貫かせ給ひて、達磨には大柑子をしたる御す、いと長く、
御指貫に具していさせ給へりしは、さる見ものやはさぶらひしな。

人々紫野にて御車に目をつけ奉りたりしに、檢非違使まりて、きのふ事出したりし童
べとらふべしといふこと、いできにけるものか。このごろの權大納言殿まだその頃はわか
くおはしましし程ぞかし。人はしらせて「かうくの事さぶらふ。とくかへらせ給ひぬ。」
と申させ給へりしかば、そこらさぶらひつるものども、くもの子を風の吹きはらふ如くに

○御車ぞひの云々
御車副の者だけで車
を進めて他の見物車
の後の方から密かに
逃げ行かれた事は。

○檢非違使つき云々
檢非違使附屬の役
人や何かに手痛く責
められ給ひて。

○くたさせ 隔させ
で其の名をおさす意

○こ、ろみにの歌
詞花集雜部。

○この御ありさま
太上天皇の御身分。

○たかな 笏。

○よの中の歌 詞
花集雜部。

○年へつるの歌 同
集同部。

○御集 花山院御集

○檜はだふきはす
る事 檜皮葺にして
葺きつづける事。

○別々にて云々 屋
根が別々であるから
其の間に樋をかけた

逃げぬれば、たゞ御車ぞひのかぎりにてやらせて、物見車のうしろの方よりおはしましし
ころ、さすがにいとほしくかたじけなくおほえおはしまししか。さて檢非違使つきや、い
といみじうからう責められ給ひて、太上天皇の御名はながくたさせ給ひにき。かかれは
こそ民部卿殿の御いひごととはげにとおほゆれ。
さすがに遊ばしたる和歌は、いづれも人の口にのらぬなく、優にこそうけたまはれな。
こ、ろみにほかの月をも見てしがな我が宿がらのあはれなるかと
などはこの御ありさまに思召しよりける事とおほえ侍らず、心ぐるしうこそさぶらへ。
さてまた冷泉院にたかな奉らせ給へるをりのは。
せの中にふるかひもなき竹の子は我がへむ年をたてまつるなり
御かへし。

年へつる竹のよはひはかへしてもこの世を長くなさむとぞ思ふ
かたじけなくおほせられたりと、御集に侍るこそあはれにさぶらへ。まことにさる御心に
も、いはひ申さむと思しめしけむ悲しさよ。

此の花山院は風流者にさへおはしましけるこそ。御所つくらせたまへりしさまなどよ。
寢殿對わた殿などは造りあひ、檜はだふきはする事も、この院のしいでさせ給へる
なり。昔は別々にて、あはひに樋かけてぞ侍りし。内裏は今にさてこそは侍るめれ。

○御車やどり 輿や車を納れおく建物。
 ○さながら 其の儘
 ○れうま 料ま。爲に。

○けうらま 立派さ
 ○海賦 大波や藻貝等海邊の様ある織物又は蒔繪。
 ○まかせ 蒔繪をせられ。
 ○くちおかれ 物のへり又はふちを金銀等で飾られ。
 ○もこのやう 幹の有様。

御車やどりには、いたじきを奥は高く、はしはさがりて、大きな妻戸をせさせたまへるゆゑは、御車の装束を、さながら立てさせたまひて、おのづからとみの事のをりに、とりあへず戸おしひらかば、からくと、人の手ふれぬさきに、さしいだされむがれうと面白く思召したる事ぞかし。

御調度どもなどのけうらまこそ、えもいはず侍りけれ。六の宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給へき。海賦に蓬萊山手長足長など、こがねしてまかせ給へりしこそ、かばかりの箱の、うるしつき蒔繪のさま、くちおかれたりしやうなどのいとめでたかりしなり。

又木だちつくらせ給ひしをりは、櫻の花は優なるに、枝さしのこはくしくて、もとのやうなども、にくし。梢ばかりを見るなむをかしきとて、中門より外にうゑさせ給へる、なによりもいみじくおほしよりたりと、人は感じ申しき。又撫子の種を築地のうへにまかせ給へりければ、おもひかけず四方に色々に唐錦をひきかけたるやうに、咲きたりしなどを見給へしは、いかにめでたく侍りしかは。

入道殿のくらべ馬せさせ給ひし日は、迎へ申させ給ひけるに、わたりおはします日御装はさらなり、おろかなるべきにもあらねど、それにつけても、まことに御車の様こそ、又世にたぐひなくさぶらひしか。御くつにいたるまで、只人の見ものになるばかりこそ。

後にはもてあるくと承りしか。

あて御繪あそばしたりし、興あり。さは、はしり車の輪には、薄墨にぬらせ給ひて、大ききのほどやなど、しるしには墨をにほはせ給へりし、けにかくこそかくべかりけれ。あまりにはしる車は、いつかは黒さのほどやは見え侍る。又たかなのかはを、をこのおよびごとにいれて、めかかうして、ちごをおどせば、顔あかめてゆ、しうおぢたるかた、又徳人、たよりなしの家のうちの作法などかかせたまへりしが、いづれもくさぞありけむとのみ、あさましうこそさぶらひしか。この中に御覽じたる人もやおはしますらむ。

一 太政大臣兼通

このおとゞ、これ九條殿の二郎君、堀河の關白と聞えさせき。關白したまふこと六年。

安和二年正月七日宰相にならせ給ふ。閏五月二十一日宮内卿とこそは申ししか。天祿二年閏二月二十九日中納言にならせ給ひて、大納言をばへで、十一月二十七日内大臣にならせ給ふ。いとめでたかりしことなり。弟の東三條殿の中納言におはしまししに、まだこの殿は宰相にて、いとからきことにおほしたりしに、かくならせ給ひし、めでたかりし事なりかし。

天延二年正月七日從二位せさせ給ふ。二月二十八日に太政大臣にならせ給ふ。やが

○もてあるく 人々が其の沓を持ち歩いて賞める。
 ○あて御繪 戲畫。
 ○さは それは。
 ○大ききの云々 輪の大ききの印には墨をほかし給ひしは。
 ○および、指。
 ○めかかうして 赤目をして。
 ○徳人 富人。
 ○さぞありけむ 眞に通りて。

○輦車ゆるさせ給ひて、人力で輦く車に乗りて参内するを許されて。

○ひまなくて、缺員なくて。

○それかやう云々、斯く關白に早くなる爲に大將にはならなかつたのである。皆様もたゞ左様に思召せ。

○御母の事なき云々、御母の事を申さぬは伊尹の母即ち盛子と同じであるからたゞ、まもり、守札。

○すさまじがり、面白からず思ひ。

て正二位させ給ひ、輦車ゆるさせ給ひて、三月二十六日關白にならせ給ひにしごかし。宰相にならせ給ひし年より六年といふに、ならせ給ひにき。

天延三年正月七日一位させ給ひてき。

貞元二年十一月八日うせさせたまひき。御年五十三。同じ二十日贈正一位の宣旨あり。後の御いみな忠義公と申しき。この殿かくめでたく、坐すほどよりは、ひまなくて大將にえなり給はざりしぞくちをしかりしや。それかやうならむ爲にこそあれ、さてもありぬべき事なり、たゞ思召せかしな。御母の事なきは一條殿のおなじにや。

圓融院の御母后は安子このおとゞのいもうとにおはします。この后村上の御時康保元年四月二十九日にうせ給ひにしごかし。この後のいまだおはしましたし時に、このおとゞいかゞおほしけむ、關白は次第のまゝにせさせ給へと、かかせ奉つりて、とり給ひたりける御ふみを、まもりのやうにくびにかけて、年頃もちたりけり。御弟の東三條殿は、冷泉院の御時の藏人頭にて、此の殿よりもさきに三位して、中納言にも成りたまひしに、この殿は、はつかに宰相ばかりにておはせしかば、世の中すさまじがりて、内にもつねに参りたまはねば、みかどもうとく思召したり。

そのときに、兄の伊尹一條攝政、天祿三年十月にうせたまひぬるに、この御ふみを内にもて参りたまひて、御覽せさせむとおほすほどに、うへ鬼の間におはします程なりけ

○御をぢの中に云々、此の殿は同じ御伯父の中でも疎々しく思ひ給ふ人なれば帝は一寸兼通を見給ひて内へ入られた。
○一かさね、一枚。
○故宮、安子。
○さてかくいで云々、兼通が關白となりて参内する様になつたといふ事である。

○いみじうおほしめし云々、兼通のこの考へは賢き事である。○こゝに出でての歌、兼家の非凡に見ゆるは藤氏の祖天兒屋根命の血統を引ける故なりと詞に出しても心中にも左様に思はる。

り。をりよしとおほしめすに、御をぢの中に疎くおはします人なれば、うち御覽じて入らせ給ひき。さしよりに、「奏すべき事。」と申し給へば、たちかへらせ給へるに、此のふみを引き出でてまるらせ給へれば、取りて御覽すれば、紫のうすやう一かさねに故宮の御手にて、「關白をば次第のまゝにせさせ給へ、ゆめくたがへさせ給ふな。」とかがせ給へる、御覽するまゝに、いとあはれけにおほしめしたる御けしきにて、「故宮の御手よ。」など仰せられ、御文をばとりいらせたまひにけり。こそは。さてかくいで給へるとこそはきこえ侍りしか。いと心かしこくおほしける事にて、さるべき御宿世とは申しながら、圓融院孝養の心深くおはしまして、母宮の御遺言たがへじとて、なし奉らせたまへりける、いとあはれなる事なり。

その時頼忠のおとゞ右大臣にておはしましたしかば、道理のまゝならば、この大臣のし給ふべきにてありしに、このふみにてかくありけるとこそは聞え侍りしか。東三條殿もこの堀河殿よりは上臈にておはしましたしかば、いみじうおほしめしよりたる事ぞかし。(御は、の事のなきは一條殿と同じきにや。)

この殿の御袴著に、貞信公の御もとにまゐりたまへる、贈り物にそへさせ給ふとて、貫之ぬしにめしたりしかば、奉りたりし歌、
ことに出でて心のうちにしらる、は神のすぢなはひけるなりけり

○堀河院 二條南堀河の南北二町。
○臨時客 春の始め攝關の家で大臣以下公卿を招き饗應する事。
○うちかなで 舞を舞ひ。
○後夜 夜の二時頃より四時頃まで。
○卯酒 卯の刻即ち夜明に飲む酒。
○もてまゐり云々 其の時に間に合はぬ故。
○業遠 高階敏忠子
○物か 物かな。
○事しえたりし云々 手柄をした心地は嬉しかった。雉を救つた我は善行をしたと思つた。業遠の詞
○これはむけの云々 殺生は非常に無益の事である。

ひきいで物に琴をせさせ給へるにや。御かたちいと清けに、きらやかになどぞおはしまし。堀河院にすませたまひしころ、臨時客の日、寢殿のすみの紅梅さかりにきたるを、事はてて、内へ参らせ給ふまゝに、花の下に立ちよらせ給ひ、一枝おしをりて、御かざしにさして、けしきばかりうちかなでさせ給へりし日などは、いとこそめでたく見えさせ給ひしか。

この殿には、後夜にめす卯酒の御さかなには、たゞ今殺したる雉をぞまゐらせけるに、もてまゐりあふべきならねば、よひよりぞまうけておかれけるを、業遠のぬしのまだ六位にてはじめてまゐらるゝ夜、御查櫃のもとにゐられたりければ、櫃のうちに、物のほとほととしけるがあやしさに、くらきまぎれなれば、やをらほそめにあけて、見給ひければ、雉の雄鳥はかゝまりをる物か、人のいふ事はまことなりけりと、あさましくて、人の寢にけるをりに、やをらとりいでて、懐にさし入れて、冷泉院の山に放ちたりしかば、ほろほろととびてこそいにしか。「事しえたりしこ、ちは、いみじかりしものかな。それにぞ我は幸人なりけりとはおほえしか。」となむ語られける。殺生は殿ばらのみなせさせたまふ事なれど、これはむけのむやく事なり。

此の殿の御むすめ、式部卿の宮元平のみこの御むすめのはらの姫君、圓融院の御時の女御にまゐり給ひて、
天延元年七月十一日 后に立たせたまひて、
堀川の中宮と申しき。

○給はざりければ 給はざりければの意
○稻荷の坂 山城國稻荷神社の坂。
○御むしおしやりて 一本御後おしやりて御後から押す意。
○あふがれ 扇であふがれ。
○さりとも 兼通は御愛しなさらずとも
○惡靈の左大臣殿 顯光が小一條院の女御の事に關し道長を恨み惡靈となつたこの事で十訓抄に見ゆ
○廣幡 廣幡中納言 庶明。

御子うまれたまはすなりにき。天延六年六月二日うせ給ひにき。をさなくおはしまししほどは、いかなりけるにか、例の御親のやうに、つねに見奉りなどもし給はざりければ、御心いとかしこく、又御うしろ見などこそは、申しす、めけめ。物まうでのりをいみじうせさせ給ひけるとか。稻荷の坂にても此の女ども見奉りけり。いとくるしけにて御むしおしやりて、あふがれさせ給ひける御姿つき、さしぬきのこしぎはなども、さはいへど、多くの人よりは氣だかく、なべてならずぞおはしましける。かやうにつとめさせたまふつもりにや、やう／＼おとなび給ふまゝに、これよりおとななる御女もおはしまさねば、さりとも后にたて奉らであるべきならねば、かく参らせ奉らせ給ひて、いとやんごとなくてさぶらはせ給ひしぞかし。今一所のひめ君、内侍のかみにならせ給へりし、今におはします。六條左大臣殿の御子の讚岐守のうへにて坐すとかや。
又太郎君、
は顯光と聞えし、堀河の左大臣と申す。長徳二年丙申七月二十一日右大臣にならせ給ひにき。御年七十八にてやうせおはしましけむ。うせたまひて、この五年ばかりにやなりぬらむ、惡靈の左大臣殿と申しつたへたる、いと心うき御名ぞかし。その故どもみな侍るべし。
この北の方には村上の先帝の女五の宮、廣幡の御息所の御腹ぞかし、その御はらに男一人女二人ぞおはしましし。男君は重家の少將とて、心ばへ有識に世おほえおもくてまじら

ひたまひしほどに、世にひさしくおはしますまじかりければにや、出家してうせたまひにき。女君一所は、一條院の御時の承香殿しょうかうでんの女御とおはせしかど、院うせ給ひてのち、すゑには爲平の式部卿の宮の御子源宰相よりのさだ頼定の君の北の方にて、あまたの君達おはすめり。そのほどの御事どもはみな人しろしめしたらむ。その宰相うせ給ひにしかば、尼になりておはします。

いま一所は、教明今の小一條院のまだ式部卿の宮と申ししをり、塔にとり奉らせ給へりしほどに、東宮にたたせ給へりしを、うれしき事におほししかど、院にならせたまひし後は、高松殿の御匣殿にわたらせ給ひて、御心ばかりは、通はせ給ひながら、かよはせ給ふ事たえしかば、女御も父と顯光も、いみじうおほしなけし程に、御病にもなりにけるにや、すぎにし未の年の二月ばかりにうせ給ひにき。

てこそしありき給ふなれ。院の女御には常につきわづらはせ給ふなり。そのはらに宮たちあまた所おはす。

又堀河の關白殿朝光御次郎兵部卿有明の親王の御女の腹の君、中宮の御一腹にはおはせず。これは又閑院の左大將朝光と申して父大臣のおはしまし折顯光、兄の大臣宰相にておはしける程は、この殿は中納言にてぞおはしける、ひきこされ給ひけるぞめでたき。すべていみじかりし御世おほえにて、容も心もすぐれ給へり。御まじらひの程など、ことの外にきら

- 高松殿の御匣殿 道長の女改子。
- いみじきものになりて云々 惡靈あくまとなりて父顯光が引連れて方々へ崇つて歩く
- 院の女御 高杉殿の御匣殿。
- 有明の親王の御女 能子。
- 中宮 惶子。
- 御まじらひ 御交際。
- きらめき給ひき 華美であられた。

- 胡籬 矢を入れて背に負ふ具。
- 水晶の管 矢筈を水晶で作つたもの。
- 世の中衰へ 威權の衰へ。

めき給ひき。胡籬こさきの水晶すいしょうの管も、此の殿の思ひ寄りしいで給へるなり。なにことの行幸にぞや、つかうまつり給へりしに、この胡籬おひ給へりしは、朝日の光にかやきて、さるめでたき事やは侍りし。今は目なれにたれば、珍らしからず人も思ひて侍るぞ。何事につけても、はなやかにもていでさせ給へりし殿の、父とのうせ給ひにしかば、世の中衰へなどして、御病も重くて、大將も辭し給ひてしこそくちをしかりしか。さてたゞ按察大納言とぞ聞えさせし。和歌などこそいとかしこく遊ばししか。四十五にてうせ給ひにき。

北の方には貞觀殿登子の内侍のかみの御腹の、重明の式部卿の御中姫君ぞおはせしかし。その御腹に男君三人、女君姫子のかややく如くなるおはせし。花山院の御時にまるらせ給ひて、一月ばかりいみじう時めかせ給ひしを、いかにしてけることにかありけむ、まうのほり給ふ事もとままり、帝もわたらせ給ふことたえて、御文だに見えきこえずなりにしかば、二月さぶらひわびてこそは出でさせ給ひにしか。又さあさましかりしことやはありし。御容などの世のつねならずをかしけにて、思し歎く、見奉りたまふ父の大將、御せうとの君たち、いかゞはおほしけむ。

その御一つ腹の男君三所、太郎君は今の藤中納言朝經の卿におはすめり。人に重くおもはれたまふめり。二郎三郎君は右馬頭少將登朝などにて、みな出家しつ、うせ給ひにき。この右馬の入道の御男子なり、今の右京の大夫。

○さりとて 離縁して
 ○こゝなる事云々
 これいふ事もなかつた延光の未亡人に朝光が通つたのは其の利益を目的にしたこの噂であつた。

○元の上 朝光の先妻。
 ○不合 和合しない事。

○今北の方 新妻。

○さうぞきて 装束させて。

○おほらかに 澤山中に薬物を澤山入れ

○伏籠 衣物を暖める竹籠。

○裏 平生。

○すびつ 爐。

○ひさげ 提子。

○まるり 飲み。

○熨斗 熨斗。

○練色 薄黄色。

この閑院の大將殿は、後にはこの君達の母をばさりとて、枇杷の大納言延光の卿のうせ給ひにしのち、そのうへの年老いて、容などわるくおはしけるにや、ことなる事きこえ給はざりしをぞすみ給ひし。徳につき給へるとぞ世の人申しし。さて世おほえも劣り給ひにしぞかし。

元の上、御容もいと美しく、人の程もやんごとなくおはしまししかど、ふがふ不合に坐すとて、かかる今北の方をまうけて、さり給ひにしぞかし。この今の上の御もとは、女房三十人ばかり、裳唐衣きせて、えもいはずさうぞきて、居すゑならべて、しつらひありさまより始めて、めでたくしたてて、かしづき聞ゆる事限りなし。大將ありきて歸り給ふをりは、冬は火おほらかに埋みて、たきもの大きにつくりて、ふせこ伏籠うちおきて、裏うらに著給ふ御ぞをば暖かにてぞきせ奉り給ふ。すびつにしろがねのひさけ二十ばかりをすゑて、さまざまの薬をおき並べてまゐり給ふ。疊たたのうはむしろに綿いれてぞしかせ奉らせ給ふ。寐給ふ時には大きな熨斗のしもちたる女房三四人ばかりいできて、かのおほとのごもるむしろをば、暖かにのしなでてぞねさせ奉り給ふ、あまりなる御用意なりしかは。

大方のしつらひありさま、女房の装束などはめでたけれども、この北の方は練色の衣きぬの、綿あつきふたつばかりに、白袴うちきてぞ坐おほしける。年四十餘りばかりなる人

○花がた あはた。

の、大將には親ばかりにぞ坐おほしける。色黒くて、ひたひに花がたうちつきて、髪かみ、けたるにぞ坐しける。御容の程を思ひしりて、さまにあひたる装束と思おほしけるにや。まことにその御装束こそ容にあひてみえけれ。さばかりの人の北の方と申すべくも見えざりけれど、もとの北の方重明の式部卿の宮の姫宮、貞観殿の内侍のかみの御腹のやんごとなき人と申しながら、かたちありさまめでたく坐おほしけるに、かかる人に思おほしうつりて、去り奉らせ給ひけむ程おもひ侍るに、たゞ徳のありて、かくもてかしづききこゆるに思ひのおはしけるにや。

やんごとなき人だにこそかくは坐おほしけれ。あはれ翁らが心にだにいみじき寶をふらして扱はむといふ人ありとも、年頃の女共をうちすててまからむは、いとほしかりぬべきに、さばかりにやんごとなくおはします人は、不合おほに坐すといふとも、翁らがやどりのやうに侍らむやは。この今北の方の事により、世の人にも軽く思はれ、世おほえも劣り給ふらし、いとくちをしき事に侍りや。さばかりの事思しわかぬやう侍るべしや。怪しの翁らが心におとらせ給はむやはと、思ひ給ふれど、口惜しく思ひ給ふる事なりしかば申すぞやとて、ほゝゑむけしき恥かしけなり。さばかりの人だにかくおはしましければ、それより次々の人のいかなるふるまひもせむ、ことわりなりや。翁らがこゝらの年ごろ怪しの宿りに、わりなき世を念じすごして侍りつるこそ、ありが

○翁らがやどり 達の妻。

○わりなき世を云々 面白からぬ世をこらへて。

○心よくうちすみ云
云 著者の批評で其
の時の翁の眞面目の
顔の様子はをかしか
つた。

○そのけに 其のた
めに。

○それ又いさ怪しき
御心なりや 先妻の
許へ行かない朝光の
御心も怪しからぬ。

○さは されざり

○御末か許りか 御
子孫は斯程少なきか
な。

○天道 天帝。

○長歌 拾遺集雑下
にあり。

○いなぶねの 古今
集東歌「最上川上れ
は下るいなぶねのい
なにはあらずこの月
はかり。」

○うせ給はむとて
薨去の際に。

○年ごろのもの 永
年御奉公の者。

○劣り優りのほかに
優劣のために。

○くるしきもの 見
苦しい物。

○かかれは 兄の危
篤をも見舞はないか
ら。

○かぎりのさま云々
危篤の人即ち兼通
が。

○御前催せ 御前驅
に支度するやう催促
せよ。

たくおほえ侍りつれ。心よくうちすみたりし顔けしきこそいとをかしかりしか。
さて時々もとの上の御もとへおはしまさむとて、牛飼車副などに、「そなたへ車をや
れ。」と仰せられけれど、さらにきかざりけり。此の今北の方、侍、雑色、隨身、車副
などに、装束ものとする事はさるものにて日毎に酒を出してのませ遊ばせ、いみじ
き志どもをしける、そのけにや斯くしけるを、それ又いと怪しき御心なりや。雑色、
牛飼の心にまかせて、それによりてえおはしまさざりけむよ、さる事やは侍るな。さ
は此の大將は御心ばへもかたちも、人にすぐれてたくおほせし人なり

又堀河殿の御子大藏卿正光ときこえしが御むすめ、源帥の御中の君の御はらぞかし、今
の皇后宮の御匣殿とてさぶらひ給ふ。只今の左兵衛督の北の方、又上野の前司兼定の君ぞ
かし、まことや北面の中納言とかや世の人の申しし時光の卿、それ又右京の大夫にておは
せし。この大夫の御子ぞかし、今の仁和寺の別當律師尋清の君。堀河殿の御末か許りか。
この大臣すべて非常の御心ぞおはしましし。かばかり末たえず榮えおはしましける東三
條殿を、故なきことにより、御つかさ位をとり奉りたまへりし、いかに悪事なりしかは。
天道もやすからず思召しけむを、そのをりの御門圓融院にぞおはしましし、東三條殿かか
る歎きのよしを、長歌によりて、奉り給へりしかば、帝の御かへり、「いなぶねの。」とこそ
おほせられければ、しばしばかりを思しなげきしぞかし。

堀河殿はては、われうせ給はむとて、關白をば御いとこの頼忠の大臣に譲り給ひし
こそ、世の人いみじきひが事とそしり申ししか。此のむかひを侍のいふやう、東三
條殿のつかさとり奉らせたまひし程の事は、ことわりとこそ承りしか。

おのれがおほお親は、かの殿の年頃のものにて侍りしかば、細かにうけたまはりし
は。この殿達の兄おと、の御中、年ごろのつかさ位の劣り優りの程に、御中あしくて
すぎさせ給ひし間に、堀河殿の御病重くならせ給ひて、今は限りにておはしましし程
に、東の方に、さきおふ音のすれば、御まへにさぶらふ人たち、誰ぞなどいふ程に、
東三條の大將殿まるらせ給ふと、人の申しければ、殿きかせ給ひて、年頃ながらひよ
からずして過ぎつるに、今は限りになりたりと聞きて、とぶらひに坐するにこそはと
て、おまへなるくるしきものとりやり、おほとこの籠りたる所ひきつくるひなどして、
入れ奉らむとて待ち給ふに、はやくすぎて内へ参らせ給ひぬと、人の申すに、いと淺
ましく心うくて、御前にさぶらふ人々もをこがましと思ふらむ、坐したらば、關白な
ど譲る事も申さむとこそ思ひつるに、かかればこそ年ごろ中らひよからずすぎつれ、
あさましくやすからぬ事なりとて、かぎりのさまにてふし給へる人の、「かき起せ。」と
宣へば、人々あやしとおもふ程に、「車に装束せよ、御前催せ。」と仰せらるれば、物の
つかせ給へるか、うつし心もなく仰せらる、かと、あやしく見奉る程に、御かうぶ

○瀧口の陣 清涼殿の北、黒戸の東に在りて瀧口の侍の番所

○昆明池の障子 清涼殿の弘廂に立てた

衝立障子。表に支那

長安城の西の昆明池

を畫き裏に嵯峨の小鷹狩を畫く。

○日の御座 清涼殿内主上の畫坐す所。

○つゞらかに 圓くして。

○ついで かしこまり。

○いぢにて えこぎで。

○御妹の宮 安子。

りめしよせて、裝束などせさせ給ひて、内へまゐらせ給ひて、陣のうちは君達にかゝりて、瀧口の陣の方より御前へまゐらせ給ひて、昆明池の障子のもとにさしいでさせ給へるに、日の御座に、東三條の大將御前に候ひたまふ程なりけり。

この大將殿は、堀河殿すでにうせ給ひぬときかせ給ひて、内に關白のこと申さむと思ひ給ひて、この殿の門をとほりて参りて申し奉る程に、堀河殿の目をつゞらかにさしいで給へるに、帝も大將もいと淺ましく思召す。大將はうち見るまゝに起ちて、鬼の間の方に坐しぬ。關白殿御まへについで給ひて、御氣色いとあしく、「最後の除目おこなひにまゐり給へるなり。」とて、藏人頭めして、關白には頼忠の大臣、東三條殿の大將をとりて、小一條の濟時の中納言を、大將になし聞ゆる宣旨くだして、東三條殿をば治部卿になし聞えて、いでさせ給ひて、程なくうせ給ひしぞかし。心いぢにておはせし殿にて、さばかり限りにおはせしに、ねたさに内にまゐりて申させ給ひしほど、こと人はすべうもなかりしことぞかし。

されば東三條殿つかさとり給ふ事も、ひたぶるに堀河殿の非常の御心にも侍らす。事のゆゑはかくなり。關白は次第のまゝといふ御文おほしめしより、御妹の宮に申してとり給へるも、最後におほすことどもして、うせ給へる程も、思ひ侍るに心づよくかしこくおはしましける殿なり。

一 太政大臣爲光

このおとゞは、これ九條殿の御九郎君、大臣の位にて七年、法住寺の大臣に聞えさす。

正暦二年六月十六日にうせ給ひにき、御年五十一。後の御いみな恆徳公と申しき。御

男子七人、女君五人おはしき。女二所は佐理の兵部卿の御妹の腹、今三所は一條攝政の御

女の腹におはします。

男君たちの御はら皆あかれくにおはしましき。女君一所は、花山院の御時の女御、い

みじう時におはせし程に、御子はらませ給ひて、八つきにて、うせ給ひき。今一所も

入道中納言の北の方にてうせ給ひにき。男君太郎は左衛門督誠信と聞えし。三十八に

て、悪心起してうせ給ひにありさまは、いとあさましかりし事ぞかし。人にこえら

れからいめ見る事は、さのみこそおはしあるわざなるを。さるべきにこそはありけめ。同

じ宰相におはすれど、弟殿には人がら世おほえの劣り給へればにや、中納言あくきはに、

われもならなむとおほして、わざと對面し給ひて、「此のたびの中納言のぞみ申し給ふな。

こゝに申し侍るべきなり」とときこえ給ひければ、「いかでか殿の御さきにはまかりなり侍ら

む。ましてかく仰せられむには、あるべきことならず。」と申し給ひければ、御心のきて、

しかおほして、いみじう申し給ふに、及ばぬほどにやおはしけむ、入道殿この弟に、「そこ

○あかれく 別々
○人にこえられ云々 人に官位を越され
辛い目にあへば悪心の起るも無理ならぬ
之も宿縁であらう
○此のたびの中納言云々 今度缺員の中納言を汝望む勿れ我望むなり。
○御心のきて 御満足して。
○及ばぬほど云々 誠信は中納言たるべき身分ではなかつたのであらう。

○そこにさられば
其許が辭退すれば。
○かの左衛門督云々
誠信がなれないな
らは是非ない我をな
して戴きたい。
○はまれぬぞ 歎
かれたぞ。
○いひいりて いひ
つゞけて。
○いみじき上戸云々
此の一段黒川真頼
も錯簡せりといふ。
内大臣道隆の部の
人か。
○ものつき 嘔吐し
○弘高 巨勢氏。
○心にくき人 奥ゆ
かしい人。

には申されぬか。」と宣はせければ、「左衛門督の申さるればいかは。」としぶくけに申し
給ひけるに、「かの左衛門督はえならじ、又そこにさられば、ことこそはなるべかなれ。」
と宣はせければ、「かの左衛門督まかりなるまじくば、よしなし、なしたふべきなり。」と申
し給へば、「またかくあらむには、こと人はいかでか。」とてなり給ひにしを、いかにわれに
向ひて、あるまじきよしをいひて、はかりけるぞとおほすに、いと悪心おこして、除目
の朝より、手をつよく握りて、「われは齊信道長にはまれぬぞ。」といひいりて、物もつゆ
まるらず、うつぶしく給へるほどに、病づきて、七日といふにうせ給ひし、握りたまひ
たりけるおよびは、あまりつよくて、うへにこそとほりて出で給へりけれ。
いみじき上戸にてぞおはせし。故中關白殿のひととせの臨時客に、あまり酔ひて、御座
にるながら立ちもあへ給はで、ものつき給へるにこそ、高名の弘高がかきたる樂府の屏風
にかゝりて、そこなはれたなれ。この中納言になり給へるは、いと世おほえあり、よき人
にておはしき。

又權中將道信の君、いみじき和歌の上手にて、心にくき人といはれ給ひしほどに、うせ
給ひにき。又只今の左衛門督公信の卿、又法住寺の僧都の君、阿闍梨の君おはす。まこと
一條攝政殿の御女のはらの女君たち、三四五の御方おはします。三の御方は鷹司殿の上
とて、尼になりておはします。四の御方は入道殿の俗におはしまししをりの御子うみてう

○おきてさせ 處理
せさせ。
○御すそほそくぞ
御子孫振はず。

○宮はら 康子は醍
醐帝の御女なればな
り。
○三昧僧都 専心に
念佛誦經する僧都。
○大姫君 長女。
○おほえこことにて
君龍格別にて。

せたまひにき。五の君はいまの皇后宮にさぶらはせたまふ。この大臣の御ありさまかくな
り。

法住寺をぞいといかめしうおきてさせたまへる。攝政關白させたまはぬ人の御しわざ
にては、いと猛なりかし。このおとゞ、いとやんごとなくおはしまししかど、御するほそ
くぞ。

一 太政大臣公季

このおとゞ、たゞいまの閑院のおとゞにおはします。これ九條殿の十一郎君、御母、宮
ばらにおはします。御子の御女をぞ北の方にてはおはしましし。その御腹に、女君一所、
男君二所、女君は一條院の御時の弘徽殿の女御、今におはします。男一人は三昧僧都如源
と申しし、うせたまひにき。今一所の男君は、只今の右衛門督實成の卿にぞおはする。

此の殿の御子播磨守陳政の御むすめの腹に、女君二所、男一人おはします。大姫君は今
能信
の中宮の權大夫殿の北の方、今一所は源大納言俊賢卿、これ民部卿と聞ゆ、その御子のた
だ今の頭中將顯基の君の御北の方にてぞおはすめる。男君をば、御おほちの太政大臣殿、
わが御子にし奉り給ひて、公成とつけ奉らせ給へるなり。藏人頭にていとおほえこことにて
おはする君になむ。この太政大臣殿の御ありさまかくなり。帝后たたせ給はず。

○御裳著 女子成長して始めて裳を著る式。

○ゆきやらの歌 拾遺集夏部。

○人にまじりては云々 公忠にまじりては云々の歌が秀逸だに評判が高かつた。

○九條殿は云々 師輔が或女房にたのんで密かに通はれた。

○おまへのきたなきに 宮の御前の汚らはいから。

○殿にまかでさせ奉りて 康子を師輔の北の方になし奉りて
○まろはさらに云々 妾は全く世に生きられさうもない。たゞひ誠と思ひ給はずとも見給へ。
○男君 師輔。

このおほき大臣の御母うへは、延喜の御門の御女、四の宮と聞えさせき。延喜いみじく時めかし思ひ奉らせ給へりき。御裳著の屏風に公忠の辨、ゆきやらで山路くらしつほと、ぎす今ひとこゑの間かまほしさに

とよむはこの宮のなり。貫之などあまたよみて侍りしかども、人にとりてはすぐれの、しられ給ひし歌よ。二代のみかどの、^{朱雀村上}「ひとつ御はらの、」妹におはします。

さてうちずみしてかしづかれおはしまししを、九條殿は、女房語らひて、みそかに参らせ給へりしぞかし。世の人便なき事に申し、村上のすめらぎも安からぬ事におほしめしおはしましけれど、色に出でてとがめおほせられずなりにしも、この九條殿の御おほえの限りなきによりてなり。まだ人々うちさゝめき、^{村上}うへにもきこしめさぬほどに、雨のおどろおどろしくふり、かみなりひらめきし日、この宮うち^{康子}に坐すに、「殿上の人々四の宮の御方にまるれ。おそろしくおほしめすらむ。」とおほせ事あれば、たれもまるり給ふに、小野宮のおとゞぞかし。「まるらじ、おまへのきたなきに。」とつぶやき給へば、後にこそ御門おほしめしあはせせめ。さて殿にまかでさせ奉りて、思ひかしづき奉らせ給ふといへば、さらなりや。

さるほどに、この太政大臣を孕み奉りたまひて、いみじう物の心ほそくおほえさせ給ひければ、「まろはさらにあるまじきこゝちなむする、よし見給へよ。」と、男君に常にきこえ

○おくれ申すべきならず 我も共に死なう。

○ふたつこゝ人云々 後妻は娶らじ。

○よろひ 二つ。

○御忌日 母上の御忌日。

○しほたれ 歎きに沈み。

○けぢめにしるき事 親王と人臣の子との區別の明らかな事

させ給ひければ、「まことにさもおはしますものならば、かた時もおくれ申すべきならず、もし心にあらず、ながらへさぶらはば、出家必ずし侍りなむ。又ふたつこと人見るべきにも侍らず、あまがけりても御覽せよ。」と申させ給ひける。法師にならせ給はむことはあるまじきと思召しけむ、ちひさき御唐櫃一よろひに、片つ方は御烏帽子、いまかたつ方には、したうづを、ひと唐櫃づ、御てづからつづとぬひれさせ給ひけるを、殿はさもしらせ給はざりけり。さてつひにうせさせ給ひにしは。

さればこの太政大臣は、うまれさせ給へる日を、やがて御忌日にておはしますなり。かのぬひおかせ給ひし、御烏帽子御したうづ御覽するたびごとには、九條殿しほたれさせ給はぬをりなし。まことにその後はひとりすみにてぞやませたまひにし。

このうみおき奉らせたまへりし太政大臣をば、御姉の中宮さらなり、よのつねならぬ御族おもひにおはしませば、養ひ奉らせたまふ。内にのみおはしまして、帝もいみじううたきものにせさせ給へば、つねには御前にさぶらはせ給ひて、何事も宮たちの御同じやうにかしづきもてなし申させたまふに、御ものめす御臺のたけばかりをぞ、一寸おとさせたまひけるを、けぢめにしるき事にはせさせ給ひける。昔はみこたちだに、をさなくおはしますほどは、うちずみせさせ給ふ事なかりけるに、この若君のかくてさぶらはせ給へば、あるまじき事とそしり申せど、かくて生ひ立たせ給へれば、なべての殿上人などにならず

○なみ／＼にふるまはせ親王方と同一のふるまひをされる
 ○同じほごの云々
 公季は圓融院や當今等と同じ身分と思ふのであらうか。斯かる舉動はあらせたくない。
 ○うめかせ 歎息せられ。
 ○かなしがり 愛し
 ○弓場殿 贈弓等を御覽する所。
 ○御さきばかりまるらせ 警蹕のみさせ歩き給はず。
 ○いぬ 公成の重名は犬君。
 ○無量壽院 法成寺
 ○ひごみち 一筋に
 ○公成おほしめせ 公成を御心に掛けて下さい。
 ○中務のめのご後 朱雀院の御乳母か。
 ○四條 公季の家。
 ○くめ 御五十日の餅を資瀨の口に入れたち。立つたり坐つたり。
 ○おのづから云々 子供泣くのは當然で汝も同じ様だつた。

はせ給ふべきならねど、わかうおはしませば、おのづから御戯れなどのほどにも、なみなみにふるまはせ給ひしをりは、圓融院の御門、同じほどの男もと思ふにや、かからであらばや。」などぞうめかせ給ひける。
 公季
 かかるほどに、御年つもらせたまひて、又御うまごの頭中將公成の君をことの外にかなしがり給ひて、内にも御車のしりに乗せさせたまはぬかぎりは、まるらせたまはず。さるべきことのをりも、この君おそくまかりいで給へば、弓場殿に御さきばかりまるらせ給ひてぞまち立たせたまへれば、見奉りたまふ人、「などかくて立たせ給へる。」と申させたまへば、「いぬまち侍るなり。」とぞおほせられける。
 後朱雀
 無量壽院の金堂供養に、東宮の行啓ある御車にさぶらはせ給ひて、ひとみち、「公成おほしめせおほしめせ。」とおなじことを啓せさせたまひける。「あはれなるものから、をかしうなむありし。」とこそ宮おほせられけれ。しけきがめひのむすめの、中務のめのものも侍るが、まうできてかたり侍りしなり。
 公季
 頭中將顯基の君の御若君とかな、御五十日をば四條にわたし聞えて、太政大臣殿こそくくめさせ給ひけれ。御おほちの右衛門督ぞ抱ききこえ給へるに、この若君のなき給へば、「例はかくもむつがらぬに、いかなればかからむ。」と、右衛門督たちる慰め聞え給ひければ、「おのづからちごはさこそはあれ。汝もさざありし。」と太政大臣殿宣はせけるにこそ、

○古代に云々 公季は古風である。

○紐ききて 直衣の紐を解き寛ろけて。
 ○それはさてもあり それはそれでもよいが。
 ○二人 帝、東宮。
 ○なにをもおしやり 云々 上著をすつかりぬいで汗衫一枚になつて。
 ○なほたゞ人に云々 矢張り臣家に生れたのだから君たるべき御幸のなかつたのたらう。斯かる僭越の行ひでは永く榮えないだらうと評判した。

さるべき人々まゐり給へりける、みなほゝゑみたまひにけれ。中にも四條少將隆國の君はつねにおもひいでてぞ、今に笑ひ給ふなる。かやうにあまりに古代にぞおはしますべき。むかしの御童名は、みやを君とこそは申ししか。

一 太政大臣兼家

このおとゞは、これ九條殿の三郎君、東三條のおとゞにおはします。御母は一條攝政におなじ。冷泉院圓融院の御をぢ、一條院三條院の御おほち、東三條女院贈皇宮の御父、公卿にて二十年、大臣の位にて十二年、攝政にて五年、太政大臣にて二年、世を知らせ給ふ事、さかえて五年ぞおはします。「正暦元年七月二日うせさせ給ひにき。御年六十二。」出家せさせ給ひてしかば、後の御いみな無し。

内にまるらせ給ふにはさらなり、牛車にて北の陣まで入らせたまへば、それより内はなにはばかりの程ならねど、紐ときていらせたまふとぞ。されどそれはさてもあり、相撲のをり、東宮のおはしませば、二人の御まへに、なにをもおしやりて、御あせとりばかりにてさぶらはせ給ひけるこそ、世にたぐひなくやんごとなき事なれ。

末には北の方もおはしませざりしかば、をとこそすみにて、東三條の西の對を清涼殿づくりに、御しつらひより始めて、すませ給ふなどをぞ、あまりなる事に人申すめりし。なほ

たゞ人にならせ給ひぬれば、御果報のおよばせ給はぬにや。さやうの御みもちに久しくはたもたせ給はぬとも、さだめ申すめりき。

そのほどは夢ときもかななぎも、かしこき者どもの侍りしぞとよ。堀河の攝政兼通のはやり給ひし時に、この東三條殿は御つかさども停められさせ給ひて、いとからくおはしましし時に、人の夢に、かの堀河の院より矢をいと多く東さまにいるを、いかなるぞと見れば、東三條殿に皆落ちぬと見けり。よからず思ひきこえさせ給へる方より、矢おはせ給へば、あしき事ならむと思ひて、殿にも申しければ、おそれさせたまひて、夢ときとはせ給ひければ、「いみじうよき御夢なり。世の中のこの殿にうつりて、あの殿の人のさながらまるべきが見えたるなり。」と申しけるが、あてざりしことかは。

又そのころいとかしこきかななぎ侍りき。賀茂の若宮のつかせ給ふとて、ふしてのみものを申ししかば、うちふしのみことぞ世の人つけて侍りし。大入道殿に召して、物問はせ給ひけるに、いとかしこく申せば、さしあたりたる事、過ぎにし方の事は、皆さいふ事なれば、しか思召しけるに、かなはせ給ふ事どもの出でくるまゝに、後々には御装束奉り、御冠させ給ひて、御膝に枕させせてぞ、ものは問はせ給ひける。それに一事として後々の事申しあやまたざりけり。さやうに近く召しよするに、いふがひなきほどのものにもあらで、すこしおもと程のきはにてぞありける。

○夢さき 夢卜者。
○かななぎ 神おろしする者。
○はやり 時めく。
○よからず思ひ云々 兼通の事。
○あの殿の人云々 兼通方の人全部こらへ参る兆た。
○あてざりし云々 其の夢解は的中した
○賀茂の若宮 上賀茂の別雷神。
○大入道殿 兼家。

○いふがひなき云々 取るに足らぬ身分の者でなくて侍女位の分際であつた。

○法興院 二條北、京極東。
○御うら 御占。

○みまや 麩。
○下格子 格子を下すこと。
○まるりわたしければ 格子を皆下しければ。

○ゆふけさひ給ひ 夕方辻に出て行人の語を聞きて我が身の上を占ひ給ひ。

この殿、法興院におはしますことをぞ、快からぬ所と、人はうけ申さざりしかど、いみじう興ぜさせたまひて、聞きもいれで、わたらせ給ひて、ほどなくうせおはしましにき。御物忌のをりわたらせ給はむとて、おはしましてはいかゝあると、御うらをせさせおはしまして、そのたび法興院にて御やまひづきてうせさせ給へるぞかし。

みまやの馬に御隨身のせて、栗田口へつかはしし、あらはにはるゝと見ゆるなどをかしき事におほせられて、月のあかき夜は、下格子ゆがしもせで、ながめさせ給ひけるに、目に見えぬ物のはらくとまるりわたしければ、さぶらふ人々はおぢさわけど、殿はつゆおどろかせ給はで、御枕上なる太刀をひきぬかせ給ひて、「月見るとてあけたる格子をおろすは、なにもものするぞ、いと便びんなし。もとのやうにあけわたせ。さらすば悪しかりなむ。」とおほせられければ、やがてまるりわたしなど、おほかたおちるぬ事ども侍りけり。さてつひに殿原の領にもならで、かく御堂にはなさせ給へるなめり。

このおとゞの御君達、女君四ところ、男君五人おはしましき。女二所、男三所、五所は、攝津守藤原中正のぬし時姫のむすめの腹におはします。三條院の御母起子の贈皇后宮と女院證子、大臣三人ぞかし。

この御母時姫いかにおほしけるにか、いまだわかうおはしけるをり、二條の大路にいでて、ゆふけとひ給ひければ、しらがいみじく白き女の、たゞ一人行くが、立ちとゞまりて、「な

にわざし給ふ人ぞ。若しゆふけとひ給ふか。何事なりとも、おほさむ事かなひて、この大路よりも長く長くさかえさせ給へよ。」と、申しかけてこそまかりにけれ。人にはあらでさるべきものの示し奉りけるにこそ侍りけめ。

女君一人は女院の後の宮にておはしまししをりの宣旨にておはしき。又對の御方と聞えし御腹おとこの女、大臣いみじうかなしうし聞えさせ給ひて、十一におはせしをり、内侍のかみになし奉らせ給ひて、うちすみせさせ奉らせ給ひし。御かたちいとうつくしうて、御ぐしも十一二のほどに、絲をよりかけたるやうにて、いとめでたくおはしませば、ことわりとて、三條院の東宮にて御元服させ給ふ夜の御そひぶしにまるらせ給ひて、三條院もにくからぬものに思召したりき。

夏いとあつき日わたらせたまへるに、御まへなる氷をとらせ給ひて、「これしばしもち給ひたれ。まろをおもひたまはば、今はといはざらむかぎりは、おきたまふな。」とて、もたせ聞えさせ給ひて、御覽じければ、まことに、かたのくろむまでこそもち給ひたりけれ。「さりともしばしぞあらむと思ししに、あはれさすぎて、うとましくこそおほえしか。」とこそ、院は仰せられけれ。

あやしきことは、源宰相頼定の君かよひ給ふと、よに聞えて、里にいで給ひにきかし。たゞならずおはすとさへ、三條院きかしたまひて、この入道殿に、「さる事のあるは、ま

○宣旨 上臈女房。
○ことわりにて 後に女御に立ち給ふも道理ある事にて。
○御そひぶし 東宮皇子等の元服し給ふ夜公卿等の少女を御傍に添ひ伏さす事。
○今はと もう宜しき。
○かたのくろむまで 指筈の色のかはるまで。
○さりとも云々 さうはいうたものの暫時我慢するたらうと思つたのにあ、我慢し過ぎて御つて厭らしく思つた。
○源宰相 村上帝の皇子、爲平親王の御子。
○たゞならず 御懐妊。

○けさうし 化粧し

ことにやあらむ。」とおほせられければ、「まかりて見てまゐり侍らむ。」とて、おはしたりければ、例ならずあやしくおほして、几帳ひきよせ給ひけるを、おしやらせ給へれば、もとはなやかなるかたちに、いみじうけさうし給へれば、常よりも美しう見え給ふ。「春宮にまゐりたりつるに、しかく仰せられつれば、見奉りにまゐりつるなり。そらごとにもおはせむに、しかきこしめされたまはむが、いと不便なれば。」とて、御むねをひきあけさせ給ひて、乳をひねり給へりければ、御顔にさゝとはしりかゝるものか。ともかくものたまはせで、やがてたたせ給ひぬ。

春宮にまるらせ給ひて、「まことにさぶらひけり。」とて、し給ひつるありさまを啓せさせ給へれば、さすがにもと心苦しう思召しならせ給へる御中なればにや、いとほしげにこそおほしめしたりけれ。内侍のかみは、殿かへらせ給ひて後に、人やりならぬ御心づから、いみじう泣き給ひけりとぞ、そのをり見奉りたる人かたり侍りし。東宮にさぶらひたまひしほども、宰相はかよひまゐり給ふこと、あまりこといでてこそは、宮きこしめして、「たちはきどもして蹴させやせましと思ひしかど、故おとこの事をなきかけにもいか」といほしかりしかば、さもせざりし。」とこそ仰せられけれ。この御過ちより、源宰相三條院の御時は殿上もしたまはで、地下の上達部にておはせしに、この御時にこそは殿上し、檢非違使の別當などになりてうせ給ひにしか。

○人やりならぬ御心づから 自分の爲した自分の心から。
○あまりこといでてこそは 餘り度重なりては。
○たちはき 帯刀。
○東宮武官。
○なきかけ 亡霊。

○少しの事 少しでも騒がしき事。
 ○雲形云々 江談抄「帶唐鴈落花形、垂无鷲形雲形鶴通天壽通天、共在御堂寶蓋云々」御帶は石帶。
 ○鈎 帶をかける金具。
 ○一品の宮 三條院の皇女陽明門院禎子の御弟の宮たち 敦道、爲尊親王。
 ○きぬながういださせ 所謂出衣をさせ
 ○物忌 物忌の時は其の標に柳の木札又は忍草に物忌と書き冠又は麻に掛けるを通幣とす。
 ○もの見 祭の見物
 ○御元服おどり 元服した爲に容貌が一段見劣りする事。
 ○一家の殿はら云々 兼家の御子達快からず思ひしかど。

今一つの御腹の大君は、冷泉院の女御にて、三條院、彈正宮、帥宮の御母にて、三條院位につかせたまひしかば、贈皇后宮と申しき。この三人の宮たちをおぼ殿ことのほかかなしうし申し給ひき。世の中に少しの事もいでき、かみもなり地震もふる時は、まづ東宮の御方に参らせ給ひて、をぢの殿ばら、それならぬ人々などを「内の御方へはまるれ、この御方にはわれさぶらはむ。」とぞ仰せられける。雲形といふ高名の御帶は、三條院にこそは奉らせたまへれ。鈎のうらに東宮に奉ると、刀のさきして、自筆にかかせたまへるなり。この頃は一品の宮にとこそうけたまはれ。

この東宮の御弟の宮たちは、すこしかろくにぞおはしましたし。帥の宮の祭のかへさ、和泉式部の君とあひのらせたまひて、御覽せしさまも、いと興ありきやな。御車のくちのすだれを、中よりきらせ給ひて、わが御方をばたかうあけさせたまひ、式部の方をばおろして、きぬながういださせて、紅の袴に、あかき色紙の物忌ひろきつけて、土とひとしうさけられたりしかば、いかにぞ、もの見よりは、それをこそ人見るめりしか。

彈正宮のわらはにはおはしましたし時の御かたちの美しさは、はかりもしらず、かややくとこそは見えさせ給ひしか。御元服おとりのことのほかにせさせ給ひにしをや。

この宮たちは御心のすこしかろくおはしますこそ、一家の殿ばらうけ申させたまはざりしかど、さるべきことのをりなどは、いみじうもてかしづき申させ給ひし。帥宮、一條院

○御作文 御作詩。
 ○せめさせ きつくなり。

の御時の御作文に参らせ給ひしなどには、御前などさるべき人多くて、いとこそめでたうてまるらせ給ふめりしか。御前にて御機しやうしのいたうせめさせ給ひけるに、こ、ちもたがひて、いとたへがたくおはしましたしければ、この入道殿にかくと聞え申させ給ひて、鬼間におはしまして、御機をひきぬき奉らせ給へりければこそ、御心ち直らせ給へりけれ。

贈皇后宮の御ひとつはらの今一所の姫君は、圓融院の御時、梅壺の女御と申して、一の御子うまれ給へりき。そのみこ五つにて東宮にたたせ給ひ、七つにて位につかせ給ひしかば、御母女御どの寛和二年丙戌七月五日后にたたせ給ひて、中宮と申しき。このみか

どを一條院と申しき。その母后入道させ給ひて太上天皇とひとしき位にて、女院と

きこえさせき。一天下をあがま、にしておはしましたしき。
 この父おとゞの太郎君、女院の御ひとつはらの道隆のおとゞ、内大臣にて關白させ給ひき。次郎君は陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり、道綱と聞えし。大納言までなりて、右大將かけたまへりき。この母君きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌などかきあつめて、かけるふの日記と名づけて、世にひろめ給へり。殿のおはしましたりけるに、門を遅くあけければ、たびく御消息いひれさせ給ふに、女君、

歎きつ、ひとりぬる夜のおくるまはいかに久しき物とかは知る

○なけきつ、の歌
 拾遺集總部。

○あがま、に 我が思ふ通りに。
 ○倫寧 讚岐介惟岳の子。

○伊にや伊にの歌
蜻蛉日記にもあり。
○あつしくて 病重
くして。

○しれ者 寝者。

○えこそうけ給はら
ずなりしか 三道と
いうたかそこまでは
聞かなかつた。

○大疫癘の年 長徳
元年。
○御みきの云々 御
酒の中毒。

いと興ありとおほして、

伊にや伊に冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるは苦しかりけり

されば、その御腹の君ぞかし、この道綱の卿、後には東宮の傅になり給ひて、傅殿とぞ申すめりし。いとあつしくて大將をも辭し給ひてき。その殿今の入道殿の北の政所の御はらからにすみ奉ら給ひて、うまれ給へりし君、宰相中將兼經の君よ。道命阿闍梨、極めたる和歌の上手におはしける。父大納言殿は、寛仁四年十月十三日に出家、同じ十六日に、うせ給ひにき。御とし六十六とぞ聞き奉りし。

大人道殿の三郎栗田殿、又四郎は外腹の治部少輔の君とて世のしれ者にて、まじらひもせで、やみ給ひぬとぞきき侍りし。五郎君只今の入道殿におはします。女院の御母北の方の御腹の君達三所の御ありさま申し侍らむ。昭宣公の御君達三平とは聞えさすめりしに、此の三所をば三道とや世の人申しけむ、えこそ承らずなりしかとてほゝゑむ。

一 内大臣道隆

このおとゞは、これ東三條のおとゞの一男なり。御母は女院の同じ腹なり。關白になりさかえ給ひて、六年ばかりやおはしましけむ、大疫癘の年こそうせさせ給ひけれ。されどもその病にはあらで、御みきのみだれさせ給ひにしなり。をのこは上戸ひとつの興の事に

すれど、すぎぬるはいと不便なる折はべりや。

○もてはやさせ 瓶
を賞配され。
○御もごりはなち
て 冠を取り御髪を
現はして。
○ものもおほえず
酔ひ潰れて。
○三度の御かはらけ
土器で三杯酒を飲
む事。
○上の御社 上賀茂
社。
○一の大納言 首座
の大納言。
○御前の松の光 御
前驅のことも松明の
光。
○御すきか休 物の
透開より見える姿。
○おごろかしまうさ
で 醒まさないで。

祭のかへさ御覽すとて、小一條大將閑院大將と一つ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ。

鳥のついるたるかたを、瓶につくらせ給ひて、興あるものにおほして、ともすれば、おほみきいれて召す。今日もそれにてまるらする。もてはやさせたまふほどに、あまりやうやうすぎさせ給ひて、後には御車のしりくちのすだれみなあけて、三所ながら御もとよりはなちておはしましけるは、いとこそ見ぐるしかりけれ。大方この大將殿たちのまるり給へる、尋常にて出で給ふをば、いと本意なく口をしき事におほしめしたりけり。ものもおほえず、御装束もひきみだりて、御車さしよせつゝ、人にかゝりて乗り給ふぞ、いと興ある事にさせ給ひける。但しこの殿御酔のほどよりは、とくさむる事をぞさせ給ひし。

御賀茂詣での日は、社頭にて三度の御かはらけ、さだまりてまるらするわざなるを、その御時には禰宜神主も心えて、大かはらけをぞまるらせしに、三度はさらなる事にて、七八度など召して、上の御社にまるりたまふ道にては、やがてのけざまに、しりの方を御枕にて、不覺におほとのごもりぬ。一の大納言にてはこの御堂殿ぞ坐ししかば、御覽するに、夜に入りぬれば、御前の松の光にとほりて見ゆるに、御すきかけのおはしまさねば、あやしとおほしめしけるに、まるりつかせ給ひて、御車かきおろしたれど、えしらせ給はず、いかにとおもへど御前どももえおどろかしまうさで、只さぶらふなめるに、入道殿お

○表の御袴 東帯の時大口袴の上に重ねて著る袴。
 ○さりけなく そんな酔ひ潰れた様子もなく。
 ○濟時朝光などもや云々 道隆の酒の友なれば二人の居る所ならば我も極樂に行かう。
 ○地獄の罪云々 地獄の罪の端に頭を打ちあて初めて佛の御名を思ひ出して成佛せんと思つた人のやうに道隆も成佛が初めからの目的でなく酒友に會ふ爲である。
 ○天下執行の宣旨 關白に代り太政官の文書内覽の宣旨。
 ○長押 敷居の下に別に長く横に渡す材で下長押の意。
 ○こみやう 異様。見にくき貌の意。
 ○かはらかに 浦酒に。

りさせ給へるに、さてあるべき事ならねば、轆ながえの外ながら、たかやかにや、と御扇をならしなどせさせ給へど、更に驚き給はねば、近くるよりて、表の御袴のすそをあら、かにひかせ給ふをりぞ、おどろかせたまひて、さて御用意はならはせ給へれば、御櫛かうがい、ぐしたまへりける取りいでてつくるひなどして、おりさせ給ひけるに、いさ、かさりけなくきよらかにてぞ坐しし。さればさばかり酔ひなむ人は、その夜はおきあがるべきかは。それぞこの殿の御上戸はよくおはしましける。

その御心のなほ終りまでも忘れ給はざりけるにや、御病つきてうせ給ひける時、西にかたむけ奉りて、念佛申させたまへと、人々のすゝめ奉りければ、濟時朝光などもや、極樂にはあらむすらむ。と仰せられけるこそあはれなれ。常に御心におほしめしならひたる事なれば、あの地獄の罪のはたに、頭うちあてて、三寶の御名を思ひ出でけむ人のやうなる事なりや。

御かたちぞいとよらかにおはしましし。帥殿伊周に天下執行の宣旨くだし奉りに、この民部卿殿の頭辨にてまゐり給へりけるに、御病いたくせめて、御装束もえ奉らざりければ、御直衣にて、御簾の外みすにるざり出でさせ給ひしにも、長押なげしをおりわづらはせ給ひて、女の装束御手にとりて、かたのやうにかづけさせ給ひしなむ、いと哀れなりし。こと人のいとさばかりなりたらむは、ことやうなるべきを、なほいとかはらかに、あてに坐せしかば、

○かたちはいるべかりけり 美貌は必要

○高階成忠 高階真人良臣の子。
 ○積善寺 法興院中に建てた御堂。

○いとほしさも云々 御氣の毒加減も曾通に世人は思ふ事たらうが。
 ○御さしつぎの君 御妹君。

病つきてもこそ、かたちはいるべかりけれとなむ見えしところ、民部卿殿はつねにのたまふなれ。

その關白殿は腹々に男子女子あまたおはしましき。今の北の方は大和守高階成忠のぬしの御女なり。後の世は高二位とこそいひはべりしか。さて積善寺の供養の日は、この入道殿の上に候はれしは、いとめでたうなりしわざかな。

その腹に男君三所、女君四所おはしましき。大姫君は一條院の十一にて御元服させ給ひしに、十五にてまゐらせ給ひけむ。やがてその年の六月一日に后にるさせ給ふ、中宮と申しき。東三條殿の御櫛みすのさかりもすぐさせ給はで、奉らせ給ひしをぞ、世の人いかにぞや申し侍りし。さて關白殿道隆などうせさせ給ひて後に、男御子一人、女みこ二人うみ奉らせ給へりき。女一の宮は入道の一品宮とて、三條におはします。女二の宮は九つにてうせさせ給ひにき。男親王式部卿の宮敦康親王とこそ申ししか。たびく御思ひたがひて世の中をおほし歎きてうせ給ひにき。御年二十九にて、あさましうてやませ給ひにしか。冷泉院の宮達などのやうにかろくにおはしまさしかば、いとほしさもよろしくや、世の人おもひ申さまし。御さえいとかしこく、御心ばへもいとめでたくぞおはしましし。

さて又この宮の御母后の御さしつぎの君は、三條院の東宮と申ししをりの淑景舎とて、はなやがせ給ひしも、父殿うせ給ひにし後、御年二十三ばかりにてうせさせ給ひにき。

○宮 敦道親王。

○立たむはしたに
立ちさるのも具合
悪く。

○響應し申してよ
き程にあしらつて。

○新發意 新發意。
今道心。

○まことしき文者
眞の學者。

三の御方は冷泉のみこ、帥宮と申ししをこそは、父殿増どり奉らせ給へりしも、後にはやがて御中たえにしかば、末の世は一條わたり、いと怪しくておはすとぞきこえ給へりし。まことにや。御心ばへなどの、いとおちるすおはしましたければ、かつは宮もうとみ聞え給へりけるとかや。僧客人などのまゐりたるをりは、御簾をいとたかやかにおしやりて、御ふところを廣げて立ち給へりければ、宮は御面うちあかめてなむおはしましたける。さぶらふ人も顔色のたがふ心ちして、うつぶしてなむ、立たむはしたに、すちなかりける。宮後には見かへたりしまゝに、うごきもせられず、ものこそおほえざりしとこそ仰せられけれ。

又學生ども召しあつめて、作文しあそばせ給ひけるに、金を二三十兩ばかり、屏風のみよりなけいだして、人々うち給ひければ、ふさはしからずにくしとおもはれけれど、その座にて響應し申してとりあらそひけり。金賜はりたるはよけれども、さも見ぐるしかりしものかなとこそ、いまに申さるなれ。人々文作りて講じなどするにも、よしあしいとたかやかに、定め給ふをりもありけり。二位の新發意の御流れにて、この御ぞうは女もみな、さえのおはしましたるなり。

母上は高内侍ぞかし。されど殿上えせられざりしかば、御まへにはえまるらで、行幸節會などには、南殿にぞまゐられし。それはまことしき文者にて、御まへの作文にはふみ奉

○少々のをの子 雷
通の男子。

○二間 清涼殿内に
ありて弘徽殿の上の
御局の南、夜の御殿
の東の間。

○古體 古風。

○墮落 零落。

○そのけ 其の故。

○その宮のうへ 三
の君の事。

○母代 母の代り
なりて後見する人。

○一つ腹 高内侍の
腹。

○對の御方、道隆の
妾。

○まとも聞え給ふぞ
かし 高内侍、對の
御方の腹以外の者は
次の如しの意。

○守仁 參議安親子

○祖父おき 兼家

○ざれをかしく云々
洒落冗談をいふ人
であつた。

○まとも聞え給ふぞ
かし 高内侍、對の
御方の腹以外の者は
次の如しの意。

られしはとよ。少々のをの子にはまさりてこそきこえ侍りしか。さやうのをり、召しありけるにも、臺盤所の方よりはまゐり給はで、弘徽殿の上の御局の方よりとほりて、二間になむさぶらひ給ひけるとこそ、うけたまはりしか。古體に侍るにや。女の餘りにさえかしこきは、ものあしと人の申すなるに、此の内侍、後にはいとみじう墮落せられにしも、そのけとこそおほえ侍りしか。

さてその宮のうへのさしつぎの四の御方は、御匣殿と申しし、御かたちいとうつくしうて、式部卿の宮の母代にておはしましたしも、はかなくうせ給ひにき。一つ腹の女君たちかくなり。

對の御方と聞えさせし人の御腹にも、女君おはしけるは、今の皇后宮にこそはさぶらひ給ふなれ。まとも聞え給ふぞかし。

男君達は太郎君、故伊豫守守仁のぬしの女のはらぞかし、大千代君よな。それは祖父おととの御子にし奉り給ひて、道頼六郎君とこそは申ししか。大納言までなり給へりき。父の關白殿うせたまひし年の六月十一日に、うちつゞきうせ給ひにき。御年二十五とぞ聞えさせ給ひし。御貌いときよけにあまりあたらしきさまして、物よりぬけ出でたるやうにぞおはせし。御心ばへこそ、こと御はらからにも似給はずいとよく、又ざれをかしくもおはせしか。この殿は異腹におはす。

皇子 皇后宮と同じ腹の男君、法師にて十餘りの程に僧都になし奉り給へりし、それも三十六にてうせ給ひにき。

○粟田殿にわたり
道兼に關白の職が渡り。
○そらい 取逃し。
○一家に 伊周一家では。
○うつりつる方 關白のうつった道兼。
○かの殿 伊周。
○無得に 詮方なけに。

○花山院の御事 隆家が花山院を射奉りし事。
○おこたり 過失。
○よろづの事身にあまりぬる人 萬事人に勝れた人。
○北野の御事ぞかし 道真左遷も其の例なり。

今一所は伊周小千代君とて、かのほかばらの道兼大千代君には、こよなくひきこし、二十一に坐せし時に、内大臣になし奉り給ひて、我がうせ給ひし年、長徳元年の事なり。御病おもくなるきはに、内にまるらせ給ひて、おのれかくまかり惱みさぶらふ程、此の内大臣伊周のおとゞに百官竝に天下執行の宣旨給ふべきよし申し下さしめ給ひて、われは出家せさせたまひてしかば、此の内大臣伊周を關白殿とて、世の人あつまりまるりし程に、粟田殿にわたりにしかば、手にすゑたる鷹をそらいたらむやうにて、歎かせたまふ。

一家にいみじき事におほしなけしほどに、そのうつりつる方も、夢のごとくにてうせ給ひにしかば、今の入道殿その年の五月十一日よりして、世をしろしめししかば、かの殿いとゞ無得におはしましし程に、又その年花山院の御事いできて、御官位とられて、只太宰の權帥になりて、長徳二年四月二十四日にこそはくだり給ひにしか。御年二十三。いかにばかりあはれに悲しかりし事なりな。されどけに、必ずかやうの事、我がおこたりにてながされ給ふべくもあらず。よろづの事身にあまりぬる人の、もろこしにもこの國にもあるわざにぞ侍るなる。むかしは北野の御事ぞかしなどいひて、はなうちかむほどあはれに見ゆ。此の殿も、御さえ日本にはあまらせ給へりしかば、かかる事もおはしますにこそは侍りしか。

侍りしか。

○そら知らずして
知らぬふりして。
○らうがはしく 亂りがはしく。
○ふどり給へる人 帥殿をいふ。
○すがやかにも はきはきと。

○御嶽 大和國。

さて式部卿の宮の生れさせ給へる御よろこびにこそは、召し還されさせたまへれ。さて大臣にならずふる宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまも、いと落ち居てもおほえ侍らざりき。いと見ぐるしき事のみ聞え侍りしものとて、内にまるらせたまひけるに、北の陣よりいらせ給ひて、西ざまにおはしますに、入道殿もさぶらはせ給ふほどなれば、梅壺の東の塀の戸のはざまに、下人どものいと多くるたるを、此の帥殿伊周の御供の人々いみじくはらへば、ゆくべき方のなくて、梅壺の塀の内にはらくといりたるに、これはいかにと殿御覽ず。あやしと人々みれど、さすがにえともかくもせぬに、なにがしといひし御隨身の、そら知らずして、あら、かに、いたうはらひ出せば、又とざまにいとらうがはしく出づるに、帥殿のともの人々、このたびはえはらひあへねば、ふとり給へる人にて、すがやかにえ歩みのき給はで、登華殿の細どのしとみの蔀におしたてられたまひて、や、とおほせられけれど、せばきところにて、雜人いと多くはらはれて、おしかけられ奉りぬれば、とみにえのかで、いとこそ不便に侍りけれ。

それはけに御つみにもあらねども、只花やかなる御ありきふるまひをさせ給はずは、さやうに軽々なることはおはしますべき事かはとぞかし。又入道殿の御嶽にまるらせ給へりし道にて、帥殿の方より便なきことあるべしときこえ

○さりてあるべき
ならねば 其の儘捨
ておくべきでない
から。

○秤 盤。

○おしかへし 反對

○博奕 盤み采を
用る勝負を争ふ遊戯

○うちたせ 始ま
らせ。

○二所ながら云々
兩人とも裸になり腰
の邊のみ纏ひて。

○御かけ物 御賭物

○えもいはぬ 立派
なもの。

○あたらしきが興あ
る 新しく面白味
のあるものを。

○さはいへど 表面
はこやかくいへど。

て、常よりも世をおそれさせたまふに、平にかへらせ給へるに、かの殿も、かかること聞
えたりけりと人の申せば、いと傍かたはらいたくおほされながら、さりとしてあるべきならねば、
参り給へり。

道のほどの物がたりなどさせたまふに、帥殿いたく臆し給へる御氣色のしるきを、を
かしくも、又さすがにいとほしくもおほされて、「久しく雙六つかうまつらで、いとさうざ
うしきに、けふあそばせ。」とて、雙六の秤はんめして、おし拭はせたまふに、御氣色こよなう
なほりて見え給へば、殿をはじめ奉りて、参り給へる人々、あはれになむ見奉りける。

さばかりの事をきかせ給はむには、少しすさまじくもてなさせたまふべけれど、入道殿
は、あくまでなさせおはします御本性にて、必ず人のさ思ふらむことをば、おしかへしな
つかしくもてなさせたまふなり。この御博奕はくやくは、うちたせ給ひぬれば、二所ながらはだ
かに腰からませ給ひて、夜半よなか曉あかつきまで遊ばす。心をさなくおはする人にて、便なき事もこ
そいでくれと、人はうけ申さざりけり。いみじき御かけ物どもこそ侍りけれ。帥殿はふる
き物どもえもいはぬ、入道殿はあたらしきが興ある、をかしきさまにしなしつゝ、ぞ、かた
みにとりかはさせ給ひけれど、かやうの事さへ、帥殿は常にまけ奉らせたまひてぞ、まか
でさせ給ひける。

かかれど只今は教康一の宮のおはしますをたのもしき物におほし、世の人もさはいへど、し

○御しはぶき病 御

咳の病。

○阿闍梨 修法者の

意。

○たいふしき 疎
畧なる。

○世の末は云々 末

世は人心も柔弱さな
りしが、伊周も道長

を恨み死んだこの事
なれど冷泉院に崇つ

た元方の靈のやうな
事はなかつた。これ

も道長の威光に壓せ
られたものだらう。

○老のなみに云々

老年の爲に或は之は
過言かも知れぬと特

に此の一段は小聲な
り。

たには追従おそひし、おぢ申したりし程に、今の帝東宮みかどさしつゞき、うまれさせ給へりしかば、
世をおほしくづぼれて、月ごろ御病もつかせ給ひて、寛弘七年正月二十九日うせさせ給ひ
にしぞかし。御年三十七とぞ承りし。

かぎりの御病とても、いたう苦しがりたまふ事もなかりけり。御しはぶき病ぶきにやなどぞ
おほしけるほどに、おもり給ひにければ、修法せむとて僧召せど、参るものなきに、いか
がはせむとて、道雅みちまの君を御使にて、入道殿に申し給ひけり。夜いたう更あけて、人もしづ
まりにければ、やがて御格子のもとによりて、しはぶき給ふ。「たれぞ。」と問はせ給へば、
御名のり申して、「しかくの事にて、修法はじめむとつかうまつれど、阿闍梨にまうでく
る人もさぶらはぬを、請じて給はらむ。」と申し給へば、「いと不便ふびんなる御事かな。えこそう
けたまはらざりけれ。いかやうなる御心ちぞ、いとたいふしき御事にもあるかな。」と、
いみじう驚かせ給ひて、「たれを召したるにまるらぬぞ。」など、くはしく問はせ給ひて、な
にがし阿闍梨をこそは奉らせ給ひしか。

されど世の末は人の心もよわくなりけるにや、悪しくおはしますなど申ししかど、元
方の大納言のやうにやは聞えさせ給ふな。又入道殿、猶すぐれさせ給へる威のいみじきに
侍るめり。老のなみにいひすごしもぞし侍ると、けしきだちてこの程はうちさゝめく。

源大納言重光卿の女のはらに、女君二所、男君三所おはせしが、この君たちみなおとな

○后がね 後の候補者。
 ○すゑなめて 竝べ置いて。
 ○さりともご ざんな事があらうとお助け下さるご。

○おほしかけぬ御ありさま 上東門院に奉公するごは意外の御有様。

○あなかしこ 必ず身すてがたしめて云々 汝身捨て難く世に出ようごとも思ひもよらぬ人に名刺を差出し我が面目を潰しいや父祖は旺であつたが今はこんなたゞ人にいひはやるな。

びたまひて、女君は后がねとかしづき奉りたまひしほどに、さま／＼おほしし事どもたがひて、かく御なやみさへおもりたまひにければ、此の姫君達をするなめて、なく／＼宣ひける。「年ごろ佛神ぶつじんにいみじくつかうまつりつれば、何事も、さりともごそたのみ侍りつれど、かくいふがひなき死にをさへせむことかなしき。かく知らましかば、君たちをこそわれよりもさきにうせたまひねと祈りおもふべかりけれ。おのれ死なば、いかなるまひありさまをし給はむすらむと思ふが悲しく、人わらはれになるべきこと」といひつづけて泣かせたまふ。「あやしき有様をもしたまはば、なき世なりとも、うらみ聞えむする」とぞ、母北の方にもなく／＼遺言ゆゑんし給ひけるかし。

その君達、大姫君は高松殿明子の春宮大夫殿頼宗の北の方にて、あまたの君たちうみつゞけておはすめり。それはあしかるべき事ならず。今一所は大宮上東にまゐりて、帥殿の御方とて、いとやん事なくてさぶらひ給ふめるこそは、おほしかけぬ御ありさまなめれ。あはれなめりかし。

男君は松君とて、うまれ給ひしより、祖父おとゞいみじきものにおほして、むかへ奉り給ふたびごとに、贈りものをせさせたまひ、御乳母めのとにも饗應し給ひし君ぞかし。このころ三位しておはすめるは。この君を父おとゞ、「あなかしこ、我がなからむ世に、あるまじきわざをせず。又身すて難しとてもの覚えぬ名簿みやうぶうちして、わがおもてふせて、いでやさあ

○ありわびなむきは住み辛い時。
 ○めやすきこと 見苦しからぬ事。
 ○坊官の勞 春宮坊の官人たりし功勞。
 ○惟伸 平珍材の子。
 ○年ごろの妻子云々 永年添つた妻とて頼みにはならない。
 ○中々それしも云々 處が卻つて妻子は何を爲し得べきぞと悔りて氣を許すは馬鹿らしい。
 ○翁らが童部云々 拙者の妻が左様な事をしたなら。
 ○かの君さやう云々 道雅は妻の不埒を處理し得ない馬鹿者ではない、分別のある君であるよ。
 ○序代 序文。
 ○心なき事 道雅の父伊周は道長の女を敵視せるに今道長の女の腹の御子の爲に序文を書くは無分別なり
 ○本體 本來。

りしかど、かかるぞかしと、人にいひのたてせさすな。世の中にありわびなむきは、出家すばかりなり。」と、泣く／＼いひ仰せ給ひけるに、此の君當代後一條院の東宮にておはしましたしをりの亮すけになりたまひて、いとめやすきことと見奉りしほどに、春宮亮道雅の君とて、いとおほえおほしきかし。それもいかゞしけむ、位につかせ給ひしきさみに、藏人の頭にもえなり給はずして、坊官の勞に三位ばかりし給ひて、中將をだにえかけたまはずなりにしこそ、いとかなしかりし事ぞかし。あさましく思ひかけぬ事どもかな。

此の君故帥の中納言惟伸これなかの女にぞすみ給ひて、男一人うませたまへりしは、法師にて明尊僧正の御房にこそおはすめれ。女君いかゞ思ひ給ひけむ、みそかににけて、今の皇后宮にこそまゐりて、大和宣旨とてさぶらひ給ふなれ。されば年頃の妻子とやはたのむべかりける。中々それしもこそ、あなづりてをこがましくもてなしけれ。あはれ翁らが童部の、さやうに侍らましかば、白髪しろかみをもそり、鼻をもかきおとし侍りなまし。よき人と申すものは、いみじかりし名の惜しければ、ともかくもし給はぬにこそあめれ。さるはかの君さやうにしれ給へる人かは、たましひはわきたまふ君をは。

帥殿後一條院はこの内のうまれさせ給へりし七夜に、和歌の序代かかせ給へりしぞかし。中々心なき事やな。本體はまるらせ給ふまじきを、それにさし出で給ふより、多くの人の目をつけ奉りて、いかにおほすらむ、なにせむにまゐりたまへるぞとのみ、まもられ給ふ。いと

○はしたなきこと
不都合な事。
○にくさは云々 氣
味よい事には道雅は
序文を立派に書いた
○當座の云々 其の
場の道雅は大いに面
目を施して。
○さがなもの 性悪
しき人。
○此の兄殿云々 伊
周流罪の御騒動に關
係して。
○たましひおはす
剛膽。
○ひさみせの事 先
年足下達を流罪に處
した事。

はしたなきことにはあらずや。それにこの入道殿は、ことにすさまじからずもてなし聞えさせ給へるかひありて、にくさはめでたくこそかかせ給へりけれ。當座の御おもては優にて、それこそ人々ゆるし申し給ひけれ。

此の帥殿の御一つ腹の十七にて中納言になりなどして、世の中のさがなものといはれたまひし殿の、御童名は阿古君ぞかし。此の兄殿の御の、しりにかゝりて、出雲の權守になりて、但馬にこそおはせしか。さて帥殿のかへり給ひしをり、此の殿ものほりたまひて、もとの中納言になりや、また兵部卿などこそはきこえさせしか。それもいみじうたましひおはすとぞ、世の人におもはれ給へりし。

あまたの人々の下臈になりて、かた／＼すさまじくおほされながら、ありかせ給ふに、御賀茂詣でにつかうまつり給へるに、むげにくだりておはするがいとほしくて、殿の御車にのせ奉らせ給ひて、御物語こまやかなるついでに、「ひととせの事は、おのれが申し行ひたるとぞ世間にはいひ侍りける、そこにもしかぞおほしけむ。されどもさなかりし事なり。宣旨ならぬ事、一言にても加へて侍らましかば、此の御社にかくて参りなましや。天道も見給ふらむ、いと恐ろしき事と、まめやかにのたまはせしなむ、中々におもておかむかたなく、すちなくおほえし。」とこそ、後にのたまひけれ。それもこの殿におはすれば、さやうにも仰せらるゝにぞ。帥殿にはさまでもやは聞えさせ給ひける。

○えさりがたき事
已むを得ない事。

○うるはしくなりて
云々 きちんとなり
居ずまひを直し等す
○さかく 先づ／＼
○こまやぶれ侍りぬ
べし 折角の興もさ
めよう。
○逗留し 躊躇し。
○うはぐみて あき
れて。
○さかく あれこれ
さ、
○これらこそ云々
これこそ満足です
○式部卿の御事 敦
康親王の東宮に立ち
給ふ事。
○さりとも／＼こ
我は斯く答落しても

この中納言殿は、かやうにえさりがたき事のり／＼ばかりあるきたまひて、いと古のやうにまじらひたまふ事はなかりけるに、入道殿の土御門殿にて御遊びあるに、「かやうの事にこの權中納言のなきこそ猶さう／＼しけれ。」と宣はせて、わざと御消息聞えさせたまふほど、酒杯あまたたびになりて、人々みだれ給ひて紐おしやりてさぶらはるゝに、此の中納言まるり給へれば、うるはしくなりて、るなほりなどせられければ、殿、「とかく御紐とかせ給へ。事やぶれ侍りぬべし。」とおほせられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿うしろより解きたてまつらむとて、より給ふに、中納言殿御けしきあしくなりて、「隆家は不運なる事こそあれ。そこたちにかやうにせらるべき身にもあらず。」と、あらゝかにのたまふに、人々御けしきかはり給へる中にも、今の民部卿殿はうはぐみて、人々の御かほとかく見給ひつゝ、事いできなむず、いみじきわざかなとおほしたり。

入道殿うちわらはせたまひて、「けふはかやうの戯れごと侍らでありなむ。道長とき奉らむ。」とて、よらせ給ひて、はらくと解き奉らせ給ふに、「これらこそあるべきことよ。」とて、御けしきなほりて、さしおかれつる杯とり給ひて、あまたたび召し、常よりもみだれあそばせ給ひけるさまなど、さらまほしくおはしましけり。殿もいみじうもてはやし聞えさせたまひけり。

さて式部卿の御事をのみ、さりとも／＼と待ちたまふに、一條院の御なやみおもらせ給

○御氣色たまはり御機嫌を伺ひ。
 ○あはれの人非人云云 道長を罵る詞。
 ○ひがくしの間 階の間の階を昇り貴子を經て廂に入る所
 ○したまり 調ひ
 ○御さかえの云々 御榮華は他の者へ分配されない因縁があつた爲であらう。
 ○人のこのきは云々 假令心のたしかな者でも斯かる際には落膽せんし他の人々が考へる事を隆家は事の反對に出ようとして美裝されたのである。
 ○皆練重 表裏共に打ちたる紅、或は裏は張りたる紅。
 ○單青くて 青色の單衣。
 ○紅葉重 表紅裏青
 ○二重織物 綾の上に縫物を施せる織物
 ○御まじらひ 御交際
 ○ならばや 大貳になりたひ。

ふきはに、御前にまゐりたまひて、御氣色たまはり給ひければ、「あの事こそつひにえせずなりぬれ。」と仰せられけるに、「あはれの人非人やと申さまほしくこそありしか。」とこそたまひけれ。さてまかで給ひて、我が御家のひがくしの間にしりうちかけて、手をはたはたとうちるたまへりける。世の人は宮の御事ありて、この殿御うしろ見もしたまはば、天下の政はしたまりなむとぞおもひ申したりしかども、此の入道殿の御さかえのわけらるまじかりけるにこそは。

三條院の大嘗會の御禊に、きらめかせ給へりしさまなどこそ、つねよりことなりしか。人のこのきはは、さりとともく、つほれ給ひなむとおもひたりし所を、たがへむとおほしよりしなめり。さやうなる所のおはしましこそ、節會行幸には皆練重は奉らぬ事なるを、單青くてつけさせ給へれば、紅葉重にてぞみえける。表の御はかま、龍膽の二重織物にて、いとめでたく、けうらにこそきらめかせ給へりしか。

御目のそこなはれたまひしこそ、いとくあたりしかりしか。よろづにつくろはせたまひしかども、えやませ給はで、御まじらひたえ給へるころ、大貳の闕いできて、人々望みの、しりしに、唐人の目つくろふがなるに、見せむとおほして、こゝろみにならばやと申し給ひければ、三條院の御時にて、又いとほしくもや思召しけむ、二言となくならせ給ひてしぞかし。

その御北の方は伊豫守兼資のぬしの御むすめなり。そのはらの女君二所おはせし。一所は三條院の御子の式部卿の宮の北の方、今一所は、傳殿の御子の小宰相のうへとぞきこめめる。二所の御婿をとり奉り給ひて、いみじういたはり聞え給ふめり。

政よくし給ふとて筑紫の人さながらしがひ申したりけり。例の大貳十年がほどにて、のほり給へりところ申ししか。かの國におはしまししほど、刀伊國のもの、俄にこの國をうちとらむとやおもひけむ、こえきたりけるに、筑紫には、かねての用意もなく、大貳殿弓矢の本すゑをも知り給はねば、いかゞとおほしけれど、やまと心かしくおはする人にて、筑後肥前肥後九國の人をおこさせ給ふをばさるものにて、府の内につかうまつる人をさへおしとりて、戦はしめ給ひければ、かやつが方の者共、多く死にけるは、さはいへど家たかくおはしますゆゑに、いみじかりし事たひらけ給へりし殿ぞかし。

おほやけ、大臣大納言にもなさせたまひぬべかりしかど、御まじらひたえにたれば、ただにはおはするにこそあめれ。此の中にむねと射かへしたるものどもしるして、公家に奏せられたりしかば、みな賞せさせ給ひにき。種材は壹岐守になされ、其の子は太宰監にこそはなさせ給へりしか。此の種材がぞうは、純友うちたりし者のすぢなり。

此の純友は將門同じ心にかたらひて、おそろしき事はだてたるものなり。將門はみかどをうちとり奉らむといひ、純友は關白にならむと、同じく心を合はせて、この世界にわ

○刀伊國 女真國の内の一國。
 ○さるものにて 勿論の事。
 ○府の内につかうまつる人 大宰府官人
 ○さはいへむ云々 隆家は軍事は不案内だが門閥家故大事件を平定した人である
 ○この中にむね云云 隆家は今度の戦に主として敵を射退けた人名を記して。
 ○種材 大藏春實孫

○四方山の田 澤山の田。

○すみつきて 住みこんで。

○おほろけの云々 普通の戦に戦搖する事もなくなり行くを

○おほえて の次にかしこしを補ふ。

○この程の事云々 刀伊事件に對する隆家の處置甚だよき故

○道もさりあへず云云 道も通られぬ位馬車の並ぶ時もある

○わぬしなりとも云云 そなたでも我が門前を通る事は許さぬ。

○その日と定められぬ 通る日を定められた。

○少しるいで 少し車の前の方に乗り出で。

○ふみいたに云々 車の踏板上を長く強く踏んで。

○くより 指貫の裾に附けた緒。

○幹了 強い事。

○大中童子 何れも僧家で召使ふ童子。

○うらうへ 一本うらへ。表裏。

○さる事をのみ云々 斯かる喧嘩事許り待ちこがれた人々が今日の事に會つた得意氣は如何であらう

○目をかため守り 八方に目をくほり。

○ぞくがう 辱垢。

○こしもあれ云々 事もあらうにこんな事に勝つたさて何か本當の大事に勝つた様な御様子である

れと政をし、君となりて過ぎむといふ事をちぎりあはせて、一人は東の國にいくさをと、のへ、一人は西國の海に、いづくともなく、大筏をかす知らずあつめて、筏の上に土をふせて、うる木をおほし、四方山の田をつくりすみつきて、大かたおほろけのいくさにどうすべくも無くなりゆくを、かしこくかまへて、討ちて奉りたるは、いみじき事なり。それはけに人のかしこきのみにはあらじ、王威のおはしまさむかぎりは、いかでかさる事はあるべきとおほえて。

さて壹岐對馬の人をいとおほく刀伊國にとりもていきたりければ、新羅のみかど、いくさをおこし給ひて、皆うちかへし給ひてけり。さて使をつけて、たしかに此の島におくりたまへりければ、彼の國の使には、太貳金三百兩とらせてかへさせ給ひける。この程の事どもかくいみじくした、め給へるに、入道殿猶この帥殿をすてぬ物におもひきこえさせ給へるなり、さればにや、世にもいとふりすてがたきおほえにてこそおはすれ。御門にはいつかは馬、車の三つ四つたゆる時のある。又道もさりあへずたつ折もあるぞかし。

この殿の御子、男君、たゞ今の藏人少將良頼の君、又右中辨經輔の君、又式部丞などにておはすめり。まことに世にあひて、はなやぎたまへりしをり、此の帥殿は花山院とあらがひごと申させたまへりしはとよ、いとふしぎなりし事ぞかし。「わぬしなりとも、我が門はえわたらじ。」とおほせられければ、隆家「なごてか渡り侍らざらむ。」と申したまひて、

その日と定められぬ。輪つよき御車に、逸物の御車牛かけて、御烏帽子直衣いとあさやかにさうぞかせ給へり。えびぞめの織物の御差貫少しるいでさせ給ひて、祭のかへさに紫野はしらせ給ふ君達のやうに、ふみいたにいとながやかに踏みしだかせたまひて、く、りは土にひかれて、すだれいと高やかにまきあけて、雑色五六十人ばかり、聲のあるかぎりひまなく御さきまらせ給ふ。院にはさらなり、えもいはぬ勇悍幹了の法師ばら、大中童子など、あはせて七八十人ばかりに、大いなる石、五六尺ばかりなる杖どももたせて、北南の御門築地づらに小一條のまへ洞院のうらうへに、ひまなくたてなめて、御門のうちにもさぶらひ、僧のわかやかに力つよきかぎり、さるまうけしてさぶらふ。さる事をのみ思ひたる上下の今日けふにあへるけしきどもは、けにかはありけむ。いづかたにも石杖いしづえばかりにて、まことしき弓矢まではまうけさせたまはず。

中納言殿、御車一時ばかりたてたまひて勘解由かんげゆの小路こうぢよりは北に、御門近くまでは、やりよせ給へりしかど、なほえわたり給はで、かへらせたまふに、院方にそこらつどひたるものども、一つ心に目をかため守りく、てやりかへし給ふ程は、一度に笑ひ合はせたりし聲こそ、いとおびたゞしかりしか。さる見ものやは侍りしとよ。「王威はいみじきものなりけり。えわたらずなりぬるよ。無益の事をいひてけるかな。いみじきぞくがうとりつる。」とてこそ笑ひたまひけれ。院はかちえさせ給ひけるを、いみじとおほしたるさまも、こと

しもあれ、まことしき事のやうなり。

此の帥殿の御はらからといふ君たち、かすあまたおはすべし。頼親の内藏頭、周頼の木
工頭などいひし人、かたはしよりなくなり給ひて、いまはたゞ兵部大輔周家の君ばかりほ
のめき給ふなり。小一條院の御宮達の御乳母の夫にて院の恪勤してさぶらひ給ふ、いと
しこし。また井手の少將とありし君は出家とか。故關白殿御心おきていとうるはしく、あ
てにおはしまししかど、御末あやしく、御命もみじかくおはすめり。今の入道一品宮と、
この帥の中納言殿のみこそはのこらせ給ふめれ。

一 右大臣道兼

このおとゞはこれ大入道殿の御三郎、粟田殿とこそは聞えさすめりしか。長徳元年乙未
五月二日關白の宣旨かうぶらせ給ひて、同じ月の八日にうせさせ給ひにき。御年三十
五とぞ聞えし。大臣の位にて五年、關白と申して七日こそおはしまししか。此の殿は
らの御族に、やがて世をしろしめさぬたぐひ多くおはすれど、まだあらじかし、夢のやう
にてやみ給へるは。

出雲守相如のぬしの御家にあからさまに渡り給へりしをり、關白の宣旨の下りしかば、
あるじのよろこび給ひたるさまおしはかり給へ。せばくてことの作法もあるまじとて、た

○ほのめき 少し世
に知られ。
○恪勤 侍。

○またあらじかし
此の様な人は外にあ
るまい。
○相如 内藏頭相
の子、中納言敦忠孫
○あるじ 相如。
○せはくて云々 相
如の家は狭くて萬事
儀式も出来ないの

○殿の御前 道兼の
御前。
○二條 道兼の本宅
の所在地。
○おのづからのこゝ
にこそは 自然の事
で左程の事もなから
うの思ひ。
○御湯殿 清涼殿の
西北隅。
○かゝりて よりか
かつて。
○殿 道長。
○經營し 支度し。
○しごけなく 締め
なく。

○いで給ひつる云々
参内された時の嬉
しさに比べて驚ふべ
き方なく悲し。
○さりさも云々
やがて快くなるなら
うさあちこちで叫き
胸はふさがりつゝも
人々は互に樂観的に
装つた。
○みたり心ち 病氣

たせ給ひし日ぞ、御よろこびをも申させたまひし。殿の御前は、えもいはぬもののかぎり
すぐられたるに、北の方の二條にかへりたまふ御供の人は、よきもあしきも、かすしらぬ
まで布衣などにてあるもまじりて、殿いだしたて奉りて、わたり給ひしほどの、殿のうち
のさかえ人のけしきは、たゞ、おほしやれ。あまりにもと見る人もありけり。御こゝちは
すこし例ならずおほされけれど、おのづからのことにこそは、いまくしう、けふの御よ
ろこび申しとゞめじとおほして、念じて内にまゐらせたまへるに、いとくるしくならせ給
ひにければ、殿上よりは、え出でさせ給はで、御湯殿の馬道の戸口に御前をめしてかゝり
て、北の陣よりいでさせたまふに、こはいかにと人々見奉る。

殿にはつねよりも經營して、まち奉り給ふに、人々にかゝりて御冠もしどけなくなり、
御紐おしのけて、いとみじうくるしけにておりさせ給へるを、見奉り給へる御こゝち、
いで給ひつる折にたとしへなし。されどたゞさりとともと、さゝめきにこそさゝめけ、むね
はふたがりながら、こゝちよがほをつくりあへり。されば世にはいとおびたゞしくも聞え
ず。

今の小野宮の右大臣殿の御よろこびにまゐり給へりけるをり、母屋の御簾おろして、よ
びいれ奉らせ給へり。ふしながら御對面ありて、「みだり心ちのいとあやしく侍りて、とみ
にはえまかりいでねば、かくて申し侍るなり。年ごろはかなき事につけても、心のうちに

○かくまかりなり
 關白になり。
 ○おしあてに 推量
 して。
 ○いきざし 息づか
 ひ。
 ○いかでかは ぎう
 して普通の顔色であ
 らうぞ。
 ○不覺になり 取り
 亂れ。
 ○長かるべきこと
 今後久しく生きたれ
 るかの如く色々の事
 ○をさなき人は云々
 子供も行ひまでい
 ひ立つのも如何と思
 へぞ。
 ○まさなく 行儀悪
 く。
 ○あやにくがりすま
 ひ いやがり辭退し
 ○おこづり すかし
 ○いみじうしたて
 立派に装はせ。
 ○物の調子 音楽。
 ○かざはひかな 困
 つた事は。
 ○あれは 我は。
 ○まあを 眞青。
 ○あれにもあらぬ
 正氣もない。
 ○さおもへる事よ
 そんな事だらうと思
 ったよ。

よろこび申す事なむ侍れど、させることなきほどは、事ごとにもえ申し侍らでなむ過ぎま
 かりつるを、今はかくまかりなりて侍れば、公おほやけわたくしにつれて報じ申すべきになむ。
 また大小の事も申し合はせむと思ひ給ふれば、無禮をもえ憚らず、かくらうがはしき方に
 案内申しつるなり。」など、こまかにのたまへど、詞も續かず、たゞおしおてにさばかりな
 めりとききなざるゝに、御いきざしなどいとくるしけなるを、いと不便なるわざかなと思
 ひしに、風の御簾みすを吹きあけたりしはさまより見れしかば、さばかりのおもき病をうけ
 給ひてければ、いかでかは。御色もたがひて、きら、かにおはする人とおほえず、こと
 の外に不覺になり給ひにけりと見え給ひながら、長かるべきことも宣ひしなむ、あはれ
 なりとこそ、後にかたり給ひけれ。

この粟田殿の御男君達三人ぞおはせし。太郎君は福足君と申ししを、をさなき人は、さ
 のみこそはと思へど、いとあさましく、まさなくあしくぞおはせし。東三條殿の御賀に、
 此の君舞をさせ奉らむとて、ならばせ給ふほども、あやにくがりすまひたまへど、よろ
 つにおこづり、祈りをさへして、教へきこえさするに、その日になりて、いみじうしたて
 奉り給へるに、舞臺の上のほり給ひて、物の調子吹きいつるほどに、わざはひかな。「あ
 れは舞はじ。」とて、びんづらひきみだり、御装束をはらくとひきやり給ふに、粟田殿御
 色まあをにならせ給ひて、あれにもあらぬ御氣色なり。ありとある人、さおもへる事よと

○おりて 母屋から
 下りて。

○れうじ 打擲し。
 ○物はれて 腫物が
 出来て。

○檜綱代 檜の薄板
 で綱の目の様に編ん
 だもの。

見給へど、すべきやうもなきに、御をちの中關白殿道隆のの、おりて舞臺にのほらせ給へば、い
 ひおこづらせ給ふべきか、又にくさにえたへす追ひおろさせ給ふべきかと、かたく見侍
 りしほどに、この君を御腰のほどにひきつけさせたまひて、御てづからいみじく舞はせた
 まひしこそ、樂もまさりおもしろく、かの君の御恥もかくれ、其の日の興もことの外にま
 さりたりけれ。

祖父殿兼家もうれしとおほしたりけり。父おとゞはさらなり、よその人だにこそすゝろに感
 じ奉りけれ。かやうに人のため、なさけくしき所おはしましたるに、など御末かれさせ
 給ひにけむ。この君人しもこそあれ、蛇くちはれうじ給ひて、その崇りにより、かしらに物は
 れてうせ給ひにき。

此の御弟の二郎君、今の左衛門督兼隆卿は、大藏卿遠暲の女のはらなり。此の左衛門督の君
 達、男女あまたおはするなり。大姫君は三條院の三の御子敦平の中務の宮を、このきさら
 ぎかとよ、壻どり奉り給へるほどに、いとよき御中にておはすめり。また姫君なるおはす
 四人。

また粟田殿の三郎、前頭中將兼綱の君、其の君の祭の日調じたまへりし車こそいとをか
 しかりしか。檜綱代といふものはりて、的の形にいろどられたりし、車のよこさまのふち
 を弓の形にしたて、ふちをば矢の形にせられたりしさまの興ありしなり。和泉式部の君歌

○十つらのうまの歌
夫木集。第一句は
葵祭の時十人の無人
乗馬し社頭の馬場で
競走する事。

によまれて侍りき。
十つらのうまならねども君乗れば車もまに見ゆるものかな
さてよき風流と見えしかど、人の口やすからぬものにて、賀茂の明神の御矢めおひ給へ
りといひなしてしかば、いと便なくてやみにき。

○御矢めおひ給へり
其の軍的が御矢
疵を負ひ給へり。
○便なくてやみにき
つまらぬ事となつ
てしまった。

この君の頭かぶとられたまひし、いとみじう侍りし事ぞかし。頭になりて驚きよろこび給
ふべきならねど、あるべき事にてあるに、粟田殿あしたのが花山院はなやますかしおろし奉り、左衛門督さゑもん小
一條院いちじょうすかしおろし奉り給へり。帝東宮の御あたり近づかでありぬべき御族といふ事い
きにしぞかし。いと稀有に侍りきな。たれもきこしめし知りたることなれど、男君達かく
なり。

○頭かぶとられ 藏人頭
を取上げられ。
○あるべき事云々
當然頭たるべきに。
○帝東宮の云々
以上の如く此の一族は
帝東宮の近侍たれば
危しといふので頭を
免ぜらる。

女君は故一條院の御乳母めのとの藤三位の腹にいでおはしましたりしを、やがてその御時の倉
部屋くらべの女御にみと聞えし。後にこの大藏卿みくら通任の君の北の方にて、うせたまひにしぞかし。御
むかひばらに、神佛に申してはらまれ給へりし君、今の中宮なかつに、二條殿の御方とてこそは
さぶらひ給ふめれ。父殿ちち女子をほしがりて願をたてたまひしかど、御かほだにえ見奉り給
はずなりにき。かやうにあはれなる事どもの世に侍るぞかし。

○藤三位 師輔の四
女繁子。
○御後 死後。

その殿の御北のかた、粟田殿の御後は、堀河殿ほりがわの御子の左大臣さだの北の方にてこそは、年
ごろおはすとき奉りしか。その北の方は九條殿の御子の大藏卿みくらの君の女ぞかし。されば

○おぢられ 恐怖せ
られ。
○土殿 喪中に籠る
倚廬。
○興言し 面白く雑
談し。
○關白をもゆづらせ
云々 道兼に關白を
譲るべきに兄道隆に
譲りし恨みである。
○よづかぬ 世間並
ならぬ。
○孝じ 父の菩提を
弔ひ。

この粟田殿の御ありさま、殊の外にあへなくおはしましたしき。さるは御心いとなさけなく恐
ろしくて、人にはいみじくおぢられ給へりし殿の、あやしく末なくてやみ給ひにき。
此の殿父おとこの御いみには土殿つちのなどにもるさせ給はで、あつきにことつけて、御簾みすど
もあけ渡して、御念誦ねんずなどもし給はず。さるべき人々よびあつめて、後撰、古今ひろけて
興言きげんし遊あそびて、つゆなげかせ給はざりけり。その故は、花山院をば、われこそはすかしお
ろし奉りたれ。されば關白をもゆづらせ給ふべきなりといふ、御うらみなりけり。よづか
ぬ御事なりや。さまざまよからぬ御事ども聞えしを、傳殿でんこの入道殿にゅうだう二所は、如法にょぼうに孝けうじ
奉り給ひきとぞうけたまはりし。

下 卷

一 太政大臣道長

○從四位上行 位より官の卑い時は行書き、尊い時は守書く。

○さわがしきに 疾病流行をいふ。

○世のえ 世中の疾病。
○さしあはせ 死に合はせ。

このおとゞは、法興院のおとゞの御五男、御母は從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣の女なり。その朝臣は從二位中納言山蔭卿の七男なり。この道長の大臣は、今の入道殿下これにおはします。一條院三條院の御舅、當代東宮の御祖父にて坐す。此の殿宰相にはなり給はで、直に、永延二年正月二十九日、權中納言にならせ給ふ、御年二十三。その年上東門院生れ給ふ。正曆二年九月七日大納言にならせ給ふ。四月二十七日從

二位し給ふ、中宮大夫とぞ申しし。御年二十七。關白殿うまれ給ふ年なり。長徳元年乙未四月二十七日、左近衛の大將かけさせ給ふ。その年の祭の前より、世の中極めてさわがしきに、又の年はいとゞいみじくなり立ちにしぞかし。先づは大臣公卿多くうせ給へりしに、まして四位五位の程は數やは知りし。まづその年うせ給へる殿ばらの御かず、閑院の大納言殿は三月二十八日、中關白殿は四月十日、これは世のえにはおはします、只同じをりのさしあはせたりし事なり。小一條左大將濟時卿は四月二十三日、六條左大臣殿、

○あがりての世上古。
○かきはらひ 掻拂ひ。死ぬ意。
○御心もちるの云々 御心掛の賢くあつたならは。
○おのづからさても云々 自然關白は此の殿に移つた事であらう。
○緑子のやうなる殿 赤兒の様な伊周。
○ふりをこはは云々 瓜を人に乞ふなら之を入れる器物を用意せよ。重き官を望まよ其の器量あるべし。
○さるべき御次第云云 道長より前に道兼が關白となりしは當然の順序でさうあるべきなるに道兼が七日關白で夢の如く早く死せしは意外千萬なり。
○行末まぢつけさせ 將來の立身出世を期待される。
○外ざまもわかれず 子孫が續いて關白となり、今後も左様であらう。

栗田右大臣殿、桃園中納言保光卿、この三人は五月八日一度にうせ給ふ。山井大納言殿は六月十一日ぞかし。まだあらじ、あがりての世にも、かく大臣公卿七八人、二三月のうちにかきはらひ給ふ事。希有なりしわざなり。それまたゞこの入道殿の御幸の上をきはめ給へるにこそ侍るめれ。かの殿ばら次第のまゝに、久しく保ち給はましかば、いとかくしもやはおはしますまじ。まづは帥殿の御心もちるのさがくしくおはしますまじ、父おとゞの御病のほど、天下執行の宣旨くだり給へりしまゝに、おのづからさてもやおはしますまじ。それに又おとゞうせ給ひにしかば、いかでか緑子のやうなる殿の世の政し給はむとて、栗田殿にわたりにしぞかし。ふりをこははば、うつは者を設けよと申す事、まことにある事なり。さるべき御次第にて、それ又あるべき事なり。あさましく夢などのやうにとりあへずならせ給ひにし、これはあるべき事かはな。この今の入道殿その折大納言中宮大夫と申して、御年いと若く、行末まぢつけさせ給ふべき御齡の程に、三十にて四月二十七日に大將にならせ給ふ。五月十一日に官中雜事まづ内覽の、關白の宣旨承り給ひて、榮えそめさせ給ひにし。ぞかし。おなじとしの六月十九日に、右大臣にならせ給ひて、長徳二年七月二十日又左大臣にならせ給ひにき、そのまゝに外ざまもわかれずなりにしぞかし。今々もさこそは侍るべかんめれ。

○この殿は北の方云
 云 道長の北の方は
 倫子と明子。
 ○この宮々 彰子、
 研子、成子、嬉子。
 ○御母上 倫子。
 ○亭子の帝 宇多帝

この殿は北の方二所おはします。この宮々の御母上と申すは、土御門左大臣、源雅信の大臣の御むすめにおはします。雅信のおとゞは、亭子の帝の御子、一品式部卿の宮敦實親王の御子、左大臣時平のおとゞの御むすめの腹にうまれ給ひし御子なり。その雅信のおとゞの御女を今の入道殿下の北の政所と申すなり。その御はらに女君四所、男君二所おはします。その御有様は、只今のことなれば、皆人見奉り給ふらめど、ことばつゞけ申さむとなり。

第一の女君は、^{彰子}一條院の御時に、長保元年十一月一日御とし、十二にて女御に後一條まゐらせたまひて、又の年長保二年庚子二月二十五日、十三にて后に立ち給ひて、中宮と申ししほどに、うちつゞき男御子二人うみ奉り給へりしこそは、今のみかど東宮におはしますめれ。二所の御母后、太皇太后宮と申して、天下第一の母にておはします。

○枇杷殿 近衛南、
 室町東。
 ○三宮 太皇太后、
 皇太后、皇后。
 ○御封 封戸。
 ○この宮 枇杷殿。
 ○后二所 研子、嬉子

その御さしつぎの女君、^{研子}内侍のかみと申しし、三條院の東宮におはしまししにまゐらせ給ひて、宮位につかせ給ひしかば、長和元年二月十四日に、^{三條}后にた立せ給ひて、中宮と申しき、御年十九。さて又の年長和二年癸丑七月二十六日に、^{嬉子}女みこうまれさせ給へるこそは、三四ばかりにて一品にならせ給ひて今におはします。此の頃は、この御母宮を皇太后宮と申して、枇杷殿におはします。一品の宮は三宮になすらへて千戸の御封をえさせ給へば、この宮に后二所おはしますがごとくなり。

又次の女君、^{成子}これも内侍のかみにて今のみかど十一歳にて、寛仁二年戊午正月二日に御元服させ給ひて、その二月七日参り給ひて、同じき年の十月十六日に后にのりさせ給ふ。

四月二十八日女御の宣旨下されき。この日内裏つくりいだして渡らせ給ふ日なり。同じ年の七月二十九日、后に立て奉るべき宣旨ありき。使は源民部卿俊賢の君ぞし給ひし。中宮大夫にて坐せしかば、し給ひしにこそ待るめれ。只今の中宮と申して、うちにおはします。

又次の女君は、^{嬉子}これも内侍のかみ、十五に坐す。今の東宮十三にならせ給ふ年、安治元年二月一日、^{道長}まゐらせ給ひて、東宮の女御にて候はせ給ふ。登花殿にぞおはしましし。殿入道せしめ給ひて後の事なれば、今の關白殿の御女となづけ奉りてこそ

は参らせ給ひしか。今年は十九にぞならせ給ふ。妊じ給ひて七八月にぞあたらせ給へる。入道殿の御有様見奉るに、必ず男子にてぞ坐さむ。この翁らさらにも申しあやまち侍らじと、扇をたかくつかひつ、いひしこそをかしかりしか。女君達の御有様かくの如し。

男君二所と申すは、今の關白左大臣頼通の大臣と聞えさせて、天下を我儘にまつりごちておはします。御年二十六にてや、内大臣攝政にならせ給ひけむ。帝およすけさせ給ひしかば、寛仁三年十二月二十二日攝政の表奉らせ給ひて、同じき日關白の宣旨下りて、たゞ關白にて坐す。二十餘りにて納言などになり給ふをぞ、いみじき事にいひしかど、

○扇をたかくつかひ
 得意の様子をいふ
 ○およすけさせ 御
 成長せられ。
 ○攝政の表 攝政を
 辭する表。

○登花殿 弘徽殿の
 北十間四面。

○二人 攝關に次々人。

○二條殿 二條南東洞院の東。

○女の御幸ひ云々 後の位は女の最上の幸福であるが甚だ窮屈である。

○おほろ伊ならねは 非常の時ではなくは

○陣屋のぬれは云々 陣屋が据れば容易に女房を思ふ通りに

も仕ふ事は出来ぬ。

○唐の御車 唐風の御車。

○たばやすく 氣樂に。

○ゆかしう 見たく

○よそほしく 殿に

○はた申さず 又申すまでもなし。

今の世の御ありさまかく坐すぞかし。これを宇治殿と申す。御童名は鶴君なり。今一所は只今の内大臣にて、左大將かけて教通のおとと聞えさす。世の二人にておはしますめり。これは二條殿。御童名せや君ぞかし。

かかればこの北の政所の御さかえきはめさせ給へり。

女の御幸ひは北の政所きはめさせ給へり。あるは御門東宮の御母后とならせ給ひ、あるはわが御おや世の一人にておはするには、御子も生れさせ給はねども、后にるさせ給ふめり。

女の御さいはひは、后こそきはめておはします御事なめれ。されどそれはいと所せけにおはします。いみじきとみの事あれど、おほろけならねば、えうごかせ給はず。陣屋のぬれば、女房たはやすく心にまかせてもえ仕らず。かやうに所せけなり。

只人と申せど、御門東宮の御祖母にて、准三后の御位にて、千戸の御封えさせ給ふ。

年官年爵賜はらせ給ひ、唐の御車にていとたはやすく、御歩きなども中々御身やすらかに、ゆかしう思召しける事は、世の中の物見なにの法會やなどあるをりは、御車にても御さじきにて、必ず御覽すめり。内、東宮、宮々とあかれくよそほしくて坐せど、い

づかたにもわたり参らせ給ひては、さしならびおはします。只今三人の后、東宮の女御、關白左大臣、内大臣の御母、みかど東宮はた申さず、おほよそ世のおやにておはします。

○權者 神佛の化身
○御ながらひ 夫婦の御交情。

○いへはこそおろか いふまでもない。

○を三年 治安三年

○思はざる外の事 師尹の條に見えた謀叛を企てた謀で左邊

された事。

○もちる 自分の子にし。

○西宮殿 高明。

○故女院 圓融院后

諡子。

○壁代 壁の代りに垂れる几帳の類。

○おささせ 劣らせ

○下人 下部。

○おはしまさひし おはしまし。

○御せうこの殿はら 道綱、道隆、道兼等。

入道殿は申すもさらなり。大かたこの二所ながら、さるべき權者にこそおはしますめれ。御ながらひ四十年ばかりにやならせ給ひぬらむ、あはれにやんごとなきものに、かしづき奉らせ給ふといへばこそおろかなれ。世の中には古只今の國王大臣、みな藤氏にてこそおはしますに、この北の政所源氏にて御幸ひ極めさせ給ひにたる。をと年の御賀のありさまなどこそ皆人見き給ひし事なれど、なほかへすくもいみじく侍りしものかな。又高松殿の上と申すも、源氏におはします。延喜の皇子高明親王を 延喜二十年十月二十八日姓を賜はりて 左大臣 左大將 になし奉らせ給へりしに、思はざる外の事によりて、大臣とられて太宰の權の 帥にならせ給ひて、流され給ひし

いとく心うかりし事ぞかし。その御女におはします。それをかの殿筑紫におはしましたける年、この姫君まだいと幼くおはしけるを、御をちの十五の宮と申したるも、同じ延喜の皇子におはします、女子もおはせざりければ、この君を取り奉りて、養ひかしづき奉りて、もちるたまへるに、西宮殿も十五の宮もかくれさせ給ひに後に、故女院の后におはしましたしをり、この姫君を迎へ奉らせ給ひて、東三條殿の東の對に帳をたて、壁代をひきて、わが御しつらひに聊かおとさせ給はず、しすゑきこえさせ給ひ、女房、侍、家司、下人まで別にあちあてさせ給ひて、姫宮などのおはしまさひし如くに、限りなくおもひかしづき聞えさせ給ひしかば、御せうとの殿ばら、われも

○よしほみ 懸想し
○かしこく 殿しく

○あさはかに云々
淺慮で合點の行かぬ
事。

○みづからの菩提云
云 顯信自身の佛果
を得る事を祈るは勿
論の事。

○殿の御爲にも云々
子一人出家すれば
九族天に生ずといふ
事より斯くいふ。

○御法服 御袈裟。
○麻の御衣 黒染の
衣。

○わびさせ 道長が
困られ。
○御旧 御下著。

われもとよしほみ申し給ひけれど、后かしこく制し申させ給ひて、今の入道殿をぞゆるし
きこえさせ給ひければ、通ひ奉らせ給ひし程に、女君二所男君四所おはしますぞかし。
女君と申すは、今の小一條院の女御。今一所は、故中務卿の宮具平親王と申すは、村上
の七のみにおはしますしき。その御男君三位中將師房の君と申すを、隆姫今の關白殿の上
の御はらからなるゆゑに、關白殿御子にし奉らせ給ふを、入道殿むこどり奉らせ給へ
り。あさはかに心えぬ事とこそ世の人申ししか。殿の内の人もおほしたりしかど、入道殿
思ひおきてさせ給ふやうありけむかしな。

男君は大納言にて春宮大夫頼宗ときこゆる、童名石君。今一所はおなじ大納言中宮權大
夫能信と聞ゆる。今一所は中納言長家、御童名こわか君。

今一人右馬頭にて顯信とおはしき。御童名こけ君なり。寛弘九年壬子正月十九日入道
し給ひて、この十餘年は佛のごとくして行はせ給ふ。思ひかけずあはれなる御事なり。み
づからの菩提申すべからず、殿の御爲にも、また法師なる御子の坐さぬがくちをし、
事かけさせ給へるやうなるに、さればやがて一度に僧正になし奉らむとなむおほせられけ
るとぞ、うけたまはるを、いかゞ侍らむ。うるはしき御法服、宮々よりも奉らせ給ひ、殿
よりは麻の御衣奉るなるをば、あるまじき事に申させ給ふなるをぞ、いみじくわびさせ給
ひける。いでさせ給ひけるには、「緋の御柏の、あまたかさねて著たるなむうるさき。綿を

○そ、き 解き放し
○久しくもなりなむ
時間がかゝらう。

○心のいたりのなさ
よ 思慮の無さよ。
○こしもそれに云
云 綿人を奉りし爲
出家された様に思ひ

○やがてたえ入り云
云 少々正氣を失ひ
死人の様でありしを
○今更によしなし
今さら悲しむも詮な
し。

○つひの事 結局大
切な事。
○殿もうへも 道長
も高松の上も。

○なから 半は。
○これが 顯信出家
○ちがへさせ 夢違
へさせ。
○革堂 行願寺。
○山 比叡山。

一つに入れなして、一つばかりを著たらばや、しかせよ。」と、仰せられければ、「これから
そ、き侍らむもうるさきに、綿をあつくしてまるらせむ。」と申しければ、「それは久しくも
なりなむ。たゞとくと思ふぞ。」と仰せられければ、おほしめすやうこそはと思ひて、あま
たを一つに取り入れてまるらせたるを、奉りてぞ其の夜はいでさせ給ひける。

されば御乳母は、「かくて仰せられけるものを、何しにしてまるらせむ。例ならずあや
しと思はざりけむ心のいたりのなさよ。」と、泣き惑ひ給ひけむこそ、いとことわりにあは
れなれ。ことしもそれにまるらせ給はむやうに、かくとききつけ給ひては、やがてたえ入
りて、なき人のやうにておはしけるを、「かくきかせ給はば、いとほしとおほして御心やみ
だれ給はむと、今更によしなし。これぞめでたき事。佛にならせ給はば、わが御爲にも、
後の世のよくおはせむこそ、つひの事。」と人々のいひければ、「佛にならせ給はむうれし
からず。わが身の後の助けられ奉らむもおほえず。たゞ今の悲しさより外の事なし。殿も
うへも御子どもあまたおはしませばいとよし。たゞわれ一人が事ぞや。」とぞふしまろび給
ひける。けにさる事なりや。道心なからむ人は、後の世の事までもしるべきかはな。

高松殿の御夢にこそ左の方の御ぐしをうしろをなからより剃りおとさせ給ふと御覽じけ
るを、かくて後にぞ、これが見えけるなりけりと思ひ定めて、「ちがへさせ、祈りなどを
すべかりける事を。」と仰せられける。革堂にて御ぐしおろさせ給ひて、やがてその夜山へ

○かやうにてあるべき身 寒暑等は厭ふまじき身。
 ○いかで いかで堪にせん。
 ○さり奉り 堪に取り奉り。
 ○さればよ 果して然り。
 ○やくなし 無益だ。
 ○法師子 法師にした子。
 ○すまひしかほこそあれ 他の者が承知しなかつたからやめたのであつた。
 ○威儀僧 授戒の時授戒者に坐作進退の威儀を示し又法會の時衆僧の先に立ちて威儀を整ふる僧。
 ○有識 已講、内供、阿闍梨、僧正、僧都、律師、僧正、僧都、所司、上座、寺主、都那那。
 ○御みづからは云々 顯信は道長の様子を不本意に笑止千萬と思つた。

登らせ給ひけるに、「賀茂川わたりし程のいみじうつめたくおほえしなむ、少しあはれなりし。今はかやうにてあるべき身ぞかとおもひながら。」とこそ仰せられけれ。
 今の右衛門督ぞ、とくよりこの君をば出家の相こそおはすれと宣ひて、中宮權大夫殿の上實成に御消息きこえさせ給ひけれど、さる相ある人をばいかでとて、後に此の大夫殿をばとり奉りたまへるなり。正月に内よりいでたまひて、この右衛門督實成、「右馬頭の物見よりさしいでたりつるこそ、むげに出家の相ちかくなりにて見えつれ。いくつぞ。」とのたまひければ、頭中將能信、「十九にこそなり給ふらめ。」と申し給ひければ、「さては今年ぞし給はむ。」とありけるに、かくと聞きてこそ、「さればよ。」とのたまひけれ。相人ならねど、よき人はものを見給ふなり。

入道殿は、「やくなし。いたう歎きてきかれじ。心亂れせられむもこの人のたまにいとほし。法師子のなかりつるにいかゞはせむ。幼くてもなさむと思ひしかど、すまひしかばこそあれ。」とて、たゞ例の作法の法師の御定にもてななきこえ給ひき。受戒にはやがて殿登道長らせ給ふ。人々のわれもくんと御供にまゐり給ひて、いとよそほしけなりき。

威儀僧にはえもいはぬものどもえらせ給ひき。御さきに有識僧綱しきやうどものやん事なきさぶらふ。山の所司、殿の御隨身ども、人はらひの、しりて、戒壇にのほらせ給ひけるほどこそ、入道殿は見え奉らせ給はざりけれ。御みづからは本意なくかたはらいたしとおほした

○手輿 腰輿。
 ○白蓋 白張りの蓋
 ○戒和尚の一や 授戒する和尚の第一の者よ。
 ○さりとも云々 出家の身でも顯信は羨ましく聞かれし事と思ひしが。
 ○座しきそへられし 二人の座席を廣げられし。
 ○かやうの事たゞし 斯かる榮華は唯一瞬時の事。
 ○数のまゝに云々 一人も死せず。
 ○かたほ 不十分。
 ○もごかれ 非難され。
 ○こゝろ、他事。
 ○二人 倫子、高松の上。

りけり。座主覺の手輿たてにのりて白蓋しらばたさせてのほられけるほどこそ、あはれ天台座主戒和尚の一やと見えたまひけれ。世繼能信が鄰にはべるものの、そのきはにあひて見奉りけるがかり侍りしなり。春宮大夫殿賴宗、中宮權大夫殿能信などの大納言にならせたまひしをりは、さりともしきそへられしほどなど、かたり申ししかど、聊か御氣色かはらず念誦うちして、かやうの事たゞしばしの事なりとぞ、うちのたまはせしなむ、めでたく優におほえしとぞ、通任みちたねの君のたまひける。

この殿の君たち男女あはせ奉りて十二人數のまゝにおはします。男も女も御つかさ位こそ心にまかせ給へらめ。御心ばへ人がらどもさへ聊かかたほにて、もどかれさせ給ふべきもおはしませず、とりくくに有識いんせきにめでたくおはしませうも、たゞことくならず、入道殿の御幸ひのいふかぎりなくおはしますなめり。さきく殿の君たちおはせしかども、皆かうしもおもふさまにやはおはせし。おのづから男も女もよきあしきまじりてこそおはしませふめりしか。この北の政所の二人ながら、源氏におはしませば、末の世の源氏の榮え給ふべきと定め申すなり。かかればこの二所の御ありさま此の如し。

但し殿の御まへは三十より關白後一條させ給ひて、一條院三條院の御時、世をまつりごち、わがまゝにておはしまししに、又當代の九歳にて位につかせ給ひにしかば、御年五十一に

て攝政せさせたまふ年、わが御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をば頼通におとに譲り奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふに、寛仁三年己未 三月十八日夜中ばかりより胸や

ませ給ひて、わざとにはおはしませねど、いかゞ思召しけむ、俄に二十一日未の時ばかりに起きるさせ給ひて、御冠めし、搔練かきねりの御下襲に、布袴ほうこをさうぞかせ給ひて、御てうづめせば、何事にかと、關白頼通殿を始めて殿ばらも思召すに、寢殿の西の渡殿に出でさせ給ひて、南に向きて拜せさせ給ふ。春日の明神にいとま申させ給ふなりけり。

慶明僧都長義律師して、御ぐしおろさせ給ふ。關白殿を始めとして、公達殿ばらなど、いと淺ましと思召せど、おほしたちて俄にせさせ給ふ事なれば、たれ／＼もあきれて、え制し申させ給はず。あさましとはおろかなり。院源ふけん法印戒の師し給ふ。信惠僧都の袈裟をぞ奉りそめける、俄の事にてまうけさせ給はざりけるにや。御名行觀とぞつかせ給へりし。後にしもの文字かへて行覺とぞ侍りし。

かくて後にぞ、内、東宮の宮達にもかくと聞えさせ給ひける。聞きつけさせ給へる宮たちの御心ども、あさましがりさわぐとはおろかなり。申の時ばかり小一條院渡らせ給ひ、御門の外にて御車牛かきおろして引き入れて、中門の外にておりさせ給ひてこそはおはしましたか。よせておりさせ給はで、かしこまり申させ給ふ程、いともかたじけなくめでたき御ありさまなりしぞかし。宮たちもゆふさりこそは渡らせ給ひし

○布袴 袍に下襲指貫を著する事。

○よせておりさせ 車寄に車を寄せて下りさせ。

○中宮皇后宮 威子 研子。

○奈良 東大寺。

○三后 彰子、研子 威子。

○かんの殿 尚侍殿 後朱雀院の后妃子。

○すぢ 血統。

○楊貴妃 唐玄宗皇帝の妃。

○かなしき事 安祿山の亂の時玄宗は馬

腕で殺された事。

○王昭君 前漢の元

帝の宮人。

○上陽人 玄宗の宮

人。

○そほめられて ね

たまれて。

○七の後 大寶令後

宮制に「妃二員、夫

人三員、嬪四員。」

とあれど數合はず。

か。中宮皇后宮などは、一つ御車にてぞわたらせ給へりし。行啓のありさまも俄にて例の作法にも侍らざりけり。

同じき年の九月二十七日奈良にて受戒侍りき。かかる御ありさまにつけても、めでたき事どもの多く侍りしかど、皆人知り給へる事どもなれば、細かに申し侍らじ。

三月二十一日御出家し給へれど、なほ又同じき五月八日、准三宮の位にならせ給ひて、年官年爵えさせ給ふ。みかど東宮の御祖父三后、關白頼通左大臣、内大臣、あまたの納言の御父にて坐す。世をたもたせ給ふ事、かくて三十一年ばかりにやならせ給ひぬらむ。今年は滿六十におはしませば、かんの殿嬪子の御産の後に、御賀あるべしとぞ人申す。いかに又さまさまおはしませひて、めでたく侍らむすらむ。おほかた又世になきことなり。大臣の御むすめ三人、后にてさしならべ奉り給ふ事、あさましくけうの事なり。もろこしには

昔三千人の后おはしけれど、それはすちもたづねで、只かたちありと聞ゆるを、鄰の國まで擇びいだして、その中に楊貴妃ごときは、あまりときめきすぎてかなしき事あり。王昭君はえびすの申すに賜はりて、胡の國の人となり、上陽人は楊貴妃にそばめられて、帝に見え奉らで、春のゆき秋のすぐる事をも知らずして、十六にて参りて六十までありけり。かやうなれば三千人のかひなし。

我が國には七の後こそおはすべけれど代々に四人ぞ立て給ふ。この入道殿下の御一

つ門よりこそ、皇子太皇太后宮、皇子皇太后宮、皇子中宮三所出でおはしたれば、まことに希有の御幸ひなり。

皇子皇后宮一人のみ、すぢわかれ給へりといへども、それも貞信公の御末におはしませば、これをよそ人と思ひ申すべき事かは。しかれば只世の中は、この殿の御光りならずといふ事なきに、この春こそは、皇子うせ給ひにしかば、いと々々三后のみ世におはしますめれ。

この殿事にふれてあそぼせる詩、和歌など、居易、人丸、躬恆、貫之といふとも、え思ひよらざりけむとこそおほえ侍れ。春日の行幸は、さきの一條院の御時より始まれるぞかしな。それにまた後一條院當代をさなくおはしませども、かならずあるべき事にて、はじまりたる例になりたれば、上東門院大宮御輿にそひ申させ給ひておはします。めでたしなどいふも世の常なり。

すべらぎの御祖父にて、うちそひつかうまつらせ給へる殿の、御ありさま御かたちなどすこし世の常にもおはしませましかば、あかぬ事にや。そこら集まりたるるな世界の民百姓これこそは、たしかに見奉りけめ。たゞてんりんしやうわう轉輪聖王などは、かくやと、光るやうにおはしますに、佛見奉りたらむやうに、額に手をあててをがみまどふさまことわりなり。大宮の赤色の御扇さしかくして、御肩のほどなどは、すこし見えさせ給ひけり。かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御透き影もふたぎ、いかゞとこそは、もてかくし奉るに、こと

○皇后宮 皇子は濟時の女。
○貞信公 忠平。
○居易 白樂天。
○躬恆 凡河内躬恆
○はじまりたる例 一條院の初められたる例。
○すこし 少しでも
○轉輪聖王 三十二相を具し位に即く時天より輪寶を得之を旋轉して四方を降服する王。
○さしかくして 顔をかくして。
○つゆの御透き影も 云々 一寸した物の隙から見える姿もふさぎざんな姿かき氣をもむ程かくすが隠すにも際限あれは。

○なごかはともや云 云 差支ないと思召されたのであらう。

○そのかみやの歌 續古今集神祇部。

○くもりなき世の歌 同集同部。

○三笠山の歌 千載集神祇部。いそのかみはふるの枕詞。
○あがりても 上代も。
○こりては 於ては
○はえあるべきにて 見榮えある爲に。
○はやさせ 面目あらしむる様にさせ。

○御賀 六十の御賀

かぎりあれば、今日はよそほしき御ありさまも、少しは人の見奉らむも、などかはともやおほしめしけむ。殿も宮もいふよしなく御心ゆかせ給へりけることおしはかられ侍れば、殿、大宮に、

上東門院そのかみや祈りおきけむ春日野の同じ道にも尋ねゆくかな御かへし、

くもりなき世のひかりにや春日野のおなじ道にも尋ねゆくらむかやうに申しかはさせ給ふほどに、けにくときこえて、めでたく侍りしなかにも、大宮のあそぼしたりし、

三笠山さしてぞ來つるいそのかみふるきみゆきの跡をたづねてこれこそは翁らが心の及ばざるにや、あがりてもかばかりの秀歌えさぶらはじ。その日にとりては、春日の明神のよませ給へりけるとおほえ侍り。けふかかる事どものはえあるべきにて、先の一條院の御時にも、兼家大入道殿の行幸申し行はせ給ひけるにやとこそ心えられ侍れな。

大方さいはひおはしませむ人の和歌の道おくれ給へらむは、事のはえなくや侍らまし。この殿はをりふしごと、必ずかやうの事を仰せられて、ことをはやさせ給ふなり。ひととせの北の政所の御賀によませ給へりしは、

○ありなれし 馴れ
来りし。
○御うぶやしなひ
出産後三五七九日
に親族から産家に贈
物して祝意を表し賀
宴を開く事。
○おと宮 姪宮餅子

○影 公任の影。
○まことにこそ云々
言葉通り道長は公
任より遙かに出世せ
り。
○内大臣殿をたに云
云 公任は道長の子
敦通をすら近づき見
奉る事は出来ない。
○御まもりもこほき
御守神の力も強き
○しもつやみ 二十
日後の關。
○申しなり 話が落
ちて来る。

ありなれし契りはたえて今さらに心けがしに千代といふらむ
又この一品の宮の生れおはしましたりし御うぶやしなひ大宮のせさせたまへりし夜の御
歌は、聞き給へりや。それこそいと興あることを。たゞ人はおもひよるべき事にも侍らぬ
和歌の體なり。

おと宮のうぶやしなひを姪宮のしたまふみるぞ嬉しかりける
とかや、うけたまはりしとて、心よくゑみたり。

四條大納言の、かく何事もすぐれめでたくおはしますを、大入道殿「いかでかからむ、
うらやましくもあるかな。わが子どもの影だにふむべくもあらぬこそくちをしけれ。」と申
させたまひければ、中關白殿粟田殿などは、けにさもとやおほすらむと、はづかしけなる
御氣色にて、物ものたまはぬに、この入道殿は、いとわかうおはします御身にて、「影をば
ふまで面をやはふまぬ。」とこそおほせられけれ。まことにこそおはしますめれ。内大臣
殿をだに近くて見奉り給はぬよ。

さるべき人はとうより御心だましひのたけく、御まもりもこほきなめりと覺え侍るは。
花山院の御時に五月しもつやみに、さみだれもすぎて、いとおどろくしくかきみだれ雨
のふる夜、帝さうくしくやおほしめしけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはし
ましけるに、人々御物がたり申しなどし給ひて、昔おそろしかりける事どもなどに申しな

○むつかしけなる夜
恐ろしさうな夜。
○けしき覺ゆ 氣味
がわるい。
○さる所おはします
帝 斯様な事を好ま
れる帝。
○塗籠 周圍を厚く
壁で塗つた室。
○吉上 六衛府の下
役。
○照壁門 南面通門
○御手箱云々 帝の
御手箱中の小刀を戴
いて。
○にがむく云々
盪々ながら各お出掛
けになつた。
○子四つ 一時半過
右衛門の陣、宜秋
門の傍。
○承明門 紫宸殿の
正面。
○宴の松原 宜陽殿
北、掃部寮西、近衛
南、朱雀西。
○露臺 仁壽殿の西
北の屋根なき露臺。
○砌 踏石。
○身のさぶらはほ云
云 命あれはこそ御
奉公も出来る。

り給へるに、「こよひこそいとむつかしけなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしき覺ゆ。
まして物はなれたる所などいかならむ。さあらむ所に一人いなむや。」と仰せられるに、
「えまからじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなむ。」と申し給
ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興ある事なり。さらばいけ。道隆は豊樂院、道
兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ。」とおほせられければ、よその君たちは便なき事
をも奏してけるかなとおもふ。またうけたまはらせ給へる殿ばらは、御けしきはりて、
やくなしとおほしたるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、「私の從者をば具しさぶらは
じ。この陣の吉上まれ瀧口まれ、一人昭慶門まで送れとおほせごとたべ。それより内には
一人いり侍らむ。」と申し給へば、「證なき事。」とおほせらるゝに、けにとて御手箱におかせ
給へる小刀申して立ち給ひぬ。いま二所もにがむく各おはさふじぬ。子四つと奏してか
くおほせられ議するほどに、丑にもなりにけむ。

道隆は右衛門の陣よりいでよ、道長は承明門より出でよと、それをさへわかたせたまへ
ば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原の程に、そ
の物ともなき聲どものきこゆるに、すちなくてかへり給ふ。粟田殿は露臺の外までわな、
くわな、くおはしたるに、仁壽殿の東面の砌の程に、簾とひとしき人のあるやうに見え給
ひければ、物もおほえで、身のさぶらはほこそ、おほせ事も承らめとて、各たちかへりま

○さりけなく 平氣
で。

○高御座 大極殿内
の玉座。
○つれなく 平氣で

○つぎめて 翌朝。
○見たらび 見給ひ

○伴僧 導師に伴ふ
從僧。

るり給へれば、御扇をたきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかとおほしめすほどにぞ、いとさりけなく、事にもあらすけにて、まゐらせ給へる。「いかにいかに。」と問はせ給へば、いとどかに、御刀に削られたるものを、取りぐして奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」とおほせらるれば、「たゞにて歸りまゐりて侍らむは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南面の柱のものを削りてさぶらふなり。」とつれなく申し給ふに、いとあさましうおほしめさる。こと殿たちの御氣色は、いかにもなほなほらで、この殿のかくてまゐり給へるを、帝よりはじめ、感じの、しられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、ものもいはずさぶらひ給ひける。なほ疑はしくおほしめされければ、つとめて藏人して、削りくづをつかはして見よとおほせごとありければ、もていきておしつけて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。その削りあとは、いとけざやかに侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申ししかし。

故女院の御修法して、飯室權僧正のおはしましし伴僧にて相人のさぶらひしを、女房どものよびて相せられけるついでに、「内大臣殿はいかおはする。」と問ふに、「いとかしこうおはします。天下とる相おはします。中宮大夫殿こそいみじくおはしませ。」といふ。

又粟田殿を問ひ奉れば、「それもいとかしこうおはします。大臣の相おはします。又あはれ中宮大夫殿こそいみじうおはしませ。」といふ。また權大納言殿を問ひ奉れば、「それもい

○後ミ伊のなきなり
最後に至りて思ひ
を達する事が出来ぬ
○きはなく 際限な
く。

○毘沙門のいきほひ
勇猛の勢ひ。

○すがやかに 滞り
なく。

○御もてなし 御ふ
るまじ。
○うへの御ぞ 袍。

とやんごとなくおはします。いかづちの相なむおはする。」と申しければ、「いかづちはいかなるぞ。」と問ふに、「ひとときはは、いと高くなれど、後とけのなきなり。されば御末いかおはしまさむと見えたり。中宮大夫殿こそ限りなくおはしませ。」と、こと人を問ひ奉るたびに、此の入道殿を必ずひきそへ奉りて申す。「いかにおはすれば、かくたびごとは聞えたまふぞ。」といへば、「第一の相には虎子如渡深山峯なるを申したるに、聊かたがはせ給はねば、かく申し侍るなり。この譬は、虎の子のけはしき山の峯をわたるが如しと申すなり。御かたち容體は、たゞ毘沙門のいきほひ見奉らむやうにおはします。御相かくのごとしといへば、たれよりもすぐれ給へり。」とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせ給へる事やおはします。

伊周帥のおとぎの、大臣までかくすがやかに給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり。いかづちはおちぬれど、又もあがる物を、星のおちて石となるにぞたとふべきや。それこそ歸りあがることなけれ。

をりくにつけたる御かたちなどは、けにながきおもひいでとこそは人申すめれ。中にも三條院の御時、賀茂の行幸の日、雪のことのほかにいたう降りしかば、御單の袖をひきいでて、御扇をたかくもたせ給へるに、いと白く降りかゝりたれば、あないみじとて、うちはらせ給へりし御もてなしは、いとめでたくおはしまししものかな。うへの御ぞは黒き

○あはひに 其の間に。
○奉りしづめ 乗り静め。

○通氣し御心云々 始終びく／＼しては居られなかつた。

○時たがふる事なく 時間通りに。

○内々には云々 私の場合には憚りなくふるまひ給ふ。

○いま二つおこり もう二本負け。

○今二度のべさせ給へ もう二度射て勝負を決し給へ。

○同じものを中心云云 同じく的の真中にあたりしかな。

○わな／＼くけにや ふるへる故にや。

に、御ひとへぎぬは紅のはなやかなるあはひに、雪の色もてはやされて、えもいはずおはしましものかな。高名の某といひし御馬いみじかりし悪馬なり。あはれそれを奉りしづめ給へりしはや。三條院もその日の事をこそおほしめしいでおはしますなれ。御病のうちにも、「賀茂の行幸の日の雪こそわすれがたけれ。」と仰せられけむこそあはれに侍れ。

かく世間のひかりにておはします殿の、一年ばかり物を安からずおほしめしたりしよ。いかに天道御覽じけむ。さりながらも、いさ、か通氣し御心やはたうさせ給へりし。おほやけさまの公事作法ばかりには、あるべき程にふるまひ、時たがふる事なくつとめさせたまひて、内々には所もおき聞えさせたまはざりしぞかし。帥殿伊周の南の院にて、人々あつめて弓あそびしに、この殿わたらせたまへれば、おもひかけずあやしと、中關白殿おほし驚きて、いみじう饗應きやうおうし申させ給ひて下藤におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢かすいま二つおとり給ひぬ。關白殿また御前おまへにさぶらふ人々も、今二度のべさせ給へと申して、のべさせ給へりけるに、安からずおほしなりて、「さらばのべさせ給へ。」とおほせられて、又いさせ給ふとて、おほせらるゝやう、「道長が家より帝后たち給ふべきものならば、この矢あたれ。」と仰せらるゝに、同じものを中心なからにはあたるものは。

次に帥殿射たまふに、いみじう臆し給ひて、御手もわな／＼くけにや、的のあたりだにち

○無邊世界 はてもなき空。

○事にかくなりぬ 不愉快になつた。

○なにかいる云々 何の爲に射るか。射るな。

○けふに見ゆべき云云 今日に於てそれはわかる事ではないが道長の様子や又其の時言つた詞の趣から伊周は氣後れたらしい。

○石山 近江石山寺

○あない申し、物を申し入れ。

○やすからずおほせ給ふ 癪にさはれど。

○父大臣 道隆。

○大臣からむる人云云 左様に大臣を輕んずる人の運は今後よい事はない。

○河原 賀茂河原。

かくよらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。又入道殿い給ふとて、「攝政關白すべきものならばこの矢あたれ。」と仰せらるゝに、初めのおなじやうに的の割るゝばかりにいさせ給ひつ。饗應きやうおうしてもはやしきこえさせ給ひつる興もさめて、事にかくなりぬ。父おと伊周、帥殿に「なにかいる、ないそく。」と制し給ひて、ことさめにけり。入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。その折は左京大夫とぞ申しし。弓をいみじく射させ給ひしなり。又いみじくこのませ給ひしなり。 けふに見ゆべき事ならねども、

人の御様のいひいでさせ給ふ事のおもむきより、かたへは臆せられ給ふなめり。又故女院東三條の御石山詣でに、この殿は御馬にて帥殿は車にてまゐり給ふに、さはる事ありて、粟田口よりかへりたまふとて、院の御車のもとにまゐり給ひて、あない申し給ふに、

御車もとゞめたれば、ながえをおさへて立ち給へるに、入道殿は、御馬をおしかへして、帥殿の御うなじのもとに、いと近ううち寄せたまひて、「とくつかうまつれ、日のくれぬるに。」とおほせられければ、あやしくおほされて見かへり給へれど、驚きたる御けしきもなく、とみにものかせたまはで、「日くれぬ、とく／＼。」とそゝのかせ給ふを、いみじうやすからずおほせど、いかゞはせさせ給はむ、やをらたちのかせ給ひにけり。父大臣にぞ申させ給ひければ、「大臣からむる人のよきやうなし。」とぞのたまはせける。

三月上の巳の日の御はらへに、やがて逍遙し給ふとて、帥殿河原にさるべき人々あまた

○平張 日除等のため平に張つた幕。
 ○御車 道長の御車
 ○やりのけよ あちからへ車を去らせよ。
 伊周の詞。
 ○さうし給へれば 咎められるからして
 ○からうも ひびくも。
 ○らうたく 可愛がり。
 ○御かへり見あり 御世話する。
 ○女院 詮子。
 ○さりわき奉らせ 格別愛し。
 ○みかご 一條帝。
 ○皇后宮 伊周の妹
 ○ゆかりに 縁によりて。
 ○おのづから心え云 云 自然帝は左様に思召されたであらう甚だ道長を不満足に思さる。
 ○宣旨 關白の宣旨
 ○道理のまゝの御事 道長が關白たるは道理に従へる御事。

ぐしていでさせ給へり。平張どもあまたうちわたしたるおはし所に、入道殿もいでさせ給へる。御車をちかくやれば、「便なき事、かくなせそ、やりのけよ。」とおほせられるを、某丸といひし御車副の、「なに事のたまふ殿にかあらむ。かききうし給へれば、この殿は不運におはするぞかし。わざはひやく」とて、いたく御車牛をうちて、いますこし平張のもとちかくこそ、つかうまつり寄せたりけれ。「からうもこの男にいはいぬるかな。」とぞ仰せられける。さてその御車副をばいみじくうたくせさせ給ひ、御かへり見ありしかば、かやうの事にてこの殿たちの御中いとあしかりき。

女院は入道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじうおもひ申させ給へりしかば、帥殿はうとうとしくもてなさせたまへりけり。みかど皇后宮をねんごろにときめかせ給ふゆかりに、帥殿はあけくれ御前にさぶらはせ給ひて、入道殿をばさらにも申さず、女院をもよからず事につれて申させ給ふを、おのづから心えやせさせ給ひけむ、いとほいなき事におほしめしける、ことわりなりな。

入道殿の世をしらせたまはむことを、帝いみじうしづらせ給ひけり。皇后宮定子とおはしまさで、よの中をひきかはらせ給はむことを、いと心ぐるしうおほしめして、粟田殿道隆にも、とみにやは宣旨せんじくださせ給ひし。されども女院の道理のまゝの御事をおほしめし、また帥殿をば、よからず思ひきこえさせ給ひければ、入道殿の御事をいみじうしづらせ給

○大臣こえられ 道長が伊周に大臣を越えられ。
 ○これにしも云々 道長を關白にしないのは。
 ○わたらせ 帝が女院の許へ御出掛け。
 ○われ夜の御殿にいらせ 女院自身が帝の御寢所に入らせ。

○つやめかせ つやつや光り。
 ○此の世ならず侍る 宿縁なり。
 ○御骨をさへ云々 女院の御骨を類にかけて木幡に葬つた。
 ○きよくき 物を臺ふる貌。

ひけれど、女院いかでかくはおほしめしおほせらるゝぞ。大臣こえられたる事だに、いといとほしく侍りしに、道隆父おとゝのあながちに侍りしことなれば、いなびさせ給はずなりにしにこそ侍れ。粟田のおとゝにはせさせ給ひて、これにしも侍らざらむは、いとほしさよりも、御爲なむいと便なく、世の人もいひなし侍らむ。」など、いみじう奏せさせたまひければ、むづかしうや思召されけむ、後にはわたらせ給はざりけり。さればうへの御局にのほらせ給ひて、こなたへとは申させ給はで、われ夜の御殿にいらせ給ひて、なくく申させ給ふ。

その日は入道殿は、上の御局にさぶらはせ給ふ。いとひさしういでさせ給はねば、御胸つぶれさせ給ひけるほどに、とばかりありて、戸をおしあけてさしいでさせ給へりける。御顔はあかみぬれつやめかせたまひながら、御口は心よくゑませ給ひて、「あはや宣旨くだりぬ。」とこそ申させ給ひけれ。いさゝかの事だに、みな此の世ならず侍るなれば、いはむやかばかりの御ありさまは、人のともかくもおほしおかむによらせ給ふべきにもあらねども、いかでかは院東三條をおろかにおもひ申させ給はまし。そのなかにも道理すぎてこそは報じ奉りつかうまつらせ給ひしは、御骨をさへこそはかけさせたまへりしか。

道隆中關白殿粟田殿うちつゞきうせさせ給ひて、入道殿に世のうつりしほどは、さも胸つぶれて、きよくきとおほえ侍りしわざかな。いとあがりての世はしり侍らず。翁物おほえて

○十年とおはする云 攝關で十年生きた人は近頃ないから
○さりとあへず 早くも。
○さるべくあるやう 然るべき宿縁。

○中臣鎌足の連 中臣は氏、鎌足は名、連は姓。

○わが女御 與志古娘。

○男一人 意美麻呂は定惠の誤。
○大友の皇子 天武天皇とせは誤り。

○字合、麻呂 不比等の子の誤り。

○いではじめ 祖先
○天の川をかきながすやう 停滯なき喻
○佛在世の淨名居士 釋迦在世時の維摩詰。
○智者は千の云々 史記韓信傳「智者千慮必有二失。」

後は、かかる事さぶらはぬものをや。今の世となりては、一の人の貞信公小野宮殿をはなち奉りては、十年とおはする事のちかくは侍らねば、この入道殿もいかとおもひ申し侍りしに、いとゞかかる運におされて、御兄たちは、とりもあへずほろび給ひしにこそおはしますめれ。それもまたさるべくあるやうあることを、みな世はかかるなめりとぞ人々おほしめすとて、ありさまをすこし又申すべきなり。

世の中のみかど、神の代七代をばさる物にて、神武天皇よりはじめ奉りて、三十七代にあたり給ふ孝徳天皇の御代よりこそは、さまざまの大臣さだまり給ふなれ。たゞしこの御時中臣鎌足の連と申して内大臣になりはじめたまふ。

そのおとゞは常陸の國にてうまれたまへりければ、三十九代にあたり給へる御門天智天皇と申す、その御門の御時にこそ、この鎌足のおとゞの御姓藤原と改まり給ひたれ。されば世の中の藤原の始めは、内大臣鎌足のおとゞをし奉れり。その末々より多くのみかど、后、大臣、公卿さまざまになりいで給へり。たゞしこの鎌足の大臣を、この天智天皇いとかしこくときめかしおほして、わが女御一人を此の大臣にゆづらしめ給ひつ。その女御ただにもあらず孕み給へりければ、御門のおほさしめ給ひたるやう、この女御の孕める子、男ならば大臣が子とせむ、女ならば朕が子とせむとおほして、かのおとゞにおほせられけるやう、「男ならば大臣の子にせよ、女ならばわが子にせむ。」と契らしめたまへりけるに、

この御子男にてうまれ給へりければ、内大臣の御子としたまふ。

この大臣はもとより男一人女一人をぞもち奉り給へりける。この御はらにさしつゞき女二人男二人うまれ給ひぬ。その姫君、天智天皇の皇子大友の皇子と申ししが、太政大臣

臣の位にて、次にはやがて同じ年の内に帝となり給ひて 天武天皇と申しける帝の女

御にて、二所ながらさしつゞきおはしけり。おとゞのもと太郎君をば、中臣意美麻呂とて、宰相までなり給へり。天智天皇の御子のはらまれ給へりし、右大臣までなり給ひて、藤原不比等のおとゞとて坐しけり。うせたまひてのち、贈太政大臣になり給へり。鎌足のおとゞの三郎は字合とぞ申しける。四郎は麻呂と申しき。この男君だちみな宰相ばかりまでぞなり給へる。かくて鎌足のおとゞは、天智天皇の御時、藤原の姓賜はり給ひし年ぞうせさせ給ひける。内大臣の位にて二十五年ぞ坐しける。太政大臣になり給はねど、藤原氏のいではじめのやんごとなきによりて、うせ給へる後の御いみな淡海公と申しけり。

この繁樹がいふやう、「大織冠をばいかでか淡海公とは申さむ。大織冠は大臣の位にて二十五年、御年五十六にてなむかくれおはしましたしける。ぬしのたまふことも、天の川をかきながすやうに侍れど、をりくかかるひが事ぞまじりたる。されどもたれか又かうはかたらむな。佛在世の淨名居士とおほえ侍るものかな。」といへば、世繼がいはいはく、「むかしから國に孔子と申す物識りののたまひけるやう侍り。『智者は、千のおもひはかりはかならず

○しか、然り然り。

一つあやまちあり。』となむあれば、世繼とし百歳におほくあまり、二百歳に足らぬほどにて、かくまではとほすがたりを申すは、むかしの人にもおとらざりけるにやあらむとなむおほゆる。』といへば、繁樹一しかく、まことに申すべき方なくこそけうありおもしろくおほえ侍れ。』とて、かつは涙をおしのごひなむ感ずる、まことにいひてもあまりにぞおほゆるや。

○御名よりはじめ御名からして。

御子の右大臣不比等のおと、實は天智天皇の御子なり。されど鎌足のおと、の二郎になり給へり。この不比等のおと、の御名よりはじめ、なべてならずおはしましけり。ならびひとしからずとつけられ給へる名にてぞこのもじは侍りける。此の不比等の大臣の御男君たち二人ぞおはしける。太郎は武智麿むちまろときこえて、左大臣までなり給へり。二郎は房前ふさきと申して、宰相までなり給へり。

○高野の女帝 孝謙天皇。
○二度位につかせ

この不比等の大臣の御むすめ二人おはしけり。宮子娘一所は聖武天皇の御母后光明皇后とぞ申しける。今一所の御女安宿媛は聖武天皇の女御にて女親王なごうをぞうみ奉り給へりける。女親王を聖武天皇、女帝にする奉り給ひてけり。此の女帝をば高野の女帝と申しけり。二度位につかせ給ひたりける。
さて不比等の大臣の男子二人又御弟二人とを四家となづけて、みな門わかちたまへりけり。その武智麿むちまろをば南家と名づけ、二郎房前ふさきをば北家と名づけ、御はらからの宇合うまがひの式部

○人ならぬ程の云々 普通の人でない等 落した者達は衰微した家の子孫であらう

卿をば式家と名づけ、その弟の麻呂あそをば京家と名づけ給ひて、これを藤氏の四家とは名づけられたるなりけり。此の四つの家よりあまたのさま、の國王大臣公卿おほくいで給ひて榮えおはします。しかあれど北家の末、今に枝ひろごり給へり。その御つゞきをまた一筋に申すべきなり。絶えにたるかたをば申さじ。人ならぬ程のものどもは、その御末にもや侍らむ。

此の鎌足の大臣よりの次々頼通今の關白まで十三代にやらせ給ひぬらむ。その次第を聞しめせ。藤氏と申せば、たゞ藤原をばさいふなりとぞ人はおほさるらむ。さはあれど、本末しることは、いとありがたきことなり。

一 内大臣鎌足の大臣、藤原の姓賜はり給ひての年の十月十六日にうせさせ給ひぬ、御年五十六。大臣の位にて二十五年。此の姓のいでくるを聞きて、紀氏の人のいひける、「藤か、りぬる木は枯れぬるものなり。今ぞ紀氏はうせなむする。」とぞのたまひける。まことにこそしか侍るめれ。

この鎌足の大臣の病づき給へるに、昔この國に佛法ひろまらず、僧などは、たはやすく侍らずやありけむ、聖徳太子傳へ給ふといへども、この頃だに生れたるちごも、法華經をよむと申せど、まだよまぬもはべるぞかし。百濟國よりわたりたりける尼して、維摩經供養したまへりけるに、御こ、ち一度はおこたりて侍りければ、その經をいみじきものにし

○紀氏 屋主忍雄建 猪心命の後で藤氏の 勢ひを得る以前は重 要の家柄。
○藤か、りぬる木 藤原氏に壓倒された 紀氏の意。

○維摩會 陰曆十月十日より十六日まで奈良の興福寺で維摩經を講ずる法會。

○大炊の天皇 淡路の廢帝とも稱し奉り淳仁天皇。

○あかしたれば 説明したれば。

○南圓堂 興福寺内にあり。
○不空罽索觀音 生死の大海に妙法蓮華の餌を下し心念不空の索を以て衆生の魚を釣取し菩提の彼岸に送る觀音。
○ふくゑんさく 不空罽索。

給ひけるまゝに、維摩會は侍るなり。

一 鎌足の大臣の御次郎右大臣正一位不比等、大臣、御年六十二、養老四年八月三日うせ給ふ。大臣の位にて十三年、贈太政大臣にならせ給へり。元明天皇元正天皇の御時二代。

一 不比等の大臣の御次郎房前、宰相にて二十年、大炊の天皇の御時天平寶字四年庚子八月七日贈太政大臣になり給ふ。元正天皇聖武天皇二代。この間宰相にて天平九年四月十七日にうせ給ひにき。

一 房前のおとゝの四男眞楯の大納言、稱徳天皇の御時、天平神護二年三月十五日にうせ給ふ、御年五十二。贈太政大臣公卿にて七年。

一 眞楯の大納言の御二郎右大臣從二位左近衛大將内膳の大臣、御年五十七。公卿にて二十年、大臣の位にて七年、贈從一位左大臣。桓武天皇平城天皇の二代にあひ給へり。

一 内膳の大臣の御三郎冬嗣の大臣は、左大臣までなりたまへり。贈太政大臣。この殿より次さまゝあかしたればこまかに申さじ。鎌足の御代より榮えひろがり給へる、御末末やう／＼うせ給ひて、この冬嗣のほどは、むけに心細くなり給へり。その時は源氏のみぞ、さまゝ大臣公卿にておはせし。それにこの大臣なむ南圓堂をたてて丈六の不空罽索觀音をすゑ奉り給ふ。さてやがてふくゑんさく經一千卷供養し給へり。今にその經ありつゝ、藤氏の人々とりて守りにしあひ給へり。その佛經の力にこそ侍るめれ。またさかえて、帝の御後見今にたえず、末々せさせ給ふめるは。その供養の日ぞかし。こ

と姓の上達部あまた、日のうちうせ給ひにければ、まことにや人々の申すめり。

○まことにや 供養の爲に死んだまは事實であらうか。

○かしこき御事 めでたき御事。

○母は申さぬ事なれど 母はいふまでもなき事なれど。母は爲平親王の御子左兵衛督憲定の女。

○人がらいさしも云 人柄が甚だ世人からよく思はれなかつたが元來貴人であるのに。

○なきあと 死後。
○みどりこ 嬰兒と松の緑を掛く。

- 一 冬嗣大臣の御太郎長良の中納言は、贈太政大臣までなりたまへり。
- 一 長良大臣の御三郎基經おとゝは、太政大臣までなりたまへり。
- 一 基經大臣の御四郎忠平おとゝは、太政大臣まで成り給へり。
- 一 忠平大臣の御二郎師輔の大臣は、右大臣まで成り給へり。
- 一 師輔大臣の御三郎兼家の大臣は太政大臣まで。
- 一 兼家大臣の御五郎道長の大臣は太政大臣まで。

一 道長大臣の御太郎只今の關白左大臣頼通のおとゝこれにおはします。此の殿の御子の今までおはしませざりつるこそ、いと不便に侍りつるを、此の若君のうまれ給へる、いとかしこき御事なり。母は申さぬ事なれど、これはいとやんごとなくさへおはするこそ。故左兵衛督は人がらいさしもおもはれ給はざりしかど、もとのあて人におはするに、又かく世をひゝかす御孫のいでおはしましたる、なきあとにもいとよし。七夜の事は入道殿させたまへるにつかはしける歌、

としをへてまちつる松のわか枝にうれしくあへる春のみどりこ

みかど東宮をはなち奉りては、これこそ孫のをさとて、やがて御童名を長君とつけ奉らせ給ふ。この四家の君たち、昔も今もあまたおはします中に、みちたえずすぐれ給へるはかくなり。

○御幣の使 奉幣使
○ふり奉りて 遷座し奉りて。
○男女つかひに 男女の使。

○この京 長岡の京
○大原野 大和國。

○なほし しは強め

○吉田 山城國。
○山陰の中納言 高房の子。

その鎌足の大臣のうまれ給へるは、常陸の國なれば、かしこに鹿島といふ所に、氏の御神をすましめ奉り給ひて、その御時より今にいたるまで、あたらしき御門后大臣立ち給ふ折は、御幣の使ならず立つ。帝奈良におはしましし時に鹿島遠しとて、大和國三笠山にふり奉りて、春日明神と名づけ奉りて、今に藤氏の御氏神にて公家男女つかひにたてさせ給ひ、后宮、氏の大政公卿みな此の明神につかうまつり給ひて、二月十一月上の申の日御祭にてなむ、さまざまの使たちの、しる。

帝この京にうつらしめ給ひては、又近くふり奉りて、大原野と申す。きさらぎの初卯の日、霜月の初子の日と定めて、年に二度の御祭あり。又同じく公家の使たつ。藤氏の殿原みなこの神に御てぐら十列奉り給ふ。なほし近くとて、又ふり奉りて、吉田と申しておはしますめり。この吉田明神は、山陰の中納言のふり奉り給へるぞかし。御祭の日、四月下の子、十一月下の中の日と定めて、我が御族にみかど后宮たちたまふものならば、おほやけまつりになさむと誓ひ奉りたまへれば、一條院の御時より、おほやけ祭にはなりたるなり。

○多武峯 大和國吉田山。
○三昧行ひ 一心に稱名念佛を行ひ。
○山階寺 山城國山科村陶原。
○長者殿 氏族中の長。
○年のあたり給ふ殿 役年に當れる殿方。
○御物忌をかきて 物忌に記した札を。
○一の所 攝關即ち氏の長者。
○かの寺 山階寺。
○會 雜摩會。
○八省 八省院即ち大極殿。
○奈良方 興福寺。
○御齋會 御佛會。
○加供 供養に加はる。
○藥師寺 奈良。
○最勝會 最勝王經を講ずる法會。
○袈つかはす 祿を授け給ふ。
○袈を人々に與ふ 袈を人々に與ふ。
○三會 雜摩會、最勝會、御齋會。
○その次第をつくりて 其の順序によりておきつ。拾に置く。

又鎌足大臣の御氏寺、大和國多武峯につくらしめ給ひて、そこに御骨ををさめ給ひて、今に三昧行ひ奉り給ふ。不比等大臣は、山階寺を建立せしめ給へり。それによりかの寺に藤氏をいのり申すに、この寺ならびに多武峯、春日、大原野、吉田に、例にたがひあやしき事いできぬれば、御寺の僧、禰宜などおほやけに奏し申して、その時に藤氏の長者殿うらなはしめ給ふに、御つ、しみあるべきは、年のあたり給ふ殿ばらたちの御もとに、御物忌をかきて、一の所よりくばらしめ給ふ。おほよそかの寺よりはじまりて、年に二三度會を行はる。正月八日より十四日まで、八省にて奈良方の僧を講師として、御齋會を行はしむ。おほやけよりはじめ、藤氏の殿ばらみな加供し給ふ。また三月七日よりはじめて、藥師寺にて最勝會七日、又山階寺にて十月十日より雜摩會七日。みなこれらの度に救使下向して袈つかはす。藤氏の殿ばらより五位まで奉り給ふ。南京の法師、三會講師しつれば、已講となづけて、その次第をつくりて、律師僧綱になる。かかれればかの御寺いかめしうやんどなき所なり。いみじき非道の事も、山階寺にかかりぬれば、又ともかくも人もものいはず、山しな道理とつけておきつ。かかれれば藤氏の御ありさまたぐひなくめでたし。

同じ事のやうなれど、又つゞきを申すべきなり。后宮の御父帝のおほちとなり給へるたぐひをこそはあかし申さめとて、

○御母をば光明皇后
宮子娘の誤り。

一 内大臣鎌足のおとゞの御女二人やがてみな天武天皇に奉り給へりけり。男女親^{みこ}またちおはしませど、みかど東宮たたせ給はざめり。

一 贈太政大臣不比等のおとゞの御女二所、一人の御女^{宮子}は、文武天皇の御時の女御、みこ生まれたまへり。それを聖武天皇と申す。御母をば光明皇后と申しき。いまひとりの御女^{安宿}はやがて御をひの聖武天皇に奉りて、女みこうみ奉り給へるを、女帝に立て奉り給へるなり。高野^{孝謙}の女帝と申す、これなり。四十六代にあたり給ふ。それおり給へるに、又帝ひとりをへだて奉りて、又四十八代にかへり給へるなり。御母后を贈皇后と申す。しかれば不比等の大臣の御女二人ながら后にましますめれど、高野の女帝の御母后は贈后と申したるにて、おはしまさぬ世に后宮にゐたまへると見えたり。

かるがゆるに不比等大臣は光明皇后また贈后の父、聖武天皇ならびに高野の女帝の御おほぢ。

- 一 贈太政大臣冬嗣のおとゞは、太皇太后順子の御父、文徳天皇の御祖父。
- 一 太政大臣良房のおとゞは、皇太后宮明子の御父、清和天皇の御おほぢ。
- 一 贈太政大臣長良のおとゞは、皇太后宮高子の御父、陽成天皇の御祖父。
- 一 贈太政大臣總繼のおとゞは、贈皇太后宮澤子の御父、光孝天皇の御おほぢ。
- 一 内大臣高藤のおとゞは、皇太后宮胤子の御父、醍醐天皇の御おほぢ。

○さりやきこしめし
あつめよ さあしつ
かり聞きなさい。

○極樂寺 山城國深
草村。

○法性寺 置茂河原
東五條南。

○標嚴院 横川^ヲ

○大安寺 百濟寺。

○都率天 三十三天
の^一で彌勒の居る所

○うつつつくりま
ねて造り。

○西明寺 唐高宗の
建立。

一 太政大臣基經のおとゞは、皇后宮穩子の御父、朱雀村上二代の御祖父。

一 右大臣師輔のおとゞは、皇后宮安子の御父、冷泉院ならびに圓融院の御祖父。

一 太政大臣伊尹のおとゞは、贈皇后宮懷子の御父、花山院の御祖父。

一 太政大臣兼家のおとゞは、皇太后宮詮子また贈后超子の御父、一條院三條院の御祖父。

一 太政大臣道長のおとゞは、太皇太后宮彰子、皇太后宮嬬子、中宮威子、東宮の御息所^{嬬子}の御父、常代^{後一條}並に東宮の御祖父におはします。こゝらの御中に后三人並べ^{後朱雀}すゑて見奉らせ給ふ事は、入道殿下より外に聞えさせ給はざめり。關白左大臣、内大臣、大納言二人、^{長家}中納言の御おやにておはします。さりやきこしめしあつめよ。日本國には唯一無二におはします。

まづは造らしめ給へる御堂などのありさま、鎌足のおとゞの多武峯、不比等の大臣の山階寺、基經のおとゞの極樂寺、忠平のおとゞの法性寺、九條殿の標嚴院、^{聖武}あめのみかどの造り給へる東大寺も、佛ばかりこそは大きにおはしますめれど、なほこの無量壽院にはな^{法成寺}らび給はず。ましてこと御寺々はいふべきならず。大安寺は都率天の一院を、天竺の祇園精舎にうつしつくり、天竺の祇園精舎を、^{もろこし}唐の西明寺にうつしつくり、もろこしの西明寺の一院を、この國のみかどは大安寺にうつさしめ給へるなり。

○猛なれど 盛大なれど。
 ○天王寺 四天王寺
 ○七大寺 東大寺興福寺元興寺大安寺藥師寺西大寺法隆寺。
 ○十五大寺 上の外新薬師寺大后寺不退寺京法花寺超證寺招提寺寶鏡寺弘福寺。
 ○淨妙寺 山城國木幡。
 ○わが身おもふさま云々 我出世したらば。
 ○三昧堂 法華三昧堂。
 ○おほしめしよらむはご 寺建立を志す事は。
 ○深草 仁明天皇。
 ○芹川 山城國鳥羽附近。
 ○わらは殿上 名家の子弟で殿上を許されること。
 ○大事 大變な事。

しかれども只今はなほこの無量壽院まさり給へり。南京のそぼくの多かる寺どもなほあたり給ふなし。恆徳公爲光の法住寺いと猛なれど、なほ此の無量壽院すぐれたまへり。難波の天王寺など、聖徳太子の御心に入れつくり給へれど、なほこの無量壽院まされり。奈良は七大寺十五大寺など見くらぶるに、なほこの無量壽院いとめでたく、極樂淨土のこの世にあらはれけるよと見えたり。かるがゆゑに、此の無量壽院も思ふにおほしめし願する事侍りけむ。淨妙寺は東三條のおとゞの大臣になり給ひて、御慶びに木幡に参らせ給へりしに、御供に入道殿具し奉らせ給ひて御覽するに、多くの先祖の御骨おはするに、鐘の聲きき給はぬ、いとうき事なり。わが身おもふさまになりたらば、三昧堂たてむと、御心のうちにおほしめし企てけるとこそ、うけたまはれ。

昔もかかりける事多く侍りける中に、極樂寺、法性寺ぞいみじく侍るや。御年などもおとなびさせ給へるだにも、おほしめしよらむほど、なべてならずおほえ侍るに、いづれの御時とはたしかにえきき侍らず、たゞ深草の御ほどにやなどぞ思ひやられ侍る。

芹川せりの行幸みゆきせしめ給ひけるに、昭宣基經公わらは殿上にてつかうまつらせ給へりけるに、みかど琴をあそばしける。この琴ひく人は、別の爪つくりて指にさし入れてぞ、ひくことに侍りし。さてもたせ給ひたりけるを、おとしおはしまして、大事におほしめしけれど、又つくらせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにてぞおほしめしよりけむ。おとなし

○おとなしき人々 大人連。
 ○はかりとも 目あてとして。
 ○いみじう 甚だ辛く。
 ○一伽藍 一寺。
 ○さるべきにて 前世の因縁で。

○て、ご 父。
 ○堂所 寺を建てるによい所。
 ○さしいでて 車より出て。
 ○まし 汝。
 ○そこに 深草に。

○飯室 江州にありて横川の別房。
 ○のほらせ 師輔が天地にうけられ天地の神に信認され

き人々にもおほせられずて、幼くおはします君にしも、「もとめてまるれ。」とおほせられければ、御馬をうちかへしておはしましたけれど、いづくをはかりとも、いかでかは尋ねさせ給はむ。見付けて参らせざらむ事の、いとみじうおほしめしければ、これ求めいでたらむ所には、一伽藍をたてむと、願じおほして、求め給ひけるにいできたる所ぞかし。極樂寺は、幼き御心にいかでおほしめしよらせ給ひけむ。さるべきにて御爪もおち、幼くおはします人にも仰せられけるにこそは侍りけむ。

扱忠平やんごとなくならせ給ひて、御堂たてさせにおはします御車に、貞信公はいとちひさくて具し奉り給へりけるに、法性寺の前わたり給ふとて、て、ごに、「こ、こそよき堂所なめれ。こ、にたてさせ給へかし。」ときこえさせ給ひけるに、いかに見てかくいふらむとおほして、さしいでて御覽すれば、まことにいとよく見えければ、幼き目にいかでかく見つらむ、さるべきにこそあらめとおほしめして、「けにいとよきところなめり。ましが堂をたてよ。われはしかくの事のありしかば、そこにたてむするぞ。」と申させたまひける。さて法性寺はたてさせ給ひしなり。

又九條殿の飯室のことなどはいかにぞ。横川よかはの大僧正慈恵の御房にのほらせ給ひし御ともには、繁樹参りて侍りき。かやうの事ども聞き、見給ふれど、なほこの入道殿世にすぐれぬけいでさせ給へり。天地にうけられさせ給へるは、この殿こそおはしませ。何事も行はせ

- 二三日かねて 二三日前から。
- さがなめ ひが日
- 御霊會 六月十四日の祇園祭。
- 野山の草をだにやは刈らせし やはは感動詞。
- おももの 食物。
- 里の刀禰 里長。
- 村の行事 村の庶務を取る役人。
- 火祭 鎮火祭。
- せめし事 せびつた事。
- わかえ 若くなり
- この中頃 自分等の中頃。
- 彌勒の世 彌勒菩薩が都率天から人界に下り人天を化益し給ふ世。
- 夫 人夫。

給ふをりに、いみじき大風ふき長雨ふれども、まつ二三日かねて空はれ、土乾くめり。かかれば、或は聖徳太子の生れ給へると申し、あるひは弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給ふとも申すめり。けにそれは翁らがさがなめにも、只人とは見えさせ給はざめり。なほ權者にこそおはしますべかめれとなむ、仰ぎ見奉る。かかればこの御世のたのしき事かぎりなし。

そのゆゑは、昔は殿ばら宮ばらの馬飼牛飼、なにの御靈會、祭の料とて錢紙米などこひの、しりて、野山の草をだにやは刈らせし。仕丁おものもち出でて、人の物とりうばふ事のたえにけり。また里の刀禰、村の行事いできて、火祭やなにやと、わづらはしくせめし事、今はきこえず。かばかり安穩泰平なる時にはあひなむやおもふは、翁らがいやしき宿りも帯紐をとき、門をだにささで、やすらかにのび臥したれば、年もわかえ、命ものびたるぞかし。

まづは北野賀茂河原につくりたる豆、さ、け、瓜、なすびといふもの、この中頃はさらに術なかりし物をや、この年頃はいとこそ樂しけれ。人のとらぬをばさる物にて、馬牛だにご食まぬ。さればたまかすてつ、おきたるぞかし。かくたのしき彌勒の世にこそあひて侍れやといふめれば、いまひとりの翁「たゞ今はこの御堂の夫をしきりに召すことこそは、人はたへがたけに申すめれ。それはさは聞き給はぬか。」といふめれば、世繼「しか

- 二三日まぜに 二三日おきに。
- それまるるに云々 人夫を差上ぐるは悪しき事ならず。
- いかで 何卒。
- なりにしがな なりたいたいのだ。
- あらし あらしこ即ち夫役。
- たび 騙ひ。
- もてまるるくだ物 道長へ献上物の菓物。
- 宛て行はしめたまへ 一人宛に下さる。
- いそがしがりて 奮勵して。
- やれ 破れ。
- 申文 請願書。
- 末の家の子 貞信公の子孫。
- 案のものにて 自分のおもふ通りになるもので。
- 御寺 法戒寺。
- いやしきわらはば 刑妻。

しかそのことごある。二三日まぜに召すぞかし。されどそれまるるにあしからず。故は極樂淨土のあらたにあらはれいで給ふべき爲に召すなりとおもひ侍れば、いかで力たへばまゐりてつかうまつらむ。行末にこの御堂の草木となりしがなごこそおもひ侍れ。されば物の心しりたらむ人は、のぞみても参るべきなり。

されば翁らまだあらし一度かかすたてまつり侍るなり。さてまるりたればあしきことやはある。飯酒しけくたびもてまるるくだ物をさへめぐみたび、常につかうまつるものは、衣裳をさへこそは宛て行はしめたまへ。さればまるる下人もいみじういそがしがりてぞすすみつどふめる。といへば、しかそれさる事に侍り、但し翁らが思ひえて侍るやうは、いとたのもしきなり。翁いまだ世に侍るに、衣裳やれ、むつかしきめ見侍らす。又飯酒乏しきめ見侍らす。もしこの事どもの術なからむ時は、紙三枚をぞもとむべき。故は入道殿下の御まへに申文を奉るべきなり。その文につくるべきやうは、翁故太政大臣貞信公殿下の御時の小舎人童なり。それ多くの年つもりてすちなくなりにて侍り。閣下の君の末の家の子におはしませば、同じき君とたのみ仰ぎたてまつる。物少しめぐみたまはらむ。と申さむには、少々のものはたばじやはとおもへば、それは案のものにて、倉におきたるが如くになむおもひ侍る。」といへば、世繼「それはけにさることなり。家貧しくならむをりは、御寺に申文奉らしめむとなむ、いやしきわらはべとうち語り侍る。」と、同じ心にいひか

○年頃の袋云々 思ふ事を皆話して清々する事。

○の、しる 評判の○大御堂の供養の年 治安二年七月十四日。

○拂ふべかなり 拂ひのけるべし。

○試樂 舞樂の下稽古。

○物ごもとりおかれぬさきに 佛具供物等片づけない内に。

○御手車 駕車。

○口に 前方に。

○枇杷殿の宮 研子

○もちたうび 持ち給ひ。

はず。

「さてもくうれしく對面したるかな。年頃の袋のくちあけ、綻びをたち侍りぬること。さてもこのの、しる無量壽院には、いくたびまるりをかみ奉り給ひつ。」といへば、「おのれは大御堂の供養の年の會の日は、人いみじう拂ふべかなりと聞きしかば、試樂といふ事三日かねてせしめ給ひしになむまるりて侍りし。」といへば、世繼、「おのれはたび／＼まるり侍り。供養の日のありさまのめでたさはさらにもあらずや。」

又の日けふは御佛などちかくてをかみ奉らむ、物どもとりおかれぬさきにとおもひて、まるりて侍りしに、宮たちの諸堂をかみ奉らせたまひし見申し侍りしこそ、かかる事にはむとて今まで生きたるなりけりと覺え侍りしか。物覺えて後さることをこそまだ見侍らね。御手車に四所奉りしぞかし。

口に大宮、皇太后宮御袖ばかりをいさ、かさしいでさせ給ひて侍りしに、枇杷殿の宮の御ぐしの土にいとながくひかれさせ給ひて、いでさせ給へりしは、いとめづらかなりしことかな。

しりの方には、中宮、かんの殿奉りて、たゞ御身ばかり御車におはしますやうにて、御衣どもみなながら出でて、それも土までこそひかれ侍りしか。一品の宮も中に奉りたりけるにや。御ぞどもは何がしのぬしのもちたうび、御車のしりにぞさぶらはれし。單の御ぞ

○まうち君 公卿。

○堅固の 重き。

○おはします所にまゐりて 中宮の御座所に能信が参りて。

○さかしたち侍れども 賢さうにあれども。

○つたなき 愚かな

○こゝにめでたく云 殊に中宮の御衣は立派故覺えてをる

○薄物 紗縹の類。

○萩の織物 表蘇芳裏青の織物。

○そうじて、總じて

○唐装束 唐物の綾絹織物等で作った装束。

○殿 輜通。

○箔おし 輜通が金銀の箔をおし。

○呪師 法會の時呪願讀誦を掌る僧。

○南大門 法成寺の總門。

○あましく、嬉しく

ばかりを奉りて坐しけるなめり。御車にはまうち君達ひかれて、しりには關白殿を初め奉り、殿原さらぬ上達部殿上人、御直衣にて歩み續かせ給へりし、いであないみじや。

中宮權大夫殿のみぞ堅固の御物忌にて、参らせ給はざりし、さていみじくちをしがらせ給ひける。中宮の御装束は權大夫殿させ給へりし、いと清らにてこそ見え侍りしか。

「供養の日啓すべき事ありて、坐す所に参りて、五所るならばせ給へりしを、見奉りしかば、中宮の御ぞの優に見えしは、わがしたればにや。」とこそ、大夫殿おほせられけれ。

かくくちばかりさかしたちはべれど、下薦のつたなきことは、いづれの御衣もほどへぬれば、色どものつぶと忘れ侍りにけるよ。ことにめでたくてさせ給へりければにや。下はくれなる薄物の御單重にや。御うはぎよくも覺え侍らず。萩の織物の三重がさねの御唐衣に、秋の野をぬひものにし、繪にもかかれたるにやとぞ、目もとゞろきて見給へし。

こと宮々のも殿ばらの調じて奉らせ給へりけるとぞ人申しし。大宮はふたへ織物をりかさねられて侍りし。皇太后宮はそうじて唐装束。かんの殿のは殿こそはせさせたまへりしか。こと御方々のも繪かきなどせられたりときかせ給ひて、俄に箔おしなどせられたりければ、入道殿御覽じて、「よき呪師の装束かな。」とてわらひ申させ給ひけり。

殿はまづ御堂々あけつ、待ち申させ給ふ。南大門の程にて見申すだにゑましくおほえ侍りしに、御堂の渡殿の物のはさまより、一品の宮の辨の乳母、今一人はそれも一品の宮

○今日さばかり云々
 供養の今日御告は
 あるまじと思ひて。
 ○なごてかは云々
 何故斯くも揃ひて美
 しといふものの何れ
 を第一と申されず各
 皆美し。

○御すそ 壁の先。
 ○のけて 仰向けて
 ○御前なにか云々
 汝は何故坐つてをら
 れるか。

○あらはならず云々
 乳母遣は人日につ
 かぬやう顔を寒ぎ等
 して居つた時に道長
 に見出されて了つた
 ○あないみじ云々
 こりや大變御奉公の
 運命が盡きる時だ。
 ○いたうもふたがせ
 給はで 餘り長くは
 三人を恥かしがらせ
 ないで。
 ○そこらけさうじ
 澤山化粧し。

の大輔の乳母、中將の乳母とかや、三人とごうけたまはりし。御車よりおりさせ給ひて、
 るざりつゝかせ給ひつるを見奉りたるぞかし。おそろしさにわな、かれしかど、今日さ
 ばかりの事はありなむやと思ひて、見まらするに、などてかはとは申しながら、いづれ
 と聞えさすべくもなく、とりくにめでたくおはしまさふ。

大宮の御ぐし御ぞのすそにあまらせ給へり。中宮はたけに少し餘らせたまへり。皇太后
 宮は御ぞのすそに一尺ばかりあまらせ給へる御すそ、扇のやうにぞ。かんの殿、御たけに
 七八寸あまらせたまへり。御扇すこしのけてさしかくさせ給ひける。

一品の宮は、殿の『御前なにかるさせ給ふ。たたせ給へ。』とて、長押おりのほらせ給ふ
 御手をとらへつゝ、たすけ申させ給ふ。あまりなる事は、目もとろくこ、ちなむし給ひ
 ける。あらはならず、ひきふたぎなどつくろはせ給ひける程に、御覽じつけられたる物か
 は。あないみじ、宮づかへに宿世のつくる日なりけりと、いけるこ、ちもせで、三人なが
 らさぶらひ給ひけるほどに『宮たち見奉りつるか。いかおはしましたる。このおい法師
 のむすめたちには、けしうはあらずおはしまさふな。なあなづられそよ。』とうちゑみてお
 ほせられかけて、いたうもふたがせ給はで、おはしましたりしなむ、生きいでたるこ、ち
 して、うれしなどはいふべきやうもなく、かたみにみれば、顔はそこらけさうじたりつれ
 ど、草の葉の色のやうにて、又赤くなりなど、さまざま汗水になりて見かはしたり。『さら

○あざれたる ふざ
 けた。

○せめてめでたう云
 云 道長は甚だ供養
 の立派さの嬉しまぎ
 れにまよと思して
 覗いたのかみ推察す
 るも自慢の氣が起る
 と三人が云つて居る
 様である。

○染著の心 執著心
 ○某の聖人 證空。
 ○後世のせめ 來世
 の呵責。
 ○亂聲 行幸の時笛
 や太鼓で奏するあや
 のない曲。

○中尊 阿彌陀佛。
 ○かしこ結縁し
 嬉しくも佛縁を結び
 ○傍にゐられ云々
 此の上人が己の傍に
 居たか否か忘れた。

ぬ人だにあざれたる物のぞきは、いと便なき事にするを、せめてめでたうおほしめしけれ
 ば、御悦びにたへで、さばれと思召しつるにこそと思ひなすも、心おごりなむする。』と、
 のたまひいまさふじけり。

かやうの事どもを見給ふるまゝに、いとしもこの世の榮華御さかえのみおほえて染著の
 心のいと々ますくにおこりつゝ、道心つくべくも侍らぬに、河内國そこ／＼にすむ某の
 聖人は、庵より出づる事もせられねど、後世のせめをおもへばとて、のほりまられたり
 けるに、關白殿頼通まるらせ給ひて、雑人どもをはらひの、しるに、これこそは一の人におは
 しますめれと見奉るに、入道殿の御前にるさせたまへば、なほまさらせたまふなりけりと
 見奉るほどに、また行幸後一條院なりて亂聲らんじやうし待ちうけ奉らせたまふさま、御輿の入れ給ふ程な
 ど、見奉りつる殿たちのかしこまり申させ給へば、なほ國王こそ日本一の事なりけれとお
 もふに、おりおはしまして、阿彌陀堂の中尊の御前かみにいるさせ給ひて、拜み申させたま
 ひしに、なほ／＼佛こそ上なくはおはしましけれと、この會の庭にはかしこ結縁し申し
 て、道心なむいと熟し侍りぬるところ、申され侍りしか。傍にゐられたりしなりや、ま
 ことにわすれ侍りにけり。

世の中の人の申すやう、大宮上東門院の入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女
 院となむ申すべきに、この御寺に戒壇たてられて、御受戒あるべきなれば、世の中の尼ど

○受くべか 受戒す
べき。
○なにか制する 何卒
きめてくれるな。
○さらむ後には云々
汝尼後は年若の妻を
捜して我によこせ
○さしはなれたらむ
も 縁のない他人も
○近くも遠くも 縁
故の厚薄に關はらず
○さすがにいかによ
や 世繼はさうはい
ふものの何故か。
○女ごもにそむかれ
む 妻が佛道に入る
○今年 萬壽二年。
○女御殿 寛子。
○おが寶の君 繁樹
の主人貞信公忠平。
○八月十日あまり
天曆三年八月十四日
○時しもあれ 季節
も季節秋の頃。

も参りて受くべかなりとて、悦びをこそなすなれ。
この世繼が女などもかかるとを傳へきて申すやう、『おのれもそのをりにだに白髪
すそそぎてむとなむ。なにか制する。』とかたらひ侍れば、『なにせむにか制せむ。但しさら
む後には、わかからむめのわらははもとめてえさすばかりぞ。』といひ侍れば、『わがめひな
る女ひとりあり。それを今よりいひかたらはむ。いとさしはなれたらむもなさけなき事も
ぞある。』と申せば、『それあるまじき事なり。近くも遠くも、身の爲におろかならむ人を今
更によすべきかは。』となむかたらひ侍る。やう／＼ころも袈裟などのまうけに、よき絹一
二疋もとめまうけ侍る。』などいひて、さすがにいかによや、もの哀れけなるけしきのいで
きたるは、女どもにそむかれむことの心細きにやとぞ見え侍りし。

さて今年こそは天變しきりにし、世の妖言などよからずきこえ侍るめれ。かんの殿嬪子のか
く懷妊せしめ給ひ、院小條の女御殿のつねの御惱みの中にも、今年となりては、ひまなくおは
しますなるなどこそ、恐ろしううけたまはれ。いでやかうやうの事をうちつゞけ申せば、
昔の事こそたゞ今のやうにおほえ侍れ。見かはして、繁樹がいふやう、『いであはれかくさ
まざまにめでたき事どもあはれにもそこら多く見きき侍れど、なほわが寶の君におくれ奉
りしやうに、ものかなしくおもひ給へらるゝをりこそ侍らね。八月十日あまりの事にさ
ぶらひしかば、をりさへこそあはれに、時しもあれとおほえ侍りし物かな。』とて、はなた

○ひろがり 貞信公
の御末の擴がり。
○又の年 天曆四年
○ばかりも云々 貞
信公一族の喜びは計
る事は出来なかつた
○あまりにおそろし
くぞ 其の話が百年
も昔の事故記者が氣
味悪く思つた。
○ゆかしく云々 見
たく思ふから長生し
たいの意。
○みえし 私が見た
夢。
○宮のほごりの人
宮に仕へる人。
○こゝにあり云々
記者こそ宮に仕へる
者たゞ名乗りたかつ
た。

びたびかみて、えもいひやらず、いみじと思ひたるさま、まことにそのをりもかくこそと
見えたれ。一日かた時いきて世にめぐらふべきこゝちもし侍らざりしかど、かくまでさぶ
らふは、いよくひろごりさかえおはしますを、見奉り悦び申さむとに侍るめり。さて又
の年五月二十四日こそは冷泉院は誕生せしめ給へりしか。それにつけていとゞこそくちを
しきをりの嬉しさは、はかりもおはしますざりしかな。』といへば、世繼も「しか／＼。』と
心よく思へるさまおろかならず。『朱雀院村上などのうちつゞき生れおはしましたしは、又い
かゞ。』などいふほど、あまりにおそろしくぞ。

「又世繼頼子後三條の御母がおもふ事こそ侍れ。便なき事なれど、あすともしらぬ身にて侍れば、たゞ申して
む。この一品の宮の御ありさまの、ゆかしくおほえさせたまふにこそ、又命をしく侍れ。
その故はうまれおはしますとて、いとかしき夢想見たまへしなり。さおほえ侍りし事
は、故女院東三條上東この大宮などはらまれさせ給はむとてみえし、たゞおなじさまなる夢に侍りし
なり。それにてよろづおしはかられさせ給ふ御ありさまなり。

皇太后宮にいかで啓せしめむと思ひ侍れど、宮のほとりの人にえあひ侍らぬが口をしさ
に、こゝらあつまり給へる中に、もしおはしましやすらむとおもひたまへて、かつはかく
申し侍るぞ。行末にもかくいひけるものかなとおほしあはする事も侍りなむ。』といひしを
りこそ、こゝにありとてさしいでまほしかりしか。

○以下雑事。

○その事なきはこれぞ云ふ事のな
いは。

○もちある 信用す

○閑散 閑で無事。

○甲午の最吉日 甲

午の年の初午は最も

吉日。

○坂のこはき 坂の

峻しき所。

○困じて 疲れて。

○還向 神佛に参詣

して歸る事。

○うるさくてさぶら

ひし 世話筆せし。

○かみ 上。空の意

いとくあさましくめづらかにつきもせず二人かたらひしに、この侍いとく興ある
事をもうけたまはるかな。さて物のおほえはじめは何事ぞや。それこそまつきかまほし
けれ、語られよ。」といへば、世繼、「六七歳より見聞き侍りし事は、いとよく覚え侍れど、
その事となきは證のなければ、もちある人もさぶらはじ。九つに侍りし時の大事を申し侍
らむ。光孝 小松の帝の親王にておはしましたし時の御所は、みな人しりて侍り。おのがおやのさ
ぶらひしところ大炊の御門より北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば宮の傍にて、常にま
りてあそび侍りしかば、いと閑散にてこそおはしましたし。きさらぎの三日初午といへ
ど、甲午の最吉日、常よりも世ごぞりて、稻荷まうでにの、しりしかば、父のまうで侍り
しともにしたがひ参りて侍る。さは申せど幼き程にて、坂のこはきをのほり侍りしかば、
困じてえ其の日のうちに還向つかまつらざりしかば、父がやがてその御社の禰宜の大夫が
うしろみつかうまつりて、いとうるさくてさぶらひし宿にまかりよりて、一夜はやどりし
て、又の日かへり侍りしに、東の洞院よりのほりにまかるに大炊の御門より 西さまに人
人のさ、とはしれば、あやしくて見さぶらひしかば、わが家のほどにしも、いとくらうな
るまで人たちこみて見ゆるに、いと驚かれて、もし焼亡かとおもひて、かみを見あぐれ

○追捕 悪人を捕へ
るこじ。

○小野宮 大炊御門

南、鳥丸通西。

○帝にるさせ給ふ

帝位に即き給ふ。

○あはそかに 疎略

○くれのいぬる 暮

方になる。

○時中ばかり 今の

一時間。

○あはそかに 疎略

に。

ば煙もたたず、さは大きな追捕かなと、かたくにこ、ろもなきまでまどひまかりしか
ば、小野宮のほどにて、上達部の御車や、鞍おきたる馬ども、冠うへのきぬなどきたる人
人などの見え侍りしに、心えずあやしくて、『何事ぞく。』と人毎にとひさぶらひしかば、
『式部卿の宮、帝にるさせ給ふとて、大殿をはじめ奉りて、みな人まるらせ給へるなり。』
とて、いそぎまかりしなどぞ物おほえたる事にて見給へし。
又七つばかりにや、元慶二年ばかりにや侍りけむ、式部卿の宮の侍従と申ししぞ寛平の
天皇。つねに狩をこのませおはしまして、霜月の二十餘日のほどにや、鷹狩に式部卿の宮
より出でおはしましたし御ともにはしりまるりて侍り。賀茂の堤のそこくなる處に、侍従
殿鷹つかはせたまひて、いみじう興にいらせたまへるほどに、にはかに霧たち、世間もか
いくらがりに侍りしに、東西もおほえず、くれのいぬるにやとおほえて、やぶの中にたふ
れふして、わな、きまどひさぶらふほどに、時中ばかりや侍りけむ。後にぞうけたまはれ
ば、加茂の明神の顯はれおはしまして、侍従殿にも申させおはしましたしける程なりけり。
そのことはみな世に申しおかれて侍るなれば、申々申さじ。しろしめしたらむ。あはそか
に申すべきにも侍らず。さて後六年ばかりありてや、賀茂の臨時の祭はじまりけむ。位に
つかせおはしましたし年とぞおほえ侍る。その日の酉の日にて侍りければ、やがて霜月のは
ての酉の日にては侍るぞ。はじめたる東遊の歌敏行の中將ぞかし。

○御格子まるらず
御格子を開け給はず

○集 貴之の歌集。

○そのぬし 世繼。

○伊勢の君 藤原繼

藤女、一條皇后女房

○別るれごの歌 自

分の仕へ奉りし帝は

位を去り給ひて宮中

を出で給へは自分に

は戀しき宮中ならぬ

に愈宮中を去ると思

へは何となく悲し。

千早振かものやしろの姫小松よろづ代までも色はかはらじ

古今にいりて侍り。みな人しろしめしたる事なれど、いみじくよみ給へるぬしかな。今に
たえずひろごらせ給へる御するとか。みかどと申せど、かくしもやおはします。

八幡やはたの臨時の祭、朱雀院の御時よりぞかし。朱雀院うまれさせたまひて三年はおはしま
す殿の御格子まるらず、夜晝火をともして、御帳のうちにておほしたて奉らせ給ふ。北野
におち申させ給ひて、天曆村上の御門をばいとさまもり奉らせ給はず。いみじきをりふしに
うまれさせ給へるぞかし。朱雀院うまれおはしますさすば、藤氏の御さかえ、いとかうしも
侍らざらまし。さて位につかせ給ひて、將門が亂れ出で来て、その御願にてとぞ承りし。
その東遊のうた、貫之のぬしぞかし。

松もおひまたもこけむす石清水のくする遠くつかへまつらむ

集にもかきて侍るぞかし。」といへば、また繁樹、此の翁もそのぬしの中されつるがごと、
くだくしき事は申さじ。おなじことのやうなれど、寛平延喜などの御讓位のほどの事な
どは、いとかしこくたしかにおほえ侍るをや。伊勢の君の弘徽殿の壁に書きつけ給へし歌
こそは、そのかみのあはれなる事と人申ししか。

別るれどあひも思はぬも、しきを見ざらむことや何かかなしき
法皇の御かへし、

○身一つの歌 後撰

集離別部。朕一人居

ない許りで宮中は元

の儘の宮中故猶居た

くは元通り居れの意

○延喜 醍醐帝。

○やんごまなくこそ

恐れ多し。

○おもたしうこそ

は 面目ある心地す

身一つのあらぬばかりをおしなべてゆき返りてもなとかみざらむ

といへば、傍なる人「法皇のかかせ給へりけるを、延喜の後に御覽じつけて、かたはらに
かきつけさせ給へりとも承るは、いづれかまことならむ。」

「同じ帝と申せど、その御時に生まれあひてさぶらひけるは、あやしの民の竈まで、やん
ごとなくこそ。大小寒のころほひ、いみじう雪ふり冴えたる夜は、諸國の民百姓いかに寒
からむとて、御衣おとぎをこそ夜の殿おとぎよりなけ出しおはしましたければ、おのれらまでも恵みあは
れびられ奉りて侍る身と、おもたしうこそは。さればその世に見給へし事は、猶末まで
もいみじきことと覺え侍るぞ。人々きこしめせ。此の座にて申すは、はかりあることな
れど、かつは若くさぶらひし程、いみじと身にしみて思う給へし罪も今にうせ侍らじ。け
ふ此の伽藍がらんにて懺悔つかうまつりてむとなり。

六條教賢の式部卿の宮と申ししは、延喜の帝の一つ腹の御兄弟におはします。野の行幸供奉
せさせ給ひしに、此の宮つかうまつらせ給ふべかりけれど、京の程遅參せさせ給へりしか
ば、桂の里にぞまるりあはせ給へりしかば、御輿とめて、さきだて奉らせ給ひしに、某
といひし犬飼の、犬のまへ足をふたつながら肩に引きこして、深き河の瀬わたりしこそ、
行幸につかうまつり給へる人々、さながら興じ給はぬなく、御門みかども興ありけにおほしたる
御けしきにこそ見えおはしましたしか。さて山口いらせ給ひし程に、しらせうといひし御鷹

○野の行幸 大原野
行幸延長六年。
○桂の里 桂川の東
岸。
○山口 鷹狩に狩り
せんさて先づ狩場に
入る所。
○しらせう 鷹の名

○彈指はたしとす
心に叶はぬ時の有
様。
○まめだちたる人
眞面目の人。
○大小事かむがた
め 笑顔を作るも人
から萬事を聞く爲。
○ふ月なが月 七月
九月。
○相撲の節 七月二
十六日。
○九日の節 九月九
日重陽の節句。
○公忠の辨 源國紀
の子。
○中山 公忠の在所
か。
○官のつかさの辨の
曹司 太政官の辨官
の役所。
○鷹のもの 鷹の糞
○久世 山城國。
○交野 河内國。
○まゐりしりたりき
食べ別けが出来た

の鳥をとりながら、御輿の鳳のうへにとびまゐりてさぶらひし。やうく日は山の端に入
りがたに、ひかりのいみじうさして、山の紅葉錦をはりたる様なるに、鷹の色はいと白く
て、雉は紺青のやうにて、羽うちひろけてるてさぶらひし程は、まことに雪すこし打ちち
りて、折節とりあつめて、さる事やはさぶらひしとよ。身にしむばかり思ひ給へしかば、
いかに罪え侍りけむ。」とて、彈指はたしとす。
「大かた延喜の帝のつねに笑みてぞおはしましたしける。そのゆゑは『まめだちたる人にはも
のいひにくし、うち解けたるけしきにつきてなむ人は物はいひよき。されば大小事かむ
がためなり。』とぞ、おほせごとありける。それさる事なり。けにくき顔には物いひふれに
くきものなり。さて、『われいかでか、ふ月なが月に死にせじ。相撲の節九日の節のとまら
むがくちをしきに。』とおほせられけれど、九月にうせさせ給ひて、九日の節はそれよりと
どまりたるなり。その日左衛門の陣の前にて、御鷹ども放たれしは、あはれなりし物か
な。とみにこそ飛びのかざりしか。

公忠の辨をば、大方の事にとりても、やん事なきものにおほしめしたりしなかに、鷹
のかたさまにはいみじう興せさせ給ひしなり。日々に政事をつとめ給ひて、馬をいづこに
ぞやたて給ひて、事はつるま、にこそ、中山へはいませしか。官のつかさの辨の曹司の壁
には、その殿の鷹のものはいまだつきて侍らむ。久世の鳥交野の鳥の味ひは、まゐりしり

○かたへ 他の人。
○心見たいまつらむ
試み奉らん。
○人 公忠。

○なでう事かあらむ
何の差支あらうぞ
○大井河の行幸 延
長四年十月十九日。
○しほたれぬ人云々
舞の巧妙に感涙を
流さぬ人がなかつた
○山の神云々 程な
く薨去された事。

○宮瀧 大和國吉野
○水ひきの歌 後撰
集齋旅部。
○水ひき 麻なごを
水に浸して皮を剥ぐ
事。

たりき。かたへは、『そらごとを宣ふにこそ。心見たいまつらむ。』とて、みそかに二所の鳥
をつくりませで、しるしをつけて人のまゐりたりければ、いさ、かとりたがへず、これは
久世の、これは交野のなりとこそ、まゐりしりたりければ。かかりければ、『ひたぶるの鷹か
ひにてさぶらふものの、殿上にさぶらふこそ見苦しけれ。』と延喜に奏し申す人の坐しけれ
ば、『公事をおろそかにして、狩をのみせばこそ罪はあらめ、一度まつりごとをもかかで、
おほやけ事をよろづつとめて後に、ともかくもあらむは、なでう事かあらむ。』とこそはお
ほせられけれ。いで又いみじく侍りしことは、やがて同じ君の大井河の行幸に、富小路の
嬪^嬪時平女^{時平女}の御腹の御子の七歳にて舞せさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人し
ほたれぬ人侍らざりき。あまり御容のひかるやうにしたまひしかば、山の神めでて、とり
奉り給ひてしぞかし。

その御時にいとおもしろき事どもおほく侍りきや。おほかた申しつくすべきならず。ま
づ申すべき事をも、たゞおほゆる事にしたがひて、しどけなく申さむ。法皇の^{字多}ところく
修行あそばせ給ひて、宮瀧御覽せしほどこそいみじう侍りしか。そのをり菅原のおとゞの
あそばしたりし和歌、

水ひきのしらいととはへておるはたは旅の衣にたちや重ねむ
大井の御幸も侍りしぞかし。さて又御幸ありぬべきところと申させ給ふ事の由奏せむと

○おほはらの歌
拾遺集雜部。

○わびしらの歌
古今集雜部。佐し

けに猿ま啼く勿れ今
日は帝が行幸された
ではないかの意。峽

ミ甲斐を掛く。

○東宮かくて云々

○東宮を帝位につけ
させた。

○心もまなく云々

母后は待遠に急ぎ思
す事であらうと取り
違へて。

○國ゆづりの日 御

讓位の日。

○日の光の歌 新千

載集雜部。しぐる、
は朱雀院方の人々の
歎きをいふ。

て、一條のおほい忠平まうちぎみぞかし、

おほはらや紅葉の色も心あらば今ひとたびのみゆきまたなむ

あはれいにもさぶらひしかな。さて行幸にあまたの題賜はりて、やまと歌つかうまつり
しなかに、猿叫峽、躬恆、

わびしらにましらなきそ足曳の山のかひあるけふにやはあらぬ

その日の序題は、やがて貫之のぬしこそはつかうまつりしか。

さて又朱雀院も優おほしに坐すとこそはいはれさせ給ひしかども、

將門が亂などいできて、おそれすぐせおはしましし程に、やがてかはらせ給ひにしぞかし。そのほどの事こそい

とあやしう侍りけれ。母后藤子の御もとに行幸させ給へりしを、かかる御ありさまの思ふや

うにめでたく嬉しき事など奏させ給ひて、『今は東宮村上ぞかくて見きこえまほしき。』と申さ

せ給ひけるを、『心もとなくいそぎ思しめす事にこそありけれ。』とて、程もなくゆづりき

こえさせ給ひけるに、后宮藤子は、『さも思ひても申さざりし事を、たゞく末の事をこそおも

ひしか。』とて、いみじくなげかせ給ひけり。さておりさせ給ひて後、人々のなげけるを

御覽じて、院朱雀より后宮にきこえさせ給へりし、國ゆづりの日、
日の光いでそふ今日のしぐる、はいづれの方の山邊なるらむ
后の宮の御かへし、

○しら雪の歌 同集
同部。おりるるかた
に上皇即ち朱雀院方
を含む。

○綾綺殿 宣陽殿の
北、仁壽殿と温明殿
との間にあり。

○なまめかしく 優
美で。

○御こ、ちおもく
御病氣重く。

○くれ竹の歌 拾遺
集哀傷部。くれ竹の

は世の枕詞。ねに音
と根を掛く。彼の世

へ行きても子を思ふ
我は猶泣かれよう。

○ゆるに 寛大に。

○きんぢ 汝。

○ひと京 京都中。

○そこく 心こそ

白雪のおりるる方やしぐるらむ同じみ山のゆかりながらに

などぞきこえ侍りし。院は數月綾綺殿にこそはおはしまししか。後はすこし悔いおほしめ

すことありて、位にかへりつかせ給ふ御祈りなどせさせ給ひけりとあるは、まことにや。

御心いとなまめかしくおはしましし。御こ、ちおもくならせたまひて、大皇太后宮昌子(冷泉の后)の幼く

おはしますを見奉らせ給ひて、いみじくしほたれさせ給ひて、
くれ竹のわが世はことになりぬともねはたえせずぞなほ泣かるべき
まことにこそかなしくあはれにうけたまはりしか。』

村上の帝はた申すべきならず。なつかしうなまめきたる方は、延喜にもまさり申させ給

へりとこそ、人申すめりしか『われをば人はいかゝいふなる。』と人にとはせ給ひけるに、

『ゆるになむおはします、と世には申す。』と奏しければ、『さてはほむるなり。王のきび

しくなりなば世の人いかゝ堪へむ。』とこそ仰せられけれ。

いとをかしうあはれに侍りしことは、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れ

たりしかば、もとめさせ給ひしに、何がしのぬしの藏人にていますがりし時うけたまはり

て、『若きものどもは見えしらじ。きんぢもとめよ。』とのたまひしかば、ひと京まかりあり

きしかども、侍らざりしに、西の京のそこくなる家に、色こくさきたる木のやうだいう
つくしきが侍りしを、ほりとりしかば、家あるじの『木にこれ結ひつけてもてまるれ。』と

○あるやうこそは
何か仔細あらん。

○救なればの歌 拾

遺集雜部。

○御女 紀内侍。

○あまえおはしまし
ける 恥かしく思は
れた。

○ぞくかう 恥辱。

○きぬかづけ云々

祿に衣を戴いたが無
風流の事をしたので
つらく思つた。

○こまやかに 少し

○御門 村上天皇。

○秋の日の歌 後拾

遺集秋部。

○御集 後拾遺集。

○城外やし給へりし

京を出でて他國へ

行き給ひしか。

○ありまほし云々

枕草子百十六段「か

きくもりあやめも知

らぬ大空にありまほ

しをば思ふべしや

は。」

いはせたうびしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりてさぶらひしを、なにぞとて御覽
じければ、女の手にてかきて侍りける、

救なればいともかしこし驚の宿はと問はゞいかゞこたへむ

とありけるに、あやしくおほしめされて、『なにものの家ぞ。』とたづねさせ給ひければ、貫
之のぬしの御女のすむ所なりけり。『遺恨のわざをもしたりけるかな。』とて、あまえおはし
ましける。『繁樹、今生のぞくかうはこれや侍りけむかし。さるはおもふやうなる木もてま
るりたりとて、きぬかづけられたりしも、からくなりなき。』とてこまやかにわらふ。

「繁樹又いと切にやさしくおもひ給へしことは、此の同じ御時の事なり。承香殿の女御と
申ししは、齋宮の女御よ。御門ひさしくわたらせ給はざりける秋のゆふぐれに、琴をいと
めでたくひき給ひければ、いそぎわたらせ給ひて、御傍におはしましけれど、人やあると
もおほしたらで、せめてひき給ふをきこしめせば、

秋の日のあやしきほどの夕暮に萩ふく風の音ぞきこゆる

とひきたりしほどこそ切なりしかと、御集に侍るこそいみじうさぶらへといふは、あまり
かたじけなしやな。」

或人、「城外やし給へりし。」といへば、「遠國にはまからず。和泉國にこそ、貫之のぬしの
御任に下りて侍りしか。』ありとほしをばおもふべしやは。」と詠まれたりしたびのともにも

○雨のふりし云々
記者の感想。

○その人まほし云々

誰まほし知らぬが歌人

なる北の方に我仕へ

しが其の夫が國守の

任果てしに從ひて私

も上京した。

○いたきこと 心に

浸みること。

○その方に心もえで

歌の方に心もえで

く。

○都にはの歌 玉葉

集雜部。

○たごしへなし 譬

へん方なし。

○此の人をば云々

妻に對する詞。此の

歌を詠んだ人を誰ま

知らぬまほし左様な人

は覺えておくものた

○世間だましひ云々

傍人に對する詞。

我が妻は世の甚だ

勝れたるが取得で今

日まで連れ添うた。

○いまひさめり云

云 我より十二年上

なれば我の見ゆ事も

○染殿の后 明子。

○ひすまし 禰洗。

願掃除をする卑女。

さぶらひき。雨のふりしさまなど語りしこそ、ふる草子にあるをみれば、程へたる心ちし
侍るに、昔にあひにたる心ちして、をかしかりしか。この侍もいみじう興じて、「繁樹が女
どもこそ、今少しこまやかなることどもは語られぬ。」といへば、「われは京人にても侍ら
ず、高き宮仕などもし侍らず。わかよりこの翁にそひてさぶらひにしかば、はかしくし
き事をも見給へぬものを。」といらふれば、「いづれの國人ぞ。」と問ふ。「陸奥國安積の沼に
ぞ侍りし。」といふ。「いかで京にはこしぞ。」と問へば、「その人とはえしり奉らず。歌よみ給
ひし北の方おはせし、守の御任にぞのほり侍りし。」といふに、多皇子教養親王の女中務の君にこそときくもを
かしくなりぬ。「いといたきことかな。北の方をたれとかきこえし。よみたまひけむ歌はお
ほゆや。」といへば、「その方に心もえで、おほえ侍らず。たゞのほり給ひしに、逢坂の關に
おはして、よみ給へりし歌こそ、所々おほえ侍れとて、

都にはまつらむものを逢坂のせきまで來ぬと告げややりました。」

などいとたどしけにかたるさま、まことに男にたとしへなし。繁樹、「此の人をば人と
おほえずとよ。さやうの方はおほゆらむものぞ。世間だましひはしも、いとかしこく侍る
をとりどころにて、えさりがたくおほえ侍るなり。」といふに、世繼、「いでこの翁の女人こ
そ、いとかしこくものは覺え侍れ。いまひとめぐりがこのかみにてさぶらへば、見給へぬ
程の事なども、あれは知りて侍るめり。染殿の後の宮のひすましに侍りけり。母も上の刀

○上の月自 禁中の御厨子所盤盛所内侍所の雑役を勤む者。○わらははべがたち云妻の若姿も左程見苦しからぬにや。○兼輔 藤原利基の子で中納言と號す。○良岑衆樹 左中將直の子。○くるみ色 胡桃色表香色裏青色。○ほろろ 殆んどもろろき 諸木と衆樹を掛く。○頭 藏人頭。○賀茂の御まへ云々 其の話は賀茂社の御前さか。○いかでさる云々 左様な物知りの妻を汝は人に認められぬが物さしたか。○さればこそ云々 多情の妻が意外に我家に来てもそれを恥が斯く手をかけ初めさせ他男に心を移させる事許さぬ。○其の内彼女が我が家に落ちつくまで今度我が他の女を思ふ事を許さぬ。

自にて仕うまつりければをさなくよりまゐりかよひて、良房忠仁公をも見奉りけり。わらははべがたちのほどの、いとものきたなうもさぶらはざりけるにや、やんごとなき公達も御覽じいれて、兼輔の中納言、さむらゐ良岑衆樹の宰相の御文なども、もちて侍るめり。中納言はみちのくに紙にかかれ、宰相のはくるみ色のうすやうにてぞ侍るめる。この宰相ぞかし、五十までさせることなく、ほと／＼おほやけに捨てられたるやうにいますがりけるが、八幡にまゐり給ひたるに、雨いみじう降る。石清水の坂のほりわづらひつ、まゐり給へるに、おまへの橘の木すこし枯れて侍りけるにたちよひて、
千早振神のおまへのたちばなももろきもともに老いにけるかな
とよみ給へば、神ききあはれびさせ給ひて、橘もさかえ、宰相もおもひかけず頭になり給ふとこそはうけたまはりしか。」といへば、侍、「賀茂の御まへにとかや、はるか世のものがたり、わらははべもぞし侍るめるは。」といらふれば、「さもやはべりけむ。程へてひがごとも申し侍らむ。宰相をば見奉らざりしかど、人となりてこそたづねうけたまはれ。」といらふ。侍、「そはさなり。その宰相は五十六にてぞ宰相になり、左近の中將かけてこそいませしか。そのをりは何ともおほえ侍らざりしかど、此の頃おもひで侍れば、見ぐるしかりける事かなと思ひ侍る。」此の侍、「いかでさる有識をば、物けなきわかうどにてはとりこめられしぞ。」と問へば、「さればこそ、さやうにすきおきさぶらひし者の、心にもあらず、

世繼が家にはまうできよりては、はぢにして、いかばかりのいさかひ侍りしかど、さばかりにてかけそめてあからめさせ侍りなむや。さるほどにるつきさぶらひては、翁をまた一夜も外目せさせ侍らぬをや。」とほゝゑみたる口つき、いとをこがまし。

「又此の女共も世繼もしかるべきにて侍りけるぞ。かの女二百歳ばかりになりて侍り。兼輔の中納言、衆樹の宰相も、今まであとかばねだにいませず、いかゞしはべらまし。世繼もいまやうのわかき女ども更にかたらはれ侍らじ。」といへば、「かかる命ながのいきあはず侍らましかば、いとあやしうはべらまし。」とて、心よくわらふ。けにときこえてをかしくもあり。かたるもうつ、のこととおほえず。「あはれ今日ぐして侍らましかば、女房たちの御耳に、今少しとまる事どもはきかせ給ひてまし。私のたのむ人にては、兵衛の内侍の御おやをぞし侍りしかば、内侍のもとへは時々まかるめりき。」といふに、「とはたれにか。」といふ人のあれば、「いでこの高名の琵琶ひきよ。相撲の節に玄上賜はりて、御前にて青海波つかうまつられたりしは、いみじかりしものかな。博雅三位などにおほろけにはえ鳴らし給はざりけるに、これは承明門まできこえ侍りしかば、左の樂屋にまかりてうけたまはりしぞかし。

かやうにもののはえうべ／＼しき事どもも、村上天曆の御時までなり。冷泉院の御代になりてこそ、さはいへども世はくれふたがりたるこゝちせしものかな。世の衰ふる事もその御

○しかるべき 因縁
○あさかほね 子孫
○世繼も云々 我も妻を失はは今様の若女は後妻には出来ぬ
○いきあはず云々 一方が早く死んだら
○たのむ人 依頼者
○兵衛の内侍の御おや 信濃守藤原隆信
○玄上 宮中御祕藏の琵琶。
○青海波 盤渉調曲
○うべ／＼しき事 尤もらしい事。
○くれふたがり 全く暗黒となり。

○よそ人 帝は縁なき人。
 ○帝は申すべきにあらず 帝が先帝と異なり給ふは人の知る所。
 ○嘉辰令月 和漢朗詠集雅部謝儀「嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央。」
 ○席田 催馬樂曲名
 ○事いみも云々 不吉の涙を憚らず。
 ○おきの 吉殿。汝
 ○ゆるぎたる所 寛大なる點。
 ○みそか事 男女間の事。
 ○わからか 若やか
 ○なつかしき方云々 兄より可愛らしいから帝も愛されたのであらう。

時よりなり。小野宮殿も一人の人と申せど、よそ人にならせ給ひて、若く花やかなる御をち
 たちうちまかせ奉らせ給ふ。又帝は申すべきにあらず。」
 あはれにさぶらひけることは、村上うせおはしまして、又の年小野宮に人々まゐり給ひ
 て、いと臨時客などはなけれど、嘉辰令月などうち誦せさせたまふついでに、一條左大臣
 殿六條殿など拍子とりて席田うちいでさせ給ひけるに、「あはれ先帝おはしまさしかば。」
 とて御笏もうちおきつ、あるじ殿を始め奉りて、事いみもせさせ給はず、うへの御衣ど
 もの袖ぬれさせ給ひにけり。さる事なりや。何事もききしり見わく人のあるはかひあり、
 なきはいと口をしきわざなり。けふかかる事ども申すも、わどののききわかせ給へば、い
 と、いいますこしも申さまほしきなり。」といへば、侍もあまえたりき。

「藤氏の御事をのみ申し侍るに。源氏の御事も珍らしう申し侍らむ。この一條殿六條左
 大臣殿たちは、六條の一品式部卿の宮の御子どもにおはします。寛平の御孫なりとばかり
 は申しながら、人の御ありさま有識におはしまして、いづれをも村上の帝ときめかし申さ
 せ給ひしに、今すこし六條殿をば愛し申させ給へりけり。兄殿はいとあまりうるはしく、
 公事より外の事多分には申させ給はで、ゆるぎたる所のおはしまさざりしなり。弟殿はみ
 そか事には無才にごおはしましたしかど、わからかにあいぎやうづき、なつかしき方はまさ
 らせ給へりしかば、なむめりとぞ人申しし。父宮は出家せさせ給ひて、仁和寺におはしま

○手ききたる 行届いた。
 ○たつき 頼りみするもの。
 ○八幡の放生會 八月十五日。
 ○淨衣 祭服。
 ○きよまはらせ 清淨にせられ。
 ○ひき 馬を引き。
 ○信をいたさせ 信仰せられ。
 ○大菩薩 八幡大菩薩。
 ○この生 今生。
 ○冬の御扇云々 楡扇の骨を敷へて。

ししかば、六條殿修理大夫にておはしましたしほどなれば、仁和寺へ参らせ給ふゆきかへり
 の道を一度は東の大宮よりのほらせ給ひて、一條より西さまにおはしまして、又一度は西の
 大宮よりくだらせ給ひて、二條より東さまなどにすぎさせ給ひつ、内裏を御覽じて、や
 ぶれたる所あれば、修理せさせ給へり。いと手ききたる御心ばへなりな。また一條殿のお
 ほせられけるは、「親王たちの中に、世の案内もしらず、たつきなかりしかば、さるべき
 公事のをりは、人よりさきに参り、事はてても最末にまかりいでなどして見習ひしなり。」
 とぞのたまはせける。八幡の放生會には御馬奉らせ給ひしを、御使などにも淨衣をたまは
 せ、御自らもきよまはらせ給ひしかばにや、おまへ近き木に、山鳩のかならずるて、ひき
 出づるをりに飛びたちければ、かひありと喜び興せさせ給ひけり。御心いとうるはしくお
 はします人の、信をいたさせ給ひしかば、大菩薩のうけ申させ給へりけるにこそ。一年の
 早りの御祈りにこそ、東三條殿の御賀茂詣でさせ給ひしには、此の一條殿も参らせ給ひ
 き。大臣にならせ給ひぬれば、さる例なけれども天下の大事なりとて、御いでたちの所
 はおはしませで、わが御殿の前渡らせ給ひし程に、ひきいでて具し申させ給ひしなり。

この生には御すゝとらせ給ふ事はなくて、只毎日に南無八幡大菩薩、南無金峯山金剛藏
 王、南無大般若波羅蜜多心經と、冬の御扇を敷にとりて、一百八遍つ、ぞ念じ申させ給ひ
 ける。それより外の御つとめせさせ給はず。四條の大后宮にかくなむと申す人のありけれ

○あら田におふる
風俗歌荒田の曲「荒
田におふるさみくさ
の花手に摘み入れて
宮へまゐらむ」これ
を普通の歌の様に歌
へり。
○外記のすみの程
太政官外記の詰所の
隅の邊。

○大納言 時中は雅
信の子の誤。

ば、きかせ給ひて、『なつかしからぬ御本尊かな。』とぞ仰せられける。此の殿こそ、『あら田
におふる。』をば、なべてのやうにうたひかへさせ給ひけれ。一條院の御時、臨時の祭の御
前の事はて上達部たちの物見にいで給ひしに、外記のすみの程すぎさせ給ふとて、わざ
とはなくて、口すさびのやうにうたはせたまひしが、申々優におほえ侍りし。』とみくさの
花手につみいれて宮へまゐらむ。』のほどを、例のには、かはりたるやうにうけたまはりし
かば、遠きほどに、老のひが耳にこそはとおもひたまへしを、この按察大納言殿も、しか
ぞ宣はせける。『殿上人にてありしかば、遠くてよくもきかざりき。かはりたりしやうのめ
づらしう、さまかはりておほえしは、あの殿の御事なりしかばにや。又もきかまほしかり
しかど、さもなくてやみにしこそ、今に口惜しくおほゆれ。』とこそそのたまふなれ。
此の大納言重信重信におはしましき。おほかた六條の宮の御子どもの、皆
めでたくおはしまししなり。御法師子は廣澤の僧正勸修寺の僧正二所こそはおはしましし
か。大方その程には、かた／＼につけつ、いみじき人々のおはしまししものをや。』とい
へば、『この頃もさやうの人はおはしまさずやはある。』と侍のいへば、『この四人の大納言た
ちよな、齊信、公任、行成、俊賢など申す君たちは又さらなり。
さてまた多くの物見侍りし中にも、花山院の御時の石清水の臨時の祭、圓融院の御覽
ぜしばかり、興ある事さぶらはざりき。そのをりの藏人の頭にては、今の小野宮の右大臣

○藏人判官代 宮中
の藏人で院の判官代
兼任の者。

○御けしき給はらせ
御機嫌を伺ひ。

○あへ侍りなむ 事
足りるならう。あへ
は敢へ。

○うつしおきたる馬
移鞍を置いた馬。
○御前でもおりに云々
御前驅の人々も下
馬して並び侍ふ程に
○内 禁中。
○世にあらじ よも
やさる事あらじ。

殿ぞおはしましし。御前の事はてけるまゝに、院はつれ／＼におはしますらむかしとおほ
しめして、参らせ給へりければ、さるべき人もさぶらひたまはざりけり。藏人判官代はか
りして、いと／＼さう／＼しげにておはします。かく参らせ給へるを、いと時ようおほし
めしたる御氣色を、いとあはれに心ぐるしく見まらさせ給ひて、『もの御覽ぜよ。』など
御けしき給はせたまへば、『にはかにはいかあるべからむ。』とおほせられけるを、『かく
て實資候へば、又殿上にさぶらふをのこともばかりにてあへ侍りなむ。』とそ、のかし申さ
せたまふ。御廢の御馬どもめして、さぶらひしかぎり御前つかうまつり、頭中將は束帶な
がら参り給ふ。堀河の院なれば、程近くいでさせ給ふに、物見車ども二條大宮の辻にたち
かたまりて見るに、布衣衣冠なる御前したる車の、いみじく人はらひ、なべてならぬ勢な
るがくれば、誰ばかりならむと、あやしくおもひあへるに、頭中將下襲のしりはさみて、
うつしおきたる馬にのりておはするに、院のおはしますなりけりと見て、車どももかち人
も手まどひし立ちさわぎて、いとものさわがし。二條よりは少し北によりて、冷泉院の築
地づらに御車たてつ。御前どもおりてさぶらひなみたまふほどに、内より見物しにひき
つゞき出でたまふ上達部たちの見給ふに、大路のいみじくの、しれば、怪しくて、『何事
ぞ。』と問はせ給ふに、『院のおはしますなり。』と申しけるを、世にあらじとおほすに頭中將
殿もおはしますといふにぞ、まことなりけりとおほえつ、御車よりいそぎおりつ、皆

○ごう(こしき)籠。
 ○陪從 東遊の音楽方及び歌人。
 ○使 祭の使。
 ○求子 東遊の曲名
 ○袖のけしきばかり云々 袖を纏ひ少し許り舞ひて踏坐しながら。
 ○香 香色。薄赤くて黄はめる色。
 ○おしのごひて 涙を拭ひて。
 ○神泉 神泉苑。
 ○うまのはなむけの講師 饒別佛會の講師。
 ○參河入道 參議齊光の子。
 ○清照法橋 高階成忠の子。
 ○神分の心經表白 佛に向ひて讀む願文で、神分は天地諸神に法施を分與する意、心經は般若心經表白は表白文。

參り給ひし。大臣二人は左右の御車のどううちおさへてたたせ給へり、東三條殿一條左大臣殿よ。さて納言以下は、轅のこなたかなたにさぶらひ給ふ。中々うるはしからむ事の作法よりも、めでたくはべりしものかな。舞人陪從は皆乗りてわたるに、時中の源大納言のいまだ大藏卿と申ししをりぞ、使にておはしし。御車の前ちかく立ちどまりて、求子を袖のけしき許りつかうまつり給ひてつゝ給ひしまゝに、御かた袖を顔におしあててさぶらひたまひしかば、香なる御扇をさしいださせたまひて、はやうと書かせ給ひしかばこそ、すこしおしのごひて立ち給ひしか。すべてさばかり優なる事またさぶらひなむや。けにあはれなることのみまなれば、人々も御けしきはり、院の御まへにもすこし涙ぐみおはしましけりとぞ、後にうけたまはりし。神泉の丑寅の隅の垣の内にて見給へしなり。
 又わかく侍りしをも、佛法うとく世の、しる大法會ならぬには、まかりあふ事もなかりしに、まして年積りては、動きがたくさぶらひしかど、參河入道の入唐のうまのはなむけの講師、清照法橋のせられし日こそまかりたりしか。さばかりの道心なきもの、はじめて心おこる事こそさぶらはざりしか。まづは神分の心經表白のたまひて、かねうち給へりしに、そこばく集まりたりし萬人さこそ泣きて侍りしか。それは道理の事なり。
 又清範律師の、犬のために法事しける人の講師に請せられて行くを、清照法橋同じほどの説法者なれば、いかゞすると聴きに、かしらつゝみて、誰ともなくて聴聞しければ「た

○過去聖靈 犬の亡霊を指す。
 ○人のかさ／＼云々 清範の才氣あり智慧ある事が面白くて
 ○五大堂 不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉の五大佛を安置せる堂。
 ○百僧 百人の僧の集まり供養する事。
 ○題名僧 經の題名を讀み上げる僧。
 ○いれられ 作られ
 ○行事 世話係。
 ○はしたなききはに 此の上もない程に
 ○しか／＼云々 湯漬が熱かつたので。
 ○別の勘當 殊更の贖資。
 ○いはれたうはむは 行事が言はれ給ふ事は。

だ今や過去聖靈は蓮臺の上にてひよと吠え給ふらむ。』とのたまひけるを「さればよ、こ」と人かく思ひよりなましや、なほかやうのたましひある事は、すぐれたる御房ぞかし。』とこそほめ給ひけれ。實にうけたまはりしに、をかしくこそ候ひしか。されば又聴聞の衆どもさゝと笑ひてまかりかへりにき。いと輕なる往生人なりやな。むけによしなしごとにて侍れど、人のかどくしくたましひあることの興ありて、優におほえ侍りしかばなり。
 法成寺の五大堂供養、しはすには侍らずやな。きはめて寒かりし頃、百僧なりしかば、御堂の北の廂にこそは題名僧のおはせられたりしか。その料にその御堂の廂はいれられたるなり。わざとの僧膳はせさせ給はで、湯漬ばかり給ふ。行事二人に五十人づゝ分たせ給ひて、僧座せられたる御堂の南面に、鼎をたてて、湯をたぎらかしつゝおものをいれて、いみじうあつくてまるらせわたしたるを、ぬるくこそはあらめと、僧だち思ひて、さふさふとまるりたるに、はしたなききはにあつかりければ、北風はいとつめたきに、さばかりにはあらで、いとよくまるりたる御房たちもいまさうじけり。後に「北向の座にて、いかに寒かりけむ。』など、殿のとはせ給ひければ「しかくさぶらひしかば、こよなくあたりまりて寒さもわすれ侍りにき。』と申されければ、行事たちをいとよしとおほしめしたりけり。ぬるくてまるりたりとも、別の勘當などあるべきにはあらねど、殿をはじめ奉りて、人にほめられゆく末にもさこそありけれと、いはれたうはむは、たゞなるよりはあしから